内閣府青年国際交流事業

# 令和6年度
# 「世界青年の船」事業報告書

内閣府

略語一覧

| | | |
|---|---|---|
| 「世界青年の船」事業 | Ship for World Youth Program | SWY |
| 参加青年 | Participating Youth | PY |
| 日本参加青年 | Japanese Participating Youth | JPY |
| 既参加青年 | Ex-Participating Youth | Ex-PY |
| 管理部員 | Administration | ADM |
| ナショナル・リーダー | National Leader | NL |
| サブ・ナショナル・リーダー | Sub-National Leader | SNL |
| ユース・リーダー | Youth Leader | YL |
| アシスタント・ユース・リーダー | Assistant Youth Leader | AYL |
| グループ・リーダー | Group Leader | GL |
| アシスタント・グループ・リーダー | Assistant Group Leader | AGL |
| コース・ディスカッション | Course Discussion | CD |
| ピア・ラーニング・セミナー | Peer-Learning Seminar | PLS |
| 寄港地活動 | Port of Call Activity | POC |
| 地域訪問活動 | Cultural Experience Session | CES |
| 地域実践活動 | Project Based Learning Session | PBL |
| 自主活動 | Voluntary Activity | VA |
| 「世界青年の船」事業事後活動組織 | Ship for World Youth Alumni Association | SWYAA |
| 日本青年国際交流機構 | International Youth Exchange Organization of Japan | IYEO |

内閣府青年国際交流事業

# 令和6年度「世界青年の船」事業報告書

## 目　次


略語一覧 …… 2
カラーグラビア …… 4

**第1章　事業の概要**
1. 目的 …… 21
2. 参加国 …… 21
3. 組織 …… 21
4. 事業の準備日程 …… 22
5. 事業日程 …… 24
6. 経費及び使用船 …… 25

**第2章　事業の実施**
1. コース・ディスカッション …… 27
   1.1 コース・ディスカッション・レポート …… 28
   1.2 地域実践活動 …… 50
   1.3 サマリー・フォーラム …… 54
2. 地域訪問活動 …… 55
3. ナショナル・プレゼンテーション …… 57
4. ピア・ラーニング・セミナー …… 61
5. 委員会活動 …… 68
   5.1 All-PYセミナー委員会 …… 68
   5.2 ディスカッション委員会 …… 69
   5.3 イベント委員会 …… 69
   5.4 ナショナル・プレゼンテーション委員会 …… 70
   5.5 ピア・ラーニング・セミナー委員会 …… 70
   5.6 プレス委員会 …… 70
6. 自主活動 …… 70
7. 事後活動セッション …… 71
8. 石破茂内閣総理大臣表敬訪問 …… 72
9. 佳子内親王殿下御引見 …… 72
10. 管理官報告 …… 72

**関係資料**
1. 参加青年の構成 …… 75
2. 航路図 …… 76
3. 参加者一覧 …… 77
4. 事後活動 …… 97
5. 既参加青年による事後活動組織設立への動きとその歴史 …… 97
6. SWYAA国際連盟について …… 99
7. 事業実績 …… 102
8. にっぽん丸船内配置図 …… 107

# 令和6年度
# 「世界青年の船」事業

## 佳子内親王殿下御引見（令和7年2月20日）

各国ナショナル・リーダー、サブ・ナショナル・リーダー、参加青年代表者

## 石破茂内閣総理大臣表敬訪問（令和７年２月19日）

各国ナショナル・リーダー、サブ・ナショナル・リーダー、参加青年代表者

## 日本参加青年事前研修（令和６年９月11日～９月15日）

内藤信一静岡県東京事務所長による県勢説明

大谷幸生島根県東京事務所長による県勢説明

地域実践活動について、質問をする日本参加青年

閉講式において挨拶する中田昌和管理官

## 東京プログラム（令和７年１月24日～１月27日）

**参集式（令和７年１月25日）**

由布和嘉子内閣府大臣官房審議官（青年国際交流担当室長）による挨拶

ポーランド・ユース・リーダーが参加青年を代表して挨拶

集合写真（全参加者）

### 都内等視察（令和７年１月26日）

東京スカイツリーと参加青年

浅草寺にておみくじ体験

## 船上プログラム（令和７年１月28日～２月21日）

### 出航式（令和７年１月29日）

辻清人内閣府副大臣による挨拶

ペルー・ユース・リーダーが参加青年を代表して挨拶

日本・アシスタント・ユース・リーダーが参加青年を代表して挨拶

辻清人内閣府副大臣、黒瀬敏文政策統括官と内田幸一にっぽん丸船長、各国ナショナル・リーダーによる記念撮影

### コース・ディスカッション

ディスカッションを行う参加青年

発表を行う参加青年

## ナショナル・プレゼンテーション

アルジェリア

オーストラリア

ブラジル

ジブチ

エジプト

日本

オマーン

パナマ

ペルー

ポーランド

セネガル

スリランカ

スウェーデン

## All-PYセミナー

テーマ1：リーダーシップ

テーマ2：異文化理解

## ピア・ラーニング・セミナー

Embracing Nature for a Better Future

Disaster Prevention Seminar

Building Resilience: Cope to be in the Top!

Change Makers

Storytelling Your Own Life

Mastering Creative Thinking: Inside & Outside the Box

## 自主活動

柔道（日本）

"SWY GOT TALENT"

ヒジャブ体験（アルジェリア）

伝統ダンスの習得（ポーランド）

ヘナ・ワークショップ（オマーン）

防災食の紹介（日本）

### 事後活動セッション

事後活動についてアイディアを出し合いまとめる

具体的な事後活動案を発表

## 寄港地活動　静岡県（令和7年２月２日～２月３日）

### 地域訪問活動

循環型農業について、説明を聴く

地元の方と協力しながらマスコット作成体験

米の重量当てゲームを通して交流

緑茶を試飲し味の違いを体験

常葉大学附属菊川中・高等学校にて生徒と交流（LG-A, LG-B）

掛川西高校にて生徒と交流（LG-C, LG-D）

榛原高等学校にて生徒と交流（LG-E, LG-F）

池新田高校にて生徒と交流（LG-G, LG-H）

御前崎小学校にて児童と交流（LG-I, LG-J）

御前崎中学校にて生徒と交流（LG-K, LG-L）

相良高等学校にて生徒と交流（LG-M, LG-N）

浜岡原子力館見学

### 船上レセプション（令和７年２月２日）

増井浩二静岡県副知事による挨拶

セネガル・ユース・リーダーが参加青年を代表して挨拶

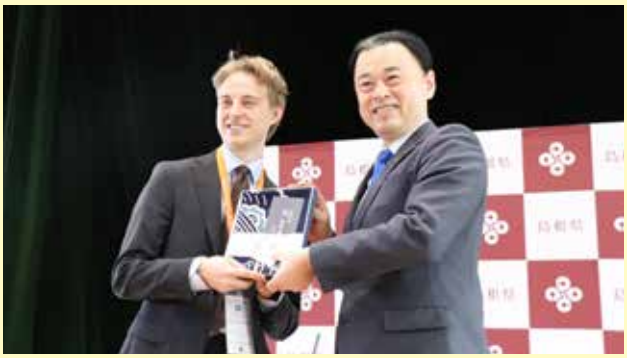
スリランカ・ユース・リーダーが参加青年を代表して挨拶

集合写真（全参加者）

## 寄港地活動　島根県（令和７年２月８日～２月12日）

### 表敬訪問（令和７年２月10日）

丸山達也島根県知事による挨拶



丸山達也島根県知事とスウェーデン・ユース・リーダーによる記念品交換

## 地域実践活動

津和野町にて地域住民と交流

津和野城下町を地元の方と一緒にまち歩き

(CD-1) “学び舎みっけ”にて空き家の再活用について講義を受ける

(CD-1) 菅谷たたら山内にて小型たたら製鉄の操業体験

(CD-2)島根県立大学舞濱社中にて石見神楽の舞の所作を体験

(CD-2)安部栄四郎記念館にて和紙作り体験

(CD-3)島根県立島根中央高校にて制服を着用し日本の授業を体験

(CD-3) 一味同心塾にて意見交換した内容を発表

(CD-4) 浜田市ふるさと体験村で味噌作り体験

(CD-4) 野井漁港にて環境課題を把握し、漁業網のリメイク体験

(CD-5) 大田日本語サークルこだまにて、地域の多文化共生について地元の方とディスカッション

(CD-5) Cooking Parkにて地元の方と交流

(CD-6) 石見銀山みらいコンソーシアムを訪問し地元住民と意見交換

(CD-6) かた゛ゑ庵にて地元青年と一緒に竹のワークショップ

(CD-7) WATOWAにて古民家リノベーション体験

(CD-7) おっちラボにて地域活性化の具体事例を学び、意見交換

(CD-8) 大田小学校にて小学生と一緒に、相互理解や多様性への感謝を育む活動を行う

(CD-8) CNC (Community Nurse Company) 「みんなのお家」にて説明を聞く

## 地域実践活動成果発表（令和７年２月12日）

多文化共生の事例を通して学んだ内容を発表

地域実践活動の経験を共有

美濃亮島根県環境生活部長による講評

島根県実行委員会からの挨拶

## サマリー・フォーラム（令和７年２月20日）

CDの成果を発表する参加青年

CDの成果を発表する参加青年たち

## 解散式（令和７年２月20日）

友納理緒内閣府大臣政務官による挨拶

オマーン・ユース・リーダーが参加青年を代表して挨拶

日本・ユース・リーダーが参加青年を代表して挨拶

友納理緒内閣府大臣政務官と各国ナショナル・リーダーによる記念品交換

解散式に出席する参加青年

友納理緒内閣府大臣政務官、林幸宏内閣府審議官、内田幸一にっぽん丸船長、各国ナショナル・リーダーによる記念撮影

## 解散交歓会（令和７年２月20日）

解散交歓会に出席する参加青年

事業を通じて得た友情を確かめ合うひととき

スウェーデン・ナショナル・リーダーがナショナル・リーダーを代表して挨拶

日本・ナショナル・リーダーがナショナル・リーダーを代表して挨拶

## 参加者の顔ぶれ

### ナショナル・リーダー

各国ナショナル・リーダー

### 参加国

アルジェリア

オーストラリア

ブラジル

ジブチ

エジプト

オマーン

パナマ

ペルー

ポーランド

セネガル

スリランカ

スウェーデン

日本

## ファシリテーター

## 管理部

第１章

# 事業の概要

# 1 目　的

現在、あらゆる分野で国境を越えた協力・調整・交渉が不可欠となっており、その対応を牽引・指導する次世代リーダーが求められている。

こうした観点から、「世界青年の船」事業は、世界各地から集まった参加青年に、ディスカッションや参加青年主体のワークショップ、文化交流を通して、異文化対応力、コミュニケーション力、リーダーシップ、マネジメント力などを向上させる機会を提供するとともに、国境を越えた強い人的ネットワークの構築を図ることを目的とする。

# 2 参加国

| | |
|---|---|
| アルジェリア民主人民共和国 | パナマ共和国 |
| オーストラリア | ペルー共和国 |
| ブラジル連邦共和国 | ポーランド共和国 |
| ジブチ共和国 | セネガル共和国 |
| エジプト・アラブ共和国 | スリランカ民主社会主義共和国 |
| 日本 | スウェーデン |
| オマーン国 | |

合計 13 か国

# 3 組　織

### (1) 管理部

管理部は、本事業の運営管理を行う。

### (2) ファシリテーター

８名のファシリテーター（各テーマ１名）が、コース・ディスカッションを円滑に運営実施するとともに、地域実践活動を主導する。

### (3) 活動単位

#### a. デリゲーション

**(a) ナショナル・リーダー（NL）**

- 自国の参加青年（PY）を統率する。
- NL会議の構成員として、管理部からの依頼に従い、事業期間中の生活、活動の基本的事項について協議し、決定する。
- 所属するレター・グループのグループ・リーダー（GL）を兼務する。
- 日本は、NLを２名置き、１名をSub NL（SNL）とする。SNLはNLを助け、NLと同等の役割を担う。

**(b) ユース・リーダー（YL）**

- 日本以外の参加国はYLを１名置く。日本は、YLを２名置き、１名をAssistant YL（AYL）とする。AYLはYLを助け、YLと同等の役割を担う。
- YL及びAYLはNL及びSNLを補佐し、NL及びSNLが職務を継続できなくなった際の代役を務める。
- 所属するレター・グループのアシスタント・グループ・リーダー（AGL）を兼務する。

#### b. レター・グループ（LG）

事業期間における活動の基礎単位として、各国PYからなるレター・グループ（A～N）を14グループで組織する。各グループには、GLとAGLを各１名置く。

#### c. コース・ディスカッション（CD）

PYは、それぞれ違うテーマについてディスカッション

を行う８つのグループのうちの１つに所属し、グループ内でテーマに沿ったディスカッションを行う。

**d. 委員会**

PY間の交流を図り、相互の有効と理解を促進することを目的とする各種活動を企画・運営するために、PYは、必ず１つの委員会に所属する。

**(a) All-PYセミナー委員会**

全てのPYを対象としたセミナー（All-PYセミナー）の企画・準備・運営を行う。

**(b) ディスカッション委員会**

地域実践活動における成果発表とサマリー・フォーラムの準備・運営を行う。

**(c) イベント委員会**

スポーツレクリエーションとフェアウェル・フェスティバルの企画・準備・運営を行う。

**(d) ナショナル・プレゼンテーション委員会**

ナショナル・プレゼンテーションの準備・運営を行う。

**(e) ピア・ラーニング・セミナー委員会**

ピア・ラーニング・セミナーを主催したいPYの集約、開催日時や開催場所の決定、必要物品の聞き取り等を行う。

**(f) プレス委員会**

報告書用の活動レポートの集約や、PYが企画するイベントの広報、活動の写真撮影を行う。

## 4 事業の準備日程

| | |
|---|---|
| 交流国政府担当者等オンライン説明会 | 令和６年６月 26 日（水） |
| 各国において本事業の業務を所掌する行政機関の職員 ( 及び事後活動組織の代表者 ) に対し、内閣府から、本事業の目的、内容、PY 及び NL の選考・推薦方針等についてオンラインで説明を行った。 | |
| 地域訪問活動実践活動受入県担当者会議 | 令和６年５月８日（水）、８月 28 日（水） |
| 本事業の円滑かつ効果的な実施を図るため、地域訪問活動受入県（静岡県）と地域実践活動受入県（島根県）の担当者（地方自治体職員及び両寄港地の実行委員）が一堂に会し、寄港地活動について対面およびオンラインにより意見交換を行った。また、令和６年12月に、内閣府職員が両県を訪問し、調査を行った。 | |
| 日本参加青年事前研修 | 令和６年９月 11 日（水）～９月 15 日（日） |
| 日本参加青年が事業の趣旨及び目的を十分に理解し、PY としての心構えを養い、日本代表青年としての活動の基本を習得させることなどを目的とし、国立オリンピック記念青少年総合センターにおいて合宿形式で実施した。PY は 12 月に行われるオンライン準備会合や、１月からの本体プログラムに向けて様々な活動単位で準備を進め、日本 NL 及び SNL の主導の下でチームビルディングなどを行った。さらに、内藤信一静岡県東京事務所長及び大谷幸生島根県東京事務所長より、各県の県勢について説明を受けた。 | |
| ファシリテーター・地域実践活動担当者合同会議 | 令和６年８月 10 日（土）、９月 28 日（土）、11 月 30 日（土） |
| コース・ディスカッションと地域実践活動が一連のものとして円滑にプログラムが遂行できるよう、ファシリテーター８名及び地域実践活動実行委員の出席を得て、事業の目的等について認識を共有するとともに、実際にどのような実践活動を行うのかオンラインで意見交換を行った。 | |
| ナショナル・リーダー会議 | 令和６年 10 月 12 日（土）、11 月 23 日（土） |
| 本事業及び PY の活動をより円滑かつ効果的に進めていく上で必要な事前協議を行うため、各国のＮＬが一堂に会してオンラインで実施した。会議では、事業の目的やオンライン準備会合での活動、本体プログラム時の生活面に関する基本ルール等について内閣府からの説明を行った。なお、会議後も NL 間で自主的に本事業実施に関する事項について、綿密な協議が行われた。 | |

| | |
|---|---|
| オンライン準備会合 | 令和６年 12 月7日（土） |
| 事業の趣旨及び目的を十分に理解するとともに、参加国・青年相互の交流を図る目的で実施した。外国参加青年が来日する前に日本参加青年と交流することで、相互理解や友好関係の構築を図り、本体プログラムがより円滑に導入・進行できることも目的としており、公式プログラム外の自主活動及び本体プログラムに向けた準備を通して、PY 間に深い絆が生まれた。 | |
| 本体プログラム | 令和7年1月 24 日（金）～令和7年2月 21 日（金） |
| 全参加者が東京都の都市センターホテルに集まり、本体プログラムを開始した。東京プログラム終了後、 1月 28 日に東京港に移動してにっぽん丸に乗船し、船内及び寄港地（静岡県、島根県）でのプログラムを経て、外国 NL・PY は2月 21 日に帰国の途に就いた。 | |
| 日本参加青年事後研修 | 令和7年2月 21 日（金）～2月 22 日（土） |
| 国立オリンピック記念青少年総合センターにおいて、事後研修を実施した。NL 主導の下事業の振り返りやまとめを行い、今後の社会活動への積極的な参画に資するための方法を探った。 | |

# 5 事業日程

| | | | 9:30-10:30 | 10:45-11:45 | 13:30-14:30 | 14:45-15:45 | 16:00-17:00 | 19:30-20:45 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 1月24日 | 金 | [Japanese PY] 集合・到着オリエンテーション<br>[Foreign PY] 来日・到着オリエンテーション | | | | | |
| 2 | 1月25日 | 土 | 参集式・オリエンテーション | | コース・ディスカッション活動 | 委員会活動 | レター・グループ活動 | アイスブレイク |
| 3 | 1月26日 | 日 | 都内視察 | | | | | 自主活動・ピア・ラーニング・セミナー準備 |
| 4 | 1月27日 | 月 | コース・ディスカッション | | 自主活動 | | レター・グループ活動 | チェックアウト・オリエンテーション |
| 5 | 1月28日 | 火 | 移動 | | | 乗船 | | 船内オリエンテーション |
| 6 | 1月29日 | 水 | 心理学セミナー／避難訓練 | | 船内公開 | 出航式 | 出航 | - |
| 7 | 1月30日 | 木 | コース・ディスカッション | | 委員会活動 | All-PY セミナー | | 自主活動 |
| 8 | 1月31日 | 金 | 公式写真撮影 | | PL セミナー | | レター・グループ活動 | デリゲーション・ミーティング |
| 9 | 2月1日 | 土 | コース・ディスカッション | | コース・ディスカッションのフォローアップ | 委員会活動 | 寄港地活動オリエンテーション | 自主活動 |
| 10 | 2月2日 | 日 | 地域訪問活動（静岡県） | | | | | |
| 11 | 2月3日 | 月 | | | | | | |
| 12 | 2月4日 | 火 | ハーフホリデイ | | 寄港地活動振り返り | | デリゲーション・ミーティング | 自主活動／ナショナル・プレゼンテーション準備 |
| 13 | 2月5日 | 水 | コース・ディスカッション | | ナショナル・プレゼンテーション（BRA,ALG,PER,SRI） | | | 自主活動／ナショナル・プレゼンテーション準備 |
| 14 | 2月6日 | 木 | コース・ディスカッション | | ナショナル・プレゼンテーション（SEN,POL,DJI,OMA） | | | 寄港地活動オリエンテーション |
| 15 | 2月7日 | 金 | コース・ディスカッション | | 移動 | | | |
| 16 | 2月8日 | 土 | 地域実践活動（島根県） | | | | | |
| 17 | 2月9日 | 日 | | | | | | |
| 18 | 2月10日 | 月 | | | | | | |
| 19 | 2月11日 | 火 | | | | | | |
| 20 | 2月12日 | 水 | | | | | | |
| 21 | 2月13日 | 木 | ハーフホリデイ | | 委員会活動 | コース・ディスカッション（14:45-17:00） | ナショナル・プレゼンテーション（SWE）（17:30-18:00） | 自主活動 |
| 22 | 2月14日 | 金 | All-PY セミナー | | PL セミナー（13:30-15:45） | | ナショナル・プレゼンテーション（EGY,PAN,AUS） | 自主活動 |
| 23 | 2月15日 | 土 | 事後活動セッション１ | | 事後活動セッション２（13:30-17:00） | | ナショナル・プレゼンテーション（JPN）（17:30-18:00） | 自主活動 |
| 24 | 2月16日 | 日 | スポーツ＆レクリエーション | | PL セミナー | | レター・グループ活動 | 自主活動 |
| 25 | 2月17日 | 月 | 事後活動セッション３ | | サマリー・フォーラム準備 | | 委員会活動 | 自主活動 |
| 26 | 2月18日 | 火 | フェアウェル・フェスティバル準備 | | | フェアウェル・フェスティバル | | 下船オリエンテーション |
| 27 | 2月19日 | 水 | 事業の振り返り | | サマリー・フォーラム準備 | | [NL/SNL/YL/AYL] 石破総理大臣表敬訪問<br>[PY] 貸出物品回収 | 下船準備・キャビンチェック |
| 28 | 2月20日 | 木 | [NL/SNL/YL/AYL] 佳子内親王殿下御引見<br>[PY] サマリー・フォーラム準備 | | サマリー・フォーラム | | 解散式 15:30-16:00<br>解散交歓会 17:30-19:00 | 下船準備 |
| 29 | 2月21日 | 金 | [Japanese PY] 事後研修施設へ移動<br>[Foreign PY] 帰国 | | | | | |

# 6 経費及び使用船

### （１）経費

令和６年度「世界青年の船」事業の実施にあたり、内閣府は船の運航に要する経費のほか、次の経費を負担した。

① 外国参加青年及びNL並びに外国在住のファシリテーターが、本事業に参加するための、内閣府が指定する自国内における最寄りの国際空港と、羽田空港又は成田空港の間のエコノミー・クラスの往復の航空料金
② 日本在住のファシリテーターが、本事業に参加するための国内往復交通費
③ 外国参加青年、NL、SNL及びファシリテーターの本事業期間中の疾病、事故等に対する保険料
④ 日本ＮＬ及びＳＮＬが、本事業に参加するための国内往復交通費
⑤ 日本参加青年が本事業に参加するために必要な国内往復交通費
⑥ 本事業における、定められた日程に基づく見学等に要する交通費、入場料、宿泊費及び食費
⑦ その他、事業を実施するために内閣府が必要と認める経費

### （２）使用船

令和６年度「世界青年の船」事業では、商船三井クルーズ株式会社所属の「にっぽん丸」を使用し、その運航についても同社に委託した。「にっぽん丸」は全長166.6メートル、総トン数22,472トンの外航客船で、キャビン193室、ホール、ラウンジ、シアター、プール、医務室、洗濯室、食堂、大浴場などを備えている。

第２章

# 事業の実施

# 1 コース・ディスカッション（CD）

コース・ディスカッション（CD）とは、各国のPYが、希望に基づきコースに分かれ、ファシリテーターの指導の下に行われるディスカッション・プログラムである。PYは、８個のそれぞれ異なる、多くの国が直面している共通の課題に関するアカデミックなテーマについて、ディスカッションに取り組んだ。各コースは、22～24名のPYで構成され、PYはCDを通して各テーマの実情について理解を深め、課題解決方法を考えた。また、PYが率直かつ活発な意見交換を通じ、相互理解の促進、文化の異なる集団の中でのコミュニケーション能力を身に付けることも目的とした。

コース・ディスカッションの主な流れは、以下の通りである。

(1) 令和６年１月24日～１月27日：東京プログラム
- CDミーティング　１時間×１コマ
- CD　２時間×１コマ

(2) 令和６年１月28日～２月７日：船上プログラム
- CD　２時間×５コマ

(3) 令和６年２月８日～２月12日：地域実践活動（島根県）
- 各コースのディスカッション・テーマに即した島根県内の関連施設訪問
- ローカル・ユースや有識者等と意見交換
- 地域実践活動での学びや島根県が抱える課題に対する改善策等の成果発表（10分×８コース）

(4) 令和６年２月13日～20日：船上プログラム
- CD　２時間×１コマ
- サマリー・フォーラム準備
- サマリー・フォーラム（10分×８コース）

(5) ファシリテーター

| コース・ディスカッション | 氏名 | 国籍 |
|---|---|---|
| 1. Community Design Utilizing Local Resources | Felipe Salgado de Souza | ブラジル |
| 2. Inheritance of Traditional Culture | Priscilla Madrid Valero | メキシコ |
| 3. Quality Education | Ahmed Abdullah Saad Mohamed | エジプト |
| 4. Environmental Conservation | Chitradarsinee Beekoo Koonja | モーリシャス |
| 5. Social Inclusion of Migrants in Local Community | James Seow | シンガポール |
| 6. Tourism Promotion Utilizing Local Resources | Ari Yuda Laksmana | インドネシア |
| 7. Youth Empowerment in Rural Areas | Ivan Vichr Nisida | ブラジル |
| 8. Quality Welfare Services | Berzenn Urbi | オーストラリア |

## 1.1 コース・ディスカッション・レポート

### CD-1 Community Design Utilizing Local Resources

ファシリテーター: Felipe Salgado de Souza
PY: 23名(NL含む)

#### （1）ディスカッションの目標とねらい

本コース・ディスカッション (CD) は、次の要点に基づいて構成された。

- 世界中の都市部や郊外が直面している課題に対する認識を高める。
- 地域資源を活用した責任ある持続可能な活用に基づくコミュニティ・デザインの取組を促進するための戦略とベストプラクティスについての理解を深める。
- 事業終了後、自らのコミュニティで行動を起こせるように背中を押す。

さらに、以下のスキル、知識、経験が得られた。

- 異文化に対する感受性、コミュニケーション能力、批判的思考力。
- コミュニティデザイン、地域資源の持続可能かつ責任ある活用、人間中心のアプローチ、デザイン思考の概念についての理解。
- 島根県において地域課題に対処し、効果を上げている実際の取組を経験

#### （2）事前課題

本コース・ディスカッションに関する基本概念について知識と理解度の足並みを揃えるために、以下の事前課題が出された。

１. CD-1 コミュニティ評価 – 期待、個人目標、これまでの経験、CDのテーマに対する理解度について情報を集めるためのアンケートへの回答。

２. 写真の共有 – 自らのコミュニティの写真を撮り、自分たちの生活環境とコミュニティのアイデンティティについて考えることが求められた。

３. 私のコミュニティの声 – コミュニティ内のさまざまな人々にインタビューして、魅力的な特徴、課題、帰属意識など、多様な視点を調査することが求められた。

４. 日本と島根県についての探究 – 人口統計、社会的包容力、環境、資源、社会的課題に焦点を当て、日本と島根県の文化的、経済的、社会的背景を調査することが求められた。

５. コミュニティプロジェクト – 人々と生活環境にプラスの影響を与えることを目的とした自国のプロジェクトについて調査するよう求められた。

６. デジタル時代のコミュニティ – コミュニティ構築におけるデジタルプラットフォームの役割について、良い面と悪い面の両方を踏まえた考察を求められた。

#### （3）船内活動

**コース・ディスカッション・セッション１**

**ねらい**

a. CDに関する計画の概要、方法論、目標、原則などを紹介する。
b. CDに関する基本的な概念を紹介する。
c. チームビルディング

**活動**

a. ウォーミングアップとして「クリエイティブ・リンクス」を実施
b. コミュニティデザインと地域資源について紹介する講義
c. グループ活動 - コミュニティデザインと地域資源に関するブレインストーミング

**成果**

a. コミュニティを構成する重要な部分として人間関係の重要性について考察した。
b. 伝統的モデルや人間中心モデルなど、さまざまなコミュニティ設計モデルを理解した。
c. さまざまな種類の資源とその使用方法について話し合った。

**コース・ディスカッション・セッション２**

**ねらい**

a. 包括的かつ構造化された議論を確実に行うための基本ルールを確立する。
b. コミュニティの概念、さまざまなデザインアプローチ、市民の関与について探る。
c. 双方向的な共有を通じて多様なコミュニティについて学ぶ。

**活動**

a. PY主導のディスカッション – コース・ディスカッションの基本ルールを作成。
b. 講義 – 生活環境の設計: 伝統的なアプローチと人間中心のアプローチ。
c. グループ活動 – コミュニティ交流 – 写真の共有と学習。

**成果**

a. 本CDがすべての人に開かれたものであることを保証

する一連の基本ルールについて同意した。
b. コミュニティデザインの基礎とプロセスについてさらに理解を深めた。
c. ポスターを作成し、それぞれのコミュニティの類似点、相違点、改善方法について発表した。

**コース・ディスカッション・セッション３**

**ねらい**
a. 地域資源とそれを効果的に活用するための戦略を検討する。
b. コミュニティ開発におけるさまざまなセクターの役割を分析する。
c. 寄港地活動の準備

**活動**
a. 講義 – コミュニティの資源 – コミュニティの価値を見つける。
b. グループ活動 – 持続可能なコミュニティ設計のためのパートナーシップの実現
c. 静岡県における寄港地活動の準備

**成果**
a. 資源、有形資産、無形資産、およびそれらを効果的に活用する方法についてさらに理解を深めた。
b. コミュニティデザインにおける市民社会、公共部門、民間部門の役割を理解した。
c. 多様な機関や組織を組み込んだコミュニティ開発のためのパートナーシップソリューションを提案した。

**コース・ディスカッション・セッション 4**

**ねらい**
a. 寄港地活動の振り返り
b. コミュニティデザインの概念を日本の文脈に適用する。
c. コミュニティ設計における内部者と外部者の役割を検討する。

**活動**
a. ウォームアップアクティビティとグループでの振り返り：静岡県での寄港地活動について。
b. 講義 - 日本のコミュニティにおける課題と機会。
c. グループでのシミュレーションと反省 - 異文化に対する感受性について。

**成果**
a. 東京都と静岡県の違いについて話し合った。
b. 日本人PYが日本についての授業をリードし、自らの視点を共有し、その他のPYは、自国との比較を持ち寄って授業に参加した。
c. 自身の持つ偏見について振り返り、さまざまなコミュニティ内でのインサイダーまたはアウトサイダーとしての自分の役割をより意識するようになった。

**コース・ディスカッション・セッション５**

**ねらい**
a. 地域実践活動 (PBL) の準備として島根県に焦点を当てる。
b. 島根県の地域としての強みと課題を振り返る。
c. 郊外地域の活性化における青年の役割を評価する。

**活動**
a. ウォームアップ「コミュニティ内で場所を見つける」
b. 島根県についての講義
c. グループ活動 - 青年の役割 - ケースシナリオ

**成果**
a. よく訪れる場所以外にも視野を広げて自分たちのコミュニティを理解することの重要性について考えた。
b. 島根県とその地域資源、課題、機会についての理解を深めた。
c. 島根県の現状の事例をもとにしたプロジェクトに関するプレゼンテーション

**コース・ディスカッション・セッション６**

**ねらい**
a. リーダーシップスキルを涵養する。
b. PBL活動におけるプロジェクト開発のためのフレームワークとガイドラインを適用する。
c. コミュニティのデザインとエンゲージメントにおけるテクノロジーの影響を探る。

**活動**
a. ウォームアップ「リーダーシップと青年主導のプロジェクト」
b. 講義 -「存在し、つながり、行動する」- デザイン思考と問題解決アプローチ
c. グループ活動「デジタル時代のコミュニティー テクノロジーの力で島根県をもっと魅力的に」

**成果**
a. リーダーシップを、単に割り当てられた役職ではなく、態度によって決まる概念として認識する。
b. 基本的なプロジェクトフレームワークとそれをPBL活動で活用する方法について知識を得た。
c. コミュニティ構築におけるテクノロジーの役割を分析し、デジタルプラットフォームを効果的に活用するための機会、課題、戦略について検討した。

**コース・ディスカッション・セッション７**

**ねらい**
a. PBLから得た重要な学びと成果について確認する。
b. このコースのディスカッションの主な成果についてまとめる。
c. 事後活動 (PPA) のための実行可能な計画を策定する。

**活動**
a. まとめ講義 - コミュニティの再構築 - CD-1の成果

b. 事後活動についての講義とブレインストーミング
c. グループ活動「本事業終了後に取り組みたい活動は何か」

**成果**

a. 島根県でのPBLから得た重要な教訓を共有し、それが日本および郊外地域に対する認識に与えた影響について振り返った。
b. CD当初の期待と目標を再確認し、自分たちの成果、経験、将来の計画を振り返った。
c. 事後活動の計画をブレインストーミングし、それぞれの興味に基づいてグループを結成した。

### （4）サマリー・フォーラム

**準備**：まとめの活動を通じて、学んだこと、重要なポイント、今後の計画を総括し、ディスカッション成果のまとめに対してメンバーが平等に参加できるようにした。また、小チームに分かれて、それぞれがサマリー・フォーラムの進行、タイムキーピング、ビデオ制作、スライドの準備、プレゼンテーションなど、具体的な役割を担当した。

**プレゼンテーション**：サマリー・フォーラムでは、５人がCD-1を代表して発表した。全員参加型とするため、すべてのメンバーの写真とビデオがプレゼンテーションに組み込まれた。CDの目的と対象範囲の概要に加えて、プレゼンテーションでは、コミュニティデザイン、地域資源、コミュニティの人々という３つの主要トピックに焦点を当て、それぞれの学んだこと、ポイント、今後の取り組みについて検討した。総意として、「自国の地方及び農村地域についてのプロモーションや調査を通じて、その独自性に対する認識を高め、その発展に貢献する」ことを表明した。

### （5）自己評価（PYによるフィードバック）

セッション終了時の振り返りやファシリテーターに提出された匿名フォームを通じて、コース・ディスカッション全体を通じたフィードバックを行った。全般としては、ディスカッションの内容と構成に満足しており、プログラムが進むにつれて、ますます力と意欲が高まっていると感じられた。

また、PBL活動に関しては、期待とタスクに関する当初の不安は、島根県での最初のセッションで克服された。このセッションでは、現地を訪れ、コミュニティの変化を推進する実際のプロジェクトを観察した。この経験により、自身の関与に対する意欲が深まり、コミュニティ主導の変化に対する視点が広がった。

最終回では、CD-1に参加できたことに感謝し、築いた絆の価値が強調された。本CDは、充実感、達成感、本CDで行った数々の活動の記憶を共有して幕を閉じた。

### （6）ファシリテーター所感

CD-1のファシリテーターとして、これ以上ないほどの誇りを感じている。ディスカッションから島根県での発表、そして最後にサマリー・フォーラムでの素晴らしいパフォーマンスまで、各セッションを通してPYの成長を目の当たりにできたのは光栄だった。彼らの献身、チームワーク、熱意がこの旅を本当に有意義なものにしてくれた。

PYが自分自身に対する挑戦を行い、有意義な繋がりを築き、自信を持って自らの考えを表現できる環境を育んだことに感謝している。事業を通してPYの関与が深まり、自信が増すのを目の当たりにすることができ本当にやりがいを感じることができた。

本事業の旅は始まりに過ぎず、PYが地域社会やその先で変化をもたらし続けることは間違いない。PYがどこへ向かっていくのか、楽しみにしている。ONE、ONE、CD-1！

## CD-2 Inheritance of Traditional Culture

ファシリテーター: Priscilla Madrid Valero
PY: 24名(NL含む)

### （1）ディスカッションの目的とねらい

- 伝統文化を保存し共有するための実用的な手段を学ぶことを目的とする。
- 世界中から参加しているPY同士の伝統と文化を学ぶ。
- 多文化コミュニケーションや対話、文化に配慮したリーダーシップやチームワークなどのスキルを強化・向上する。
- パブリック・スピーキングと創造的スキルを実践する。
- クリティカル・シンキングの視点を向上させ、伝統を保存する戦略を考案する。
- 文化や伝統を促進すると心に決めて自国に戻る。
- 相互理解と共感を促進することで、多様性の価値を認識し、不慣れな状況でも心地良く接する方法を学ぶ。

### （2）事前課題

- 自身の文化についての短い紹介と好きなものの写真をオンライン・プラットフォームに投稿する。
- 文化スクラップブックを作成するためのノートを持参する。
- 島根県における地域実践活動で訪問する岩見神楽と

安部榮四郎記念館について調べる。
- 任意：「シークレット・カルチュラル・フレンド」アクティビティ
- 任意：本の交換

### （３）活動内容

**コース・ディスカッション・セッション１**

**ねらい**

a. 全員にとって批判されない安全なスペースを作る。
b. お互いを、そして互いの文化を深いレベルで知り始める。
c. 伝統文化に関する自身の考えについて内省し振り返る。
d. 自分の考えを共有することや人前で話すことへの抵抗感を軽減する。

**活動**

a. グループ合意の作成
b. 「ネーム・ポーズ」ゲーム
c. 自身の人生のグラフの作成
d. CDへの期待の定義
e. 事前課題のレビュー
f. 伝統的文化の定義を作る：特徴と事例
g. 振り返り
h. 一言エクササイズ

**成果**

a. CDへの期待
b. CDの合意
c. 人生の視覚的グラフ
d. 各自の文脈に慣れる
e. グループによる伝統文化の定義

**コース・ディスカッション・セッション ２**

**ねらい**

a. 伝統文化がどう持続可能な開発目標と繋がるかを考える。
b. 文化や伝統を分析するための実用的スキルを身につける。
c. 自分たちの生活における文化の役割やグローバル化した現代世界における伝統とその重要性を考える。

**活動**

a. 「ネーム・ポーズ」ゲーム
b. 前セッションの振り返り
c. 一緒に物語を作る即興活動
d. 自身の文化についてのプレゼンテーション
e. 持続可能な開発目標（SDGs）についてのプレゼンテーション
f. 個人およびチームでの、好みのSDGsを基にした文化と伝統のプロジェクトの作成
g. 私たちの生活における伝統の役割についての考察
h. 振り返り
i. 一言エクササイズ
j. 「シークレット・カルチュラル・フレンド」による交流

**成果**

a. 互いの文化、伝統を学んだ。
b. 創造性と傾聴を実践した。
c. SDGsやそれらがどう自身の生活と結びつくかについて学んだ。
d. 自身の意見を共有することへの抵抗感が軽減された。
e. プロジェクト企画について考え始めた。

**コース・ディスカッション・セッション３**

**ねらい**

a. クリティカル・シンキングのスキルを養い、強化する。
b. 異文化間の対話を促進する。
c. 現在の伝統と文化の歴史の重要性について考える。

**活動**

a. 前セッションの振り返り
b. 「ネーム・ポーズ」ゲーム
c. 「５つのもの」ゲーム
d. 自身の文化についてのプレゼンテーション
e. SDGsプロジェクトを振り返りPPAになり得るかの検討
f. 伝統のネガティブな側面についてのディスカッションや、それを変えるための提案作成
g. より包摂的な文化を作る方法と多文化な場面でハラスメントを避ける方法の提案作成
h. 「私にとっての伝統文化の意味」の描写
i. 振り返り
j. 一言エクササイズ
k. 匿名フィードバック
l. 秘密の文化的友だち交流

**成果**

a. 伝統文化の保存についての内省およびクリティカル・シンキングを実践した。
b. 実社会での場面を想定した提案作成を練習した。
c. 人前で話すことへの抵抗感がさらに軽減した。
d. 伝統の重要性を非言語的に伝える方法を学んだ。
e. お互いの文化、伝統を学んだ。
f. お互いにフィードバックを得た。

**コース・ディスカッション・セッション４**

**ねらい**

a. 異文化コミュニケーションを促進する。
b. 効果的なコミュニケーションのためのスキルやツールを構築する。
c. クリティカル・シンキングを応用する。

**活動**

a. 前セッションの振り返り
b. 自身の文化についてのプレゼンテーション

c. 文化スクラップブックの共有
d. グループごとにクリティカル・シンキングとは何か、含まれる段階の定義
e. 植民地化と新植民地化についてのプレゼンテーションと、それらが私たちの文化や伝統に与えた影響についての議論
f. フィードバック
g. 振り返り
h. 一言エクササイズ

**成果**

a. 互いの文化、伝統、文脈を学んだ。
b. 自身のクリティカル・シンキングの定義と段階を構築した。
c. 実生活ケース・スタディにクリティカル・シンキングを適用した。
d. より複雑なトピックについて敬意をもって議論することに慣れてきた。
e. 「シークレット・カルチュラル・フレンド」による交流

**コース・ディスカッション・セッション５**

**ねらい**

a. 伝統文化の継承をめぐる課題解決のための創造的思考を促進する。
b. 伝統文化の保存、促進、継承のための実践的スキルとツールを学ぶ。
c. チームワーク、協働、交渉を実践する。
d. リーダーシップ・スキルを向上させる。

**活動**

a. 前セッションの振り返り
b. 自身の文化や伝統の共有
c. チームごとに以下の伝統文化の保存モデルのひとつを活用したプロジェクトの考案；
   * コミュニティ・ベース・モデル
   * 教育モデル
   * デジタル保存モデル
   * 政策とアドボカシー・モデル
   * パートナーシップと協働モデル
   * 経済的エンパワーメント・モデル
d. 秘密の文化的友だち交流
e. フィードバック
f. 振り返り
g. 一言エクササイズ

**成果**

a. 互いの文化、伝統を学んだ。
b. 伝統文化の保存のための実際のモデルを活用したプロジェクトを開始した。
c. 求めるものや興味を共有することへの抵抗感がさらに軽減した。

**コース・ディスカッション・セッション６**

**ねらい**

a. 協働とチームワークの思考を向上する。
b. 自己認識を内省し、感情知能管理ツールを作成する。
c. 伝統文化の継承に関する実際のプロジェクトを構築するように働きかける。
d. 伝統文化をめぐる分野の数について視野を広げる。
e. 伝統文化の重要性に対する認識を深める。
f. 問題解決スキルを向上させる。

**活動**

a. 前セッションの振り返り
b. 自身の伝統や文化についてのプレゼンテーション
c. 全員の匿名フィードバック演習
d. クローズ・ハンド・ゲーム
e. 自主的な最終プロジェクトのプレゼンテーション
f. トピックをひとつ選び、プロジェクトを作成；
   (1) 文化的アイデンティティと移住
   (2) 言語の保存
   (3) 先住民族の権利と文化遺産
   (4) メディアと芸術における文化保存
   (5) 文化的フェスティバルと公的イベント
   (6) 文化遺産と気候変動
   (7) 文化教育と青年の参加
   (8) 文化政策と法制度
   (9) 文化の持続可能性と持続可能なツーリズムのデジタル化と文化
g. 文化日記
h. カルチャー・ショックについてのプレゼンテーションと議論
i. 文化の盗用と文化への敬意についてのプレゼンテーションと議論
j. 秘密の文化的友だち交流
k. フィードバック
l. 振り返り
m. 一言エクササイズ

**成果**

a. 互いの文化、伝統を学んだ。
b. プロジェクトを作成した。
c. 文化や伝統を促進するための自主的な最終プロジェクトを創造的な方法により作成している。
d. 外交と敬意あるコミュニケーションについて考察した。
e. フィードバックをすることに慣れてきた。
f. 世界青年の船における文化をめぐる自身の認識と、他者の視点や境界線をいかに尊重するかを共有した。

**コース・ディスカッション・セッション７**

**ねらい**

a. 実際の課題に、理論を適用できるようになる。
b. 伝統文化の保存に現代のツールを活用できるように

なる。
c. 世界中の国や街の伝統文化についてのより良い理解を自国に持ち帰る。
d. 文化的な最終プロジェクトを行う。
e. 互いに支え合う文化の促進者のコミュニティを作る。
f. 世界青年の船、地域実践活動、CD、実生活から学んだこと全てを結びつける。

**活動**

a. 全セッションを終えた現在の伝統文化についての理解を考察
b. 伝統文化の保存モデルに基づいたプロジェクトのプレゼンテーション
c. 世界青年の船事業後に自国で伝統文化を促進するための行動目標の決定
d. 文化スクラップブックの共有
e. 秘密の文化的友だち交流とそれぞれにとって文化の意味することの手紙交換
f. フィードバック
g. 振り返り
h. 一言エクササイズ

**成果**

a. 人前で話すことやチームで作業することへの抵抗感が軽減された。
b. モデルに基づいた実際の解決策を考案した。
c. 自国に戻った際の行動目標が具体化した。
d. CDで得た学びやスキルをどう実生活で活用するか検討した。

### （4）サマリー・フォーラム

グループとして有意義だったことを発表するプレゼンテーションを作るために、何日も懸命に努力し、リーダーシップやチームワークを大いに発揮した。作業の役割分担や、発表者の決定も公平に行われ、最初は人前で発表することに苦手意識を持っていたPYたちも全員の前で発表した。最高のプレゼンテーションを作ろうと非常に親身に尽力し、発表にそれが表れていた。CD及び島根県での経験が、彼らにとってどれほど大きな経験となったかということが伝わってくる内容であった。

### （5）自己評価（PYによるフィードバック）

PYからの匿名フィードバックの引用：

「ファシリテーターとしてのあなたの仕事ぶりは素晴らしかった。このCDが心から好きになった。」

「あなたは最高の仕事をしたと思う！弱音を吐いてもいいと思えるような安全な環境を作ってくれた。」

「いつも最初に丁寧な説明がされたおかげで、みんなが同じスタートラインに立てたのが良かった。」

### （6）ファシリテーター所感

CD-2のPYが持ち寄った能力に感銘を受けた。歌、詩、絵などを創作して学んだことを表現し、伝統文化を促進するための創造的な方法を披露した。全く異なる背景、文化、宗教、性格の人々がお互いのスキルや才能を称賛しお互いに心から学び合う姿を見て感動した。ほとんどのPYが異なる視点を理解することに熱心だった。チームでともに作業する一方で、個人の視野と意見も構築した。時間の経過とともに自身の意見を大きなグループで共有することに慣れていく様子、人前で話すことにすでに抵抗がなかった人は他の人も話せるように譲ることを学んだ様子を目の当たりにした。CD-2のPYを、そしてお互いを支え合ったこと、安心できる場づくりに貢献したことを誇りに思う。

## CD-3 Quality Education

ファシリテーター: Ahmed Abdullah Saad Mohamed
PY:　24名（NL含む）

### (1) ディスカッションの目的とねらい

1. 質の高い教育の基本を理解する。
2. 持続可能な開発目標（SDG）4（質の高い教育）を分析する。
3. 教育者に必要なスキルを分析する。
4. プレゼンテーションやスピーチを実践する。
5. 学びのユニバーサル・デザイン（UDL）やラーニング・エクスペリエンス・デザイン（LXC）などの学習デザインの様々なフレームワークを探究する。
6. 革新的な教育（ゲーム化、VR、AR）における様々な技術の役割について議論する。
7. 持続可能な教育を実践する。
8. 特別なニーズのある学生を含む多様な学生集団を対象とした包摂的な教育戦略をデザインする。
9. AIが教育に及ぼす影響を探究する。
10. 既存の評価基準を用いて教育経験の質を評価する。
11. 島根県での地域実践活動を通じて、実社会の課題に知識を活用する。
12. SWY終了後に行う教育関連PPAの具体的計画を立てる。

### (2) 事前課題

以下の課題を通して、質の高い教育について調べ、自身の質の高い教育についての理解を確認する:

1. **「Googleスライド」を活用して- お互いを知る：**
   - 課題: クリエイティブな自己紹介スライドを共有されたGoogleスライド上に作成する。
2. **「パドレット」を活用して - 質の高い教育の可視化：**
   - 課題: 共有されたパドレットに、自身にとって質の高い教育を表現する写真を説明とともに投稿する。
3. **読み物：**
   - 課題: 記事「教育の進歩を加速させる革新と技術」を読む。
4. **「TEDトーク」の視聴：**
   - 課題:「若者がより良い未来を築くために私たちにできること」by Henrietta Foreを見る。

### (3) 活動内容

**コース・ディスカッション・セッション 1**

**ねらい**

a. 質の高い教育を定義し、主要な要素を特定する。
b. SDG4を理解し、その柱と対象を列挙する。
c. 質の高い教育を形成する教育者の重要な役割を議論する。
d. 理想的な教育者のスキル、価値観、特徴を探究する。
e. 教育における効果的なプレゼンテーション、コミュニケーション、ファシリテーション・スキルの重要性を理解する。

**活動**

a. アイスブレイク:「期待の木」それぞれの期待を記述し、質の高い教育に関する最初の考えを議論した。
b. グループ・ディスカッション：各グループは質の高い教育を定義し、視覚化した。
c. ワークショップ：効果的な教育者の本質的なスキルや価値観についてブレインストーミングを行い、分類した。
d. 振り返り：異なる文化間における教育の意味について個々の視点を共有した。

**成果**

a. SDG4と世界の教育政策構築におけるSDG4の役割について包括的な理解を深めた。
b. 理想的な教育者を構成する基本的なスキル、価値観、考え方を明確にした。
c. クリティカル・シンキングや協力的な議論スキルをグループ活動により身につけた。
d. 効果的な教育に不可欠なプレゼンテーションやファシリテーションのスキルを強化した。

**コース・ディスカッション・セッション 2**

**ねらい**

a. インストラクショナル・デザイン(ID) とラーニング・エクスペリエンス・デザイン(LXD) の違いを理解する。
b. ADDIEモデル、学びのユニバーサル・デザイン(UDL)、教育目標分類学などのモデルを理解し適用する。
c. 多様な学習者に対応するための様々な指導戦略を探究する。
d. 多様な生徒集団のための魅力的で利用しやすい学習体験をデザインする。

**活動**

a. 比較分析：ADDIEモデルとUDLのフレームワーク及び実際の教育現場での適用を議論した。
b. ケース・スタディ：包摂的な教室におけるUDL導入の成功例を検討した。
c. グループ課題：各チームは異なるフレームワーク(ADDIEモデル、UDL、学習体験プラットフォーム・キャンバス) を用いて15分間の学習セッションをデザインした。
d. 相互評価：デザインした学習セッションについて互いにフィードバックを行った。

**成果**

a. 指導デザインモデルとその適用について深く理解した。
b. 効果的で魅力ある学習セッションを構築する能力を向上した。
c. 多様な生徒のニーズに対応する包摂的な学習方法を構築するために、UDLの原則を活用することができた。
d. 相互の協働や建設的なフィードバックのテクニックを強化した。

**コース・ディスカッション・セッション 3**

**ねらい**

a. 教育テクノロジーの進化と学習体験への影響を調べる。
b. 現代教育におけるAI、VR、AR、ゲーム化の革新的な役割について議論する。
c. 学習環境にデジタル・ツールを導入する際の主要な課題と機会を特定する。
d. ChatGPTプロンプト・フレームワークを含む様々なAIツールを教育に応用する。

**活動**

a. 意見交換：エドテック (EdTech) の新たな傾向と実践的応用について探究した。
b. グループワーク：島根県での活動のための技術統合マトリックスを作成した。
c. 実践：AIを使った学習ツールと応用可能性を体験した。
d. SDGsボードゲーム：教育におけるゲーム化の効果を体験した。

**成果**

a. 様々な教育テクノロジーとその利点についての総合的な知識を得た。
b. 教育現場にAI、VR、ゲーム化を取り入れるための戦略を考案した。

c. 教育におけるテクノロジーの倫理的配慮について批評的議論を行った。
d. テクノロジーに焦点を当てたケース・スタディを通して問題解決スキルを強化した。

**コース・ディスカッション・セッション 4**

**ねらい**

a. 教育と持続可能性の接点について理解する。
b. 将来仕事をする時に備えるためのライフ・スキル教育の重要性について議論する。
c. 環境教育が国際的な意識や行動に与える影響を分析する。

**活動**

a. クリエイティブ・ワークショップ：アート作品を使ってそれぞれにとっての環境を表現した。
b. ブレインストーミング：教育カリキュラムへ持続可能性を取り込むための戦略についてブレインストーミングした。
c. ロールプレイング演習：様々なライフ・スキルを応用するタワー・ビルディング演習を通して実社会の課題解決をシミュレーションした。

**成果**

a. SDGsの達成における教育の役割について認識を強化した。
b. 全人的な個人及び職業人の成長に役立つ主要なライフ・スキルを特定した。
c. 環境教育を教育方法に取り入れるための実行可能な戦略を考案した。
d. 実社会の課題に対して複数のライフ・スキルを応用した。

**コース・ディスカッション・セッション 5**

**ねらい**

a. 教育におけるモニタリングと評価（M&E）の主要原則を理解する。
b. 学習成果を効果的に追跡・測定する方法を学ぶ。
c. 教育プログラムを評価するためのM&Eフレームワークを開発する。

**活動**

a. 教育を評価する技術についてのケース・スタディ分析をする。
b. グループタスク：研修後評価フォームをデザインする。
c. 効果評価の好事例について議論する。

**成果**

a. 教育プログラム評価の構造化アプローチについて学んだ。
b. 教育プログラムの評価ツールとフレームワーク開発の体験をした。

**コース・ディスカッション・セッション 6**

**ねらい**

a. 実社会において質の高い教育の原則を適用する。
b. 島根県の地域に根差した教育プロジェクトをデザインする。
c. 持続可能性と包摂性を統合した提案を作成する。

**活動**

a. 地域ニーズ・アセスメントのワークショップ
b. 企画とプレゼンテーションに関するチーム・プロジェクト
c. プロジェクト案についてのフィードバックと相互評価

**成果**

a. 島根県の地域教育の課題に対応するため実行性のあるプロジェクトを構築した。
b. 問題解決や協働のスキルを強化した。

**コース・ディスカッション・セッション 7**

**ねらい**

a. CDを通じた学びの旅を振り返る。
b. CDセッションから得た主要な収穫と貴重な気づきを明確にする。
c. 学んだ概念の個人的および職業人的な応用について議論する。
d. 学んだ知識を自国で実践するための戦略を考案する。

**活動**

a. 人間彫刻アクティビティ: それぞれの経験や学びの収穫を表現する象徴的な彫刻を作った。
b. 学びの旅マッピング：お気に入りの瞬間、主な洞察、CDを通した個人的な成長についてマッピングした。
c. ワールド・カフェ方式ディスカッション:各グループは３テーブルを巡回し以下について議論した；
   - CDで扱ったトピックと目的
   - CDで得た最も価値あるスキルや気づき
   - CDでの学びを自国でどう実施するか
d. 成果発表:各グループは以下を網羅する２～３分のプレゼンテーションを行った。
   - CDのトピックとディスカッション内容の概要
   - 島根県の地域実践活動から得たものを含めた主要な収穫
   - 得た知識を活用する今後の計画

**成果**

a. インタラクティブな活動と振り返りを通じて、CDでの学びを整理した。
b. 質の高い教育の概念を各自の地域の状況に応用するための明確な戦略を構築した。
c. パブリック・スピーキング、協働、創造的なプレゼンテーションのスキルを強化した。
d. ロールプレイイングや議論を通して、学びの実践的な意味合いをより深く理解した。

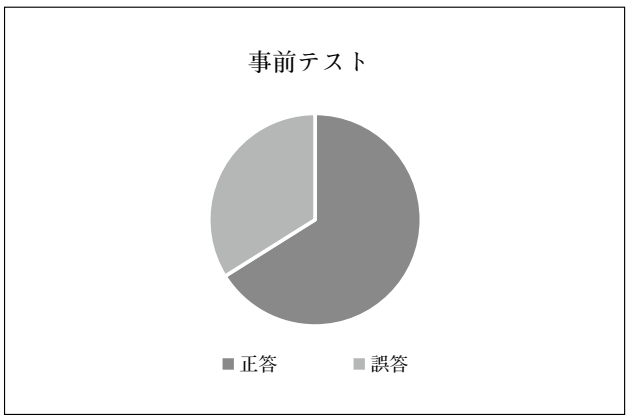
### (4) サマリー・フォーラム

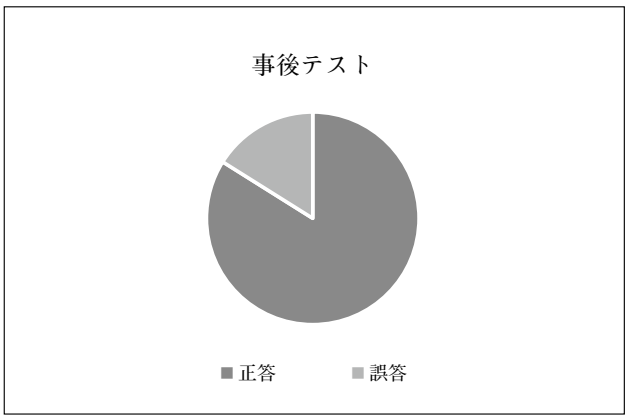
CDから得た気づき、収穫、プロジェクト案を発表した。網羅した主要トピック:

- 質の高い教育とSDG 4：すべての人が包摂的で公平な質の高い教育を受けられるようにすることの重要性、生涯に渡る学習の機会を醸成する教育者の役割を強調。
- 質の高い教育者：効果的な教育者の重要な能力として、リーダーシップ、プレゼンテーション、傾聴、関与、共感、動機付け、包摂性、忍耐力、適応能力などの本質的な価値観とスキルを特定した。
- 教育デザインとUDLの原則：UDLとその利用しやすさへの影響を含め、包摂的な学習体験をデザインするためのフレームワークを探究した。
- 教育テクノロジー：現代教育におけるAI、VR、ゲーム化などの技術進歩の役割を深く堀り下げた。特に、興味をそそるツールとしてのゲーム化、報酬、ランキングシステム、ポイントなどの活用に焦点を当てた。
- モニタリング＆評価：モニタリング活動と評価フレームワークを用いて体系的にプログラム効果を追跡する方法を学んだ。教育の影響を効果的に査定するため、評価の4レベルについて議論した。
- 今後の計画：教育課題に対する革新的な解決方法、リーダーシップ養成、技術を活用した学びの向上に重点を置き、学びを自国で活かすための計画を明確にした。

### (5) 自己評価（PYによるフィードバック）

事前と事後テストの結果は、図のように知識とスキルが大きく向上したことを示した。
事前テストの正解は152/230、事後テストでは193/230であった。




PYからのフィードバック

質の高い教育のコース・ディスカッションはPYからインタラクティブで実用的なアプローチが好評であるという、非常に肯定的なフィードバックを得た。多くのPYは、実践的な演習、ワークショップ、実社会への応用について、学びがより効果のあるものになったと評価した。13か国の青年の多様性は議論を豊かにし、世界的な教育に関する課題に関する視野を広げた。ロールプレイングやワールド・カフェ方式ディスカッションなどの活動について、活発に参加することができたと評価した。ゲーム化、学びのユニバーサル・デザイン（UDL）などの革新的な教育方法は目玉となり、PYは教育における包摂性の強化について刺激を受けた。

### (6) ファシリテーター所感

質の高い教育のコース・ディスカッションは、初めて世界青年の船事業のファシリテーターを担った私にとって勉強になり魅力ある経験だった。PYは、教育に関する世界的な課題と解決策を理解することに深い関心を示した。活発な議論、相互学習、実践的活動を組み合わせることで、ディスカッション・セッションは総合的な経験を提供した。PYの熱意と好奇心はコース・ディスカッションの成功に大きく貢献した。

**良かった点**

- 全PYの高い関心と活発な参加を得た。
- ほぼ全てのPYに適切な英語力があった。
- 実社会で活用できる価値あるプロジェクト案が創出された。
- 多様な視点と経験を通した異文化協働の促進ができた。
- 相互学習テクニックの効果的活用により参加者の関心とモチベーションを保つことができた。

**改善点**

- より深い探究と振り返りを可能にするためにインタラクティブな活動時間をより多く取る。
- 学びの成果を強化するために構造化されたPY同士のフィードバックを後押しする。
- 事業後に学びの効果を持続するため更なるフォローアップ資源もしくはメンタリング機会を提供する。

## CD-4 Environmental Conservation

ファシリテーター: Chitradarsinee Beekoo Koonja
PY: 22名（NL含む）

### （1）ディスカッションの目標とねらい

- 世界と日本の環境問題についてブレインストーミングし、理解を深める。
- 世界における気候変動の影響を理解し、それに対する緩和や適応策についてブレインストーミングを行う。
- 持続可能な消費と生産の重要性を理解する。
- 日本および本事業参加国における環境問題に対処するための具体的かつ現実的な行動計画を策定する。

### （2）事前課題

- 気候変動、有機農業、海洋生物多様性など、世界および本事業参加国における一般的および具体的な環境問題に関する調査。
- 初回に、エコロジカルフットプリントについて計算し、その結果について話し合うための準備をする。
- 持続可能な生活やライフスタイルのための解決策を見つけ、他者に対してグリーン文化を取り入れるように促す。
- 静岡県と島根県に特有の環境問題とその対策に関する調査。

### （3）船内活動

**コース・ディスカッション・セッション１**

**ねらい**

a. 現在の環境リスク、原因、環境保全に関連する政策を理解する。
b. 本事業参加国で発生している環境問題とその対策に関する情報を共有する。
c. 将来の世代のために、より持続可能な世界のための行動計画を策定する。

**活動**

a. コース・ディスカッション（CD）の開始時に、CDに参加する各PYに「グリーンリーダー」バッジが配布され、船内およびそれぞれの国で環境保護のアイデアを推進するよう奨励された。
b. 世界経済フォーラムの「世界リスク報告書2025」を参考に、世界に影響を与える主要な環境問題について簡単な紹介が行われた。
c. ワールドカフェ方式を用いて、全員の議論を促し、４つのグループが各国の主な環境問題、その対策、船内や地域社会で取り入れるべき環境に優しいライフスタイルのテクニック、そして将来の世代のために持続可能な世界をどのように創造するかについて話し合った。

**成果**

a. 全員が主要な環境問題について熱心に議論し、グループプレゼンテーション中にこれらの問題を解決するための興味深い解決策を考案した。ワールドカフェ方式により、CDにおける全員の意見が取り入れられた。
b. 国連の持続可能な開発目標（SDGs）に着想を得た「SWY Does Green (SDG)」というスローガンを考え、これを本CDにおける環境スローガンとした。このスローガンは、モチベーションを高めるために、各セッションの最初と最後に用いられた。

**コース・ディスカッション・セッション２**

**ねらい**

a. ２回目のセッションは、にっぽん丸の環境データの収集と船の環境負荷を削減する方法の考案からなる「グリーンにっぽん丸」プロジェクトが主となった。
b. この演習のもう１つの目的は、批判的思考を促し、基本的なプロジェクト管理スキルを身につけさせることであった。

**活動**

a. クルーズ船全般の環境面と影響についてのグループディスカッション。
b. ユニットオペレーション（入力と出力）の概念について簡潔かつ基本的な紹介が行われ、その後、本事業中におけるクルーズ船にっぽん丸の入力と出力についてグループでブレインストーミングを行った。
c. 船上の他のPYの間でグリーン文化を推進する方法についてのグループディスカッション
d. 各グループが調査結果を発表し、全員の貢献に基づいて最終的な入出力をまとめた図が出来上がった。

**成果**

a. 食品廃棄物、エネルギー、水、その他の消耗品という４つの主要分野ごとに、にっぽん丸の乗組員から環境データを収集するための現実的な行動計画を考案した。
b. 同時に、本CDのPYたちは、事業全体を通して取り入れるべき環境に優しいライフスタイルについて、乗組員や他のPYに対して絶えず啓発活動を行った。環境メッセージを活用し、毎日の朝礼ですべてのPYに環境に優しいライフスタイルのコツが伝えられた。

**コース・ディスカッション・セッション３**

**ねらい**

a. 持続可能な開発、持続可能な消費と生産、循環型経済

の基本概念を理解できるように支援する。

b. 持続可能な消費と生産に関する日本の政策について議論し、寄港地である静岡県の「もったいない運動」やその他の環境対策について説明する。

**活動**

a. 循環型経済の概念と、持続可能な消費と生産のために日本に存在する政策について紹介が行われた。

b. 各国における循環型経済の事例や、もったいない運動が静岡県の住民にどのように役立つかについて、グループディスカッションとプレゼンテーションが行われた。

c. 静岡県における主要な環境問題とその取り組み方についても話し合い、静岡県での寄港活動中は、関連する質問を静岡県の住民にすることが奨励された。

**成果**

a. 持続可能な消費と生産、特に「もったいない運動」に関する日本の既存の政策について学び、議論できたことを喜んだ。

b. 静岡県の住民や学生に、地域社会における現在の環境問題とその解決方法について質問するよう奨励された。

**コース・ディスカッション・セッション４**

**ねらい**

a. 気候変動の概念、その原因、世界と自国におけるリスクと結果を理解できるようになる。

b. 気候変動に関する討論やゲーム化の手法を取り入れることで、批判的思考を促進する。

**活動**

a. 気候変動の影響に関する短い紹介ビデオ

b. 「気候変動の影響を最も受けるのは開発途上国か後発開発途上国か」というテーマで、賛成派と反対派の２つのグループによる討論

c. 後半では、気候変動の原因と影響について意識を高めることを目的とした「Climate Fresk」カードゲームを行った。

**成果**

a. ほとんどのPYが気候変動に関する討論を楽しみ、先進国と発展途上国における気候変動の異なる影響について議論が行われたた。

b. 全員が気候変動ゲームも楽しんだ。このゲームは、集団的・協力的な方法を用いて、カードを（気候変動の）原因と結果の正しい順序に並べるものだった。

**コース・ディスカッション・セッション５**

**ねらい**

a. 気候変動に関する２回目のセッションとして、気候変動についての感情や気持ちを共有し、自国における緩和および適応策について話し合う。

b. 島根県での地域実践活動に向けて準備する。

**活動**

a. 気候変動について自らの気持ちを共有し、個人的にどのように貢献できるかについて話し合った。

b. 気候変動についての緩和と適応策に関するグループディスカッションおよびプレゼンテーション。

c. 島根県における地域実践活動と、島根県での本CDが行う課題別視察（やさか共同農場と永幸丸）について説明を受けた。

**成果**

a. 自国で気候変動に対する具体策を考え出す意欲がかき立てられた。

**コース・ディスカッション・セッション６**

**ねらい**

a. 島根県での課題別視察に関連したトピック（有機農業と海洋生物多様性）に焦点を当て、島根県の地域実践活動に備える。

b. 日本と世界における有機農業と海洋生物多様性の概念について議論する。

**活動**

a. 日本（持続可能な食料システムのための「みどりの食料システム戦略」）と世界における有機農業の概念と政策についての簡単な紹介。

b. 日本で有機農業に携わる２人の日本人PYによる経験の共有。

c. 海洋生物多様性のリスクと影響に関するグループディスカッション。

**成果**

a. 島根県における寄港地活動の前に、有機農業と海洋生物多様性の基本的な概念を理解することができた。

**コース・ディスカッション・セッション７**

**ねらい**

a. これまで学んだことを振り返る。

b. 帰国してから、持続可能で環境に優しい社会に向けた事業後の行動計画を準備する。

**活動**

a. 自分たちの世界がどのようになっているか、移行していくためには何をするべきか、どのようにエネルギーを補給するか、そして将来の世代に対する（環境保全に関する）アドバイスという内容で、将来の世代に手紙を書くという振り返り活動を実施。

b. CDで以前に学んだ内容に基づく４つのケーススタディも与えられ、グループで分析し、ケーススタディで学んだ内容とそれをどのように適用するかについて話し合いが行われた。マッキンゼー（McKinsey）の問題ステートメント・ワークシートもディスカッションツールとして用いられた。

**成果**

a. 以前にCDで議論されたテーマに基づいて、実際のシナリオ（ケーススタディ）について議論することができた。
b. 環境保全に関連した事後活動を考案した。

### （４）サマリー・フォーラム

CDで学んだことやグリーンにっぽん丸プロジェクトで得た知見についてうまく準備し、発表を行った。CDの全員がディスカッション、スライドの準備、リハーサルに参加し、貢献できるよう工夫された。

### （５）自己評価（PYによるフィードバック）

４回目のCDにおいて、全員に対してCD評価フォームが配られた。ほとんどのPYはCDの結果に非常に満足しており、さまざまなトピックについて議論されたファシリテーション手法と環境に関する講義を高く評価した。また、事業終了後、CDがいかに本事業における経験をプラスに高めたかについて、非常に良いフィードバックが行われた。

### （６）ファシリテーター所感

私はフランス語話者として、CDにおいて英語をうまく理解したりコミュニケーションしたりできない参加者のため、言語の問題について適切に対応することができた。フランス語を母国語とするPYがCDのセッション中に自分の意見を正しく表現できるようにサポートした。

本事業で始めてファシリテーターを務めたが、本CD「環境保全」の成果に対して非常に満足している。私の目標は、このCDに参加したすべてのPYが将来の環境大使になれるべく力づけることで、この使命はうまく達成できたと思っている。私の専門知識を共有し、本事業の成功に貢献する素晴らしい機会を与えてくださった内閣府の皆様に心から感謝申し上げる。

## CD-5 Social inclusion of migrants in local community

ファシリテーター: James Seow
PY: 23名（NL含む）

### （１）ディスカッションの目的とねらい

a. 受入国における移民の社会的包容力に影響を与えるグローバルな要因を理解する。
b. 受入国における移民、留学生、難民、亡命希望者の融和を支援する概念と枠組みを学ぶ。
c. 移民が歓迎されていると感じられ、帰属意識を持てるようにするための成功戦略を学ぶ。
d. 異文化リーダーシップ、国際協力、紛争解決、社会的ウェルビーイングの概念を学ぶ。

### （２）事前課題

世界中の移民統合と社会的包容力の問題の背景を理解するために、下記の資料を読む事前課題が課された。

- 国連難民高等弁務官事務所: 社会とのつながりを通じた統合の促進
- 国際移住機関：社会的・文化的活動を通じて移民を受け入れ、地域社会への参加を促進するための７つの提言
- スキャンロン財団研究所：社会的結束のマッピング
- 繁栄への道：歓迎されるコミュニティの促進：地域社会とそれを支援する人々のためのツールキット

### （３）活動内容

**コース・ディスカッション・セッション 1**

**ねらい**

a. 協力的で前向きなピアラーニング環境を築くための行動を学ぶ。
b. 異なる文化、学習能力、ワークスタイルの人々と働く方法を理解する。

**活動**

a. アイスブレイク、タワービルディングゲーム、PY紹介
b. ピアラーニングとグループ合意の形成
c. グループディスカッションのトピックの概要
d. 社会的包容力の意味と重要性について討議

**成果**

a. グループワーク、ピアラーニング、チームビルディングの原則（信頼、信頼できる会話、異なる意見を中立的な態度で共有することなど）を理解する。
b. 育み、支え、思いやりのある学習環境を作る。
c. 個人のワークスタイルやコミュニケーションスタイルを振り返り、それがグループダイナミクスに与える影響について考える。

**コース・ディスカッション・セッション 2**

**ねらい**

a. 移住と人間の移動の動機や、プッシュ要因およびプル要因について理解する。
b. 傾聴のスキルを学ぶ。

**活動**

a. 移民や人間の移動に影響を与える世界的な政治的・社会的問題について話し合う。
b. 移住者の、移住の動機となる欲求を満たすためのア

イデアを出し合う。
c. マズローの欲求階層について話し合う。

**成果**

a. より良い生活を求める移民、駐在員、留学生、難民、亡命希望者の事情について理解する。
b. 難民・亡命希望者の安全を守るための政治的・人権的観点を理解する。
c. 安全、キャリア、教育、健康、ウェルビーイング、ライフスタイル、環境、経済、金融、移民や人間の移動に影響する社会的事情についてのプレゼンテーション。

**コース・ディスカッション・セッション３**

**ねらい**

a. 移民にとって手頃で利用しやすい住環境に影響を与える要因を理解する。
b. 移民が安全かつ安心できる住環境を確保するのに役立つグローバルな戦略を学ぶ。
c. 紛争解決能力と政府の政策立案について学ぶ。

**活動**

a. 世界各国からの移民や新たな住民に対する住宅政策について話し合う。
b. 移民や新たな住民のために、住宅や宿泊施設をどのように手頃な価格で、利用しやすく、安全で確実なものにできるかを探る。

**結果**

a. 移民、海外駐在員、留学生、難民、亡命希望者に対する各国の住宅政策に関するプレゼンテーション。
b. 移民コミュニティの住宅集積の是非を学ぶ。
c. 「Not in my backyard（我が家の近くにはお断り）」といった考えや差別、マイノリティストレス、社会的圧力、文化的ステレオタイプなど、移民に対する文化的態度について話し合う。

**コース・ディスカッション・セッション４**

**ねらい**

a. さまざまな移住者グループにとっての仕事と教育に関する事情を理解する。
b. 移民の職業や教育の機会に影響を与えるグローバルな要因を学ぶ。
c. 異文化コミュニケーションの自信を深める。

**活動**

a. 集団的意思決定に影響を与える集団思考と人間の力学を理解するために、結び目ゲームを行う。
b. 仕事や勉強の機会を求めている移民グループのSWOT（強み、弱み、機会、脅威）分析を行う。

**結果**

a. 集団的意思決定におけるリーダーとしての自己認識を深める。
b. 政策決定における盲点、同調圧力、認知的ギャップ、思い込みテスト、コミュニティにおける協議について理解する。
c. 移民グループのキャリアや教育の機会に影響を与える複雑な社会的、政治的、グローバルな要因を学ぶ。

**コース・ディスカッション・セッション ５**

**ねらい**

a. 新たな移民の融和に影響する社会的・文化的要因を理解する。
b. 異文化理解と集団間における共感のスキルを養う。
c. 権力、特権、支配的物語、共通性を認識する。

**活動**

a. Privilege Walk（権力と特権についての意識を高めるための活動）に参加する。
b. 個人の力、特権、社会階級、社会的優位性について話し合う。

**結果**

a. 特権を自覚し、地域社会に前向きな変化をもたらす個人の能力に気づく。
b. マイノリティや移民グループに対する疎外、ステレオタイプ、偏見の複雑な要因を理解する。
c. 政策協議や意思決定にマイノリティの声を取り入れる。

**コース・ディスカッション・セッション ６**

**ねらい**

a. 社会的包容力と結束に影響を与える政治的、社会的、環境的要因を学ぶ。
b. 移民の融和と同化の違いを理解する。
c. 公平性と平等性のテーマについて調査し、それらが移民グループにどのような影響を与えるかを探究する。

**活動**

a. 融和と同化が、社会的結束、文化的アイデンティティ、地域社会のつながりにどのような影響を与えるかについて話し合う。
b. 社会的に不利な立場にある移民グループのレベルアップを支援するために、政府や社会政策がどのように改善されうるかについて話し合う。
c. 世界各地からの移民グループに対する政府および民間セクターの支援の実例について、グループにわかれて共有する。

**結果**

a. 特定の移民グループが、生活の質を向上させる機会を求める際に、障壁、社会的不利、制度的差別に直面する可能性があることを理解する。すべての人が人生の同じ出発点に立っているわけではない。
b. 一般化された言説や社会的圧力が、マイノリティや移民集団の帰属意識にどのような影響を与えるかを理解する。
c. 自分のコンフォートゾーンから一歩踏み出し、英語

で考えをまとめたり、コミュニケーションをとったりすることに自信が持てるようになる。

d. 他の国や文化圏からの参加者と協力してディスカッションを行い、相互学習を強化する能力が向上する。

コース・ディスカッション・セッション 7

**ねらい**

a. 政府、企業、非営利団体、地域社会、教育セクターにおいて、社会的包容力に影響を及ぼすグローバルな問題を検討する。

b. 社会的包容力と結束の概念を現実の状況に適用する。

c. セクター分析、批判的思考、問題解決、リーダーシップのスキルを身につける。

**活動**

a. 政府、企業、非営利団体、地域社会、教育部門における移民の社会的包容力を促進するプロジェクト、政策、法律、キャンペーンに関するディスカッションとグループごとの発表

b. 社会的包容力を強化するための新しいアイデアと解決策の策定

c. 包摂性、多様性、国民としての自己意識に関するノルウェー国王の2016年演説の上映

d. 相容れない考え方からも学びを得られるような批判的な思考能力と包括的なリーダーシップに関するディスカッション

**結果**

a. 日本語サークルこだまと島根県のクッキングパークからの洞察を含む、前回のセッションからの学習の統合

b. 政府、企業、非営利団体、地域社会、教育セクターによる社会的包容力に関する取組についての理解

c. 社会的包容力に対する現在の政策や考え方の限界についての認識

d. 新しい移民をうまく迎え入れ、融和し、彼らのスキルや経験を活用して受入国の経済と 生活の質を向上させるために、個人、組織、地域レベルで何ができるかを理解する。

### （4）サマリー・フォーラム

島根県でのコース・ディスカッションとPBLから得た洞察をまとめた。彼らは、社会的包容力の意味を説明し、自国での観察や経験に言及した。また、移民、駐在員、留学生、難民、亡命希望者が国境を越えて移動する原因となるプッシュ要因とプル要因について説明した。パナマ、エジプト、オーストラリアにおける住宅問題が言及され、エスニック・コミュニティーの集積の是非が議論された。オーストラリアでの英語表記の名前、ブラジルで日本の祝日を祝う日系ブラジル人などを例に、融和と同化の長所と短所を説明した。ゲームを通して、参加青年は集団的意思決定と一般化された言説の複雑さ、政策決定に移民の声を取り入れる必要性を理解した。

Privilege Walkでの反省を分かち合い、移民がその環境によって、どのように公平に扱われるか、あるいは平等に扱われるかについて説明した。彼らは、ペルー、オマーン、日本といった国々の政府、企業、非営利団体、教育分野における社会的包容力についての取り組みに触れ、移民は受け入れ国にとって財産であり、社会的包容力はすべての人が活躍できる機会を引き出す鍵である、と結論づけた。

### （5）自己評価（PYによるフィードバック）

グループが議論したコンセプトの実践として、非排他的な雰囲気の中で全員がコース・ディスカッションに貢献したことを高く評価した。様々な国の実例を共有することで洞察を得たほか、小グループでより多くのディスカッションを行うことを希望していた。コミュニティリーダーシップ、国民としてのアイデンティティ、亡命希望者のような十分な権利を与えられていない移民グループの課題について、ディスカッションを楽しんだ参加者が多かった。特に、結び目ゲームやPrivilege Walkを通して、自分の世界観や権力、社会的地位について、より自覚的になったようだ。

### （6）ファシリテーター所感

様々な経歴を持つPYが参加したコースでのディスカッションをファシリテートできたことは、大きな喜びであった。互いに会話の場を惜しみなく共有し、英語でのコミュニケーションに自信のないPYや、ディスカッションのテーマについて経験の浅いPYをサポートしていた。それと同時に、PY間の能力、スキル、経験の大きな違い、特に英語力、コミュニケーション力、テーマに関する知識の違いを調整するのは難しいことであった。私は、正式なディスカッションの時間以外でも、何人かのPYに個別のサポートと授業を実施し、彼らが遅れを取り戻せるようにした。このプログラムの最もやりがいのある部分は、各セッションを通して、数名のPYが飛躍的な進歩を遂げ、人前で話すことに自信を持ち、社会的包容力、公平性、多様性、社会的責任についてより深い理解を得ているのを目の当たりにしたことである。私は、PYがディスカッションのトピックを超えて学び、成長できるように、自己認識、異文化間リーダーシップ、コミュニケーションスキルをセッションに取り入れた。

## CD-6 Tourism Promotion Utilizing Local Resources

ファシリテーター: Ari Yuda Laksmana
PY: 24 名 (NL含む)

### （1）ディスカッションの目的とねらい

- 出身国における観光の主要概念、実践、課題、重要性を理解し、国連のSDGsに沿った取り組みを提案する。
- 地域の観光商品を特定し、その国際的な可能性を評価し、農村コミュニティを支援するための戦略を開発する。
- 青少年のネットワークを強化し、持続可能な観光についての気づきと参画のためのプラットフォームを作る取り組みに協力する。
- 関係者との強力なパートナーシップを通じて、経済と国の発展の原動力として持続可能な観光を推進するうえで積極的な役割を果たすよう鼓舞する。

### （2）事前課題

- CD-6メンバーのバイオカードに記入し、持続可能な観光について意見を述べる。
- SDGs、カスタマージャーニー、インフィニティ・ループ・マーケティングに沿った持続可能な観光、観光商品、地域密着型観光 (CBT) のキーコンセプトと好事例を学ぶ。
- 石見銀山みらいコンソーシアム＆ゲストハウスかたえ庵に関する資料を探す。
- 自国の観光名所や特産品を紹介する絵葉書を持参する。
- Googleフォームで観光の課題やCBTの取り組みを共有する。
- 観光客としての感情、ニーズ、課題を理解するために、家族、友人、同僚に観光体験について短いインタビューを行う。

### （2）活動内容

**コース・ディスカッション・セッション 1**

**ねらい**

a. お互いを知り、ディスカッションに向けた基礎を作る。
b. 持続可能な観光の定義を共同作成し、SDGs１、８、10、11、17の達成における実際的な役割を探る。
c. 各国の観光商品の共通点、相違点、課題を明らかにする。

**活動**

a. 持ち寄った観光名所や商品の絵葉書を共有し、その絵葉書がその対象をどのように表現しているかを説明し、自己紹介をする。
b. 小グループに分かれ、持続可能な観光を定義する。
c. 観光が国連のSDGs１、８、10、11、17にどのように貢献できるか、またどのように連携できるかについて話し合う。
d. 持続可能な観光を目指す上で、各国における現在の観光商品の課題、共通点、相違点を探る。

**成果**

a. 他のPYのことを知り、絵葉書を通して様々な観光の魅力について視野を広げた。
b. 「観光」と「持続可能な観光」の違いをより明確に理解できた。
c. 各国間で共有されている観光の課題とSDGsとの関連性を認識した。

**コース・ディスカッション・セッション 2**

**ねらい**

a. 持続可能な観光における地域密着型観光 (CBT) の役割を理解する。
b. SWOT (強み、弱み、機会、脅威) 分析とTOWS (機会×強み・機会×弱み・脅威×強み・脅威×弱み) 分析を用いて、各国のCBTの現状を分析する。
c. 持続可能な観光の促進における地域密着型観光組織の役割を明確にする。

**活動**

a. アイスブレイク:「シップ・ファクトリー」シミュレーション
b. 各国の地域密着型観光組織の共通点とSDGsとの整合性について話し合う。
c. SWOTマトリックス分析を用いて、現在のCBTの在り方を明確化する。
d. TOWS マトリックスを用いて、CBT が課題を克服し、持続可能な観光の推進における地域密着型観光組織の役割強化のための実践的な協働アプローチをブレインストーミングする。

**成果**

a. CBTとその課題、地域密着型観光組織の役割とSDGsについての理解を深めた。
b. CBTの実践を評価するためのSWOT分析スキルを向上させた。
c. 地域密着型観光組織イニシアチブを通じた観光の課題に対する、実践的な解決策を考案した。

**コース・ディスカッション・セッション 3**

**ねらい**

a. 観光産業におけるデザイン思考の概念を理解する。
b. 観光におけるニーズと課題を特定することで、観光客の声を把握する。
c. 観光におけるカスタマージャーニーを分析し、重要

な弱点を特定する。

**活動**

a. アイスブレーク：カルンバ・チャレンジ
b. 共感マップキャンバスを使い、観光客が直面する問題と利益を特定する。
c. 観光客の願望や期待など、観光客のペルソナ（特性）について話し合い、定義する。
d. カスタマー・ジャーニー（顧客が商品・サービスを認知してから購入に至るまでの一連のプロセスを旅に見立てた概念のこと）を作成し、各観光客の特性の核となる問題と改善点を突き止める。

**成果**

a. 観光客の感情、思考、行動を分析することにより、共感能力を高めた。
b. 様々な観光客の特性に対する理解を深めた。
c. 様々な観光客の特性が直面する主な問題や課題を認識した。

**コース・ディスカッション・セッション 4**

**ねらい**

a. 静岡県での活動から、観光関連の側面に焦点を当てた重要な学びと洞察について考察する。
b. CBTの原則、利点、強み、機会に沿った、観光客特性のニーズと課題に対応する解決策を開発する。

**活動**

a. アイスブレーク：「脳」エクササイズ
b. PYによる写真コンテストを通して、静岡県での経験を振り返る。
c. 結果ベクトルツールを使って、CBTの12の利点を取り入れた解決策を考える。
d. トライプランナー・ディズニーDRCツールを使って、アイデアを絞り込み、具体化する。

**成果**

a. SDGsに沿いながら、どのようにCBTイニシアティブに貢献できるか、静岡県のキウイフルーツカントリー訪問からインスピレーションを得た。
b. 観光の課題に効果的に対処する創造的で分析的な解決策を開発できた。

**コース・ディスカッション・セッション５**

**ねらい**

a. CBTイニシアチブを促進するためのマーケティングメッセージとインフィニティループマーケティングのコンセプトを理解する。
b. SPOCKの原則を用いて、CBTイニシアティブのための説得力のあるマーケティングメッセージを開発する。
c. インフィニティ・ループ・マーケティングを用いて、CBTイニシアチブを推進するための革新的な戦略を立案する。

**活動**

a. ブレインストーミングされた取り組みを実行できるようにサポートするための実行可能なアイデアを開発すべく、地域密着型観光組織グローバルサミットを船上で初開催
b. SPOCKの原則を使用して、さまざまな観光客の特性や利害関係者に合わせたCBTイニシアチブの説得力のあるマーケティングメッセージを作成
c. インフィニティ・ループ・マーケティング戦略のためのクリエイティブ・アクションをデザインし、インフィニティ・ツアーを継続することにより、アイデアを洗練・充実

**成果**

a. 全国的なCBTイニシアチブを支援するための協力的な取り組みとして、ワークショップの開催とクラウドファンディングのアイデアを最終決定
b. 各観光客ペルソナの説得力のあるマーケティング・メッセージをフック化
c. 小グループごとに市場活動の完全な無限サイクルを作成

**コース・ディスカッション・セッション 6**

**ねらい**

a. インフィニティ・ループ・マーケティングの実施をサポートしてくれる主要なステークホルダーを特定すること。
b. Effort/Impact/Readiness Matrixを使用して、潜在的パートナーシップに優先順位をつける。
c. 島根県でのPBLに関連した批判的な分析とアイデア出しを行う。

**活動**

a. 各関係者に期待するパートナーシップ支援の種類を特定し、「努力／影響」及び「影響／準備」マトリックスを用いて潜在的戦略的パートナーをマッピングする。
b. 石見銀山みらいコンソーシアムおよびゲストハウスかたえ庵の事例を分析し、SPOCKに基づくマーケティング・メッセージとそのインフィニティ・ループ・マーケティング戦略を開発する。

**成果**

a. 優先順位をつけた潜在的パートナーの明確なリストと、マーケティングイニシアティブに必要な具体的支援
b. PBLに対する問題提起とマーケティングにおける解決策の提案

**コース・ディスカッション・セッション 7**

**ねらい**

a. PBLやプログラム全体のディスカッションから得た主な学びを振り返る。
b. CBT目標達成のためのインフィニティ・ループ・マー

ケティング活動の実施を支援するため、PY間の共同プロジェクトを開発する。

**活動**

a. 船上での地域密着型観光組織グローバルサミットの一環として、アクションプランのアイデアを出し合う。
b. 観光誘致イベントとして、CD-6ロゴコンペティションを開催する。
c. PBLとディスカッションプログラム全体から得た個人及びグループの学びを振り返る。

**成果**

a. 最終的に作成されたCD-6のロゴは、観光を通じた持続可能な世界を象徴するものであった。
b. より大きな「世界青年の船」事業ネットワークである「SWY Without Borders」を活用し、同じ地域に住む「世界青年の船」事業参加者同士を結びつけ、地域社会のイニシアティブを支援するためのデザインソリューションとして、集合的なアイデアを提案した。
c. 個人及びグループによる主な学びと収穫についての振り返りとなった。

### （4）サマリー・フォーラム

始めにCD-6のロゴとその理念を紹介した。その後、主要な学習事項を要約し、観光と持続可能な観光の違い、課題、CBTOのSWOT分析について説明した。そして、観光客の特性について議論し、主要な問題点を特定し、実践的な解決策を提案した。島根県でのPBLからの洞察は、CBTの取り組みとプロモーションの機会について視野を広げてくれた。発表の最後には、「世界青年の船」事業の参加青年が自国で実施する共同イニシアティブと、「世界青年の船」事業の参加青年が「世界青年の船」事業のネットワークやソーシャルメディア、口コミを通じて地域社会を支援するための行動を呼びかけた。

### （5）自己評価（PYによるフィードバック）

- コース・ディスカッションでは多くのことを学ぶことができた。正直なところ、CDを選ぶ際第一希望ではなかったが、参加して後悔はなく、むしろとても楽しかった。
- ディスカッション全体が楽しかった。特に、各国の観光事情を共有できたことは貴重だった。
- 本当によかった。どのセッションもトピックについての理解を深めるのに役立ったし、島根県への訪問では、各セッションでの学びについてさらに理解を深めることができた。
- コース・ディスカッションは、私たちの視点や知識、そして多くの社会的スキルを成長させる機会を与えてくれた。私たちはこの学びを国に持ち帰り、社会、地域、国に貢献することができると思う。

### （6）ファシリテーター所感

すべてのセッションは計画通りに実施され、議論の目的を達成することができた。方法論と時間管理に若干の調整が加えられたが、PYは、持続可能な観光とプロモーションにおける貴重な経験と実践的な知識を得たことを評価し、肯定的な感想を述べた。改善すべき点としては、PYが集中し、参加し続けられるよう、ナショナル・プレゼンテーションやリハーサルで気が散るのを最小限にしてはどうか。さらに、事前にPBLの議題と期待されることを明確にすることで、準備がより充実し、PYと地元の受け入れ側双方にとって議論が深まるだろう。最後に、「世界青年の船」事業のファシリテーターとして私を信頼してくださった内閣府に心から感謝します。

## CD-7 Youth Empowerment in Rural Areas

ファシリテーター: Ivan Vichr Nisida
PY: 24名（NL含む）

### （1）ディスカッションの目的とねらい

**目的**

a. 地方における若者のエンパワーメントに関する批判的思考を養う。
b. 自己認識活動を促進し、PYのつながりを強化する。
c. 世界の青年のエンパワーメントを支援する具体的な活動（「PPA精神」）を創造する。
d. 結束力のあるグループへの健全な参加を促し、多文化環境における調和とつながりに貢献する。

**ねらい**

a. 青少年のエンパワーメント、リーダーシップ、人と人とのつながりに関する利用しやすい知識とツールを提供する。
b. 参加青年がCDセッションを自分たちの現実に引き付けて関連づけることができるよう刺激する。
c. 参加青年が令和６年度「世界青年の船」事業の中でプロジェクトを企画し、実施するよう促す。
d. 理論と実践を組み合わせる（セッション１、２、３ は島根県でのPBLの準備のため、より理論的で、セッション４、５、６はより実践的である。）
e. リーダーシップ、自信、コミュニケーション、ソフトスキルを向上する。

**（2）事前課題**

a. 自己紹介
b. 自国の地方における若者のエンパワーメントに関連するプロジェクトについての研究
c. 島根県、日本の地方、OCCHI LABO、株式会社WATOWAについての研究

**（3）活動内容**

**コース・ディスカッション・セッション１**

**ねらい**

目標

a. 若者のエンパワーメントに関する考察
b. 個人や集団の思考を刺激する。
c. 安全で創造性に富んだ環境での交流

目的

a. CD-7ロードマップの発表
b. 自己認識と強固なコネクションの促進

**活動**

a. 歓迎プレゼンテーション（SWY、CD-7、事後活動、エンパワーメントについての考察）
b. アイデンティティについての創作ワークショップ（あなたは誰ですか？あなたのスキルは何ですか？人生の原動力は？）
c. シェアリング・セッション（２人１組）

**成果**

a. 若者のエンパワーメントに関する認識
b. 自己認識の向上
c. 創作活動への参加
d. 有意義なつながり
e. CD-7への帰属意識

**コース・ディスカッション・セッション２**

**ねらい**

目標

a. 若者のエンパワーメントについての考察を深める。
b. 個人や集団の批判的思考を刺激する。
c. 安全で創造性に富んだ環境での交流

目的

a. CDのトピックを理解するための理論的知識と枠組みを提供する。
b. 各参加国独自の強みについての重要な考察を始める。

**活動**

a. エンパワーメント・ストーリー
b. プレゼンテーション：エンパワーメントとは何か？
c. ディスカッション：あなたの国でのエンパワーメントとは？
d. ワークショップ：ディスカッションのまとめ

**成果**

a. 若者のエンパワーメント（共通点と相違点）について、関連性のある深い話ができた。
b. 視覚的表現による共創的プロセスができた。

**コース・ディスカッション・セッション３**

**ねらい**

目標

a. エンパワーメントの源についてのマッピング
b. 個人や集団の批判的思考を刺激する。
c. 安全で創造性に富んだ環境での交流

目的

a. 若者のエンパワーメントの源泉を理解するための枠組みを提供する。
b. 地方における若者のエンパワーメントを阻害している課題に取り組む。
c. CDと島根県での活動をつなげる。

**活動**

a. エンパワーメント・ストーリー
b. プレゼンテーション：総括セッション
c. ワークショップ：若者のエンパワーメントにかかる枠組みを作成し、発表する。
d. クリエイティブ・ライティング：エンパワーメント・レター（２人１組で作成）

**成果**

a. 若者のエンパワーメントに関する6つの枠組み
b. PYに向けて書かれたエンパワーメントについての手紙
c. エンパワーメントについての手紙に係る活動から自主活動が発案された。

**コース・ディスカッション・セッション４**

**ねらい**

a. エンパワーメントの成功例を提示する。
b. 個人や集団の批判的思考を刺激する。
c. 安全で創造性に富んだ環境での交流

**活動**

a. サッカーを通じてエンパワーメントを推進するプロジェクト、ゴンドワナFC（ブラジル）のドキュメンタリー
b. ドキュメンタリーについてのディスカッション
c. 情熱とエンパワーメントについての考察

**成果**

a. ブラジルの文化と人口におけるアフリカの影響についての認識
b. 情熱、人生の使命、起業家精神に基づく実生活でのエンパワーメントについての深い理解
c. PY間の強いつながり

**コース・ディスカッション・セッション 5**

**ねらい**

a. PBL訪問の準備をし、農村部における若者のエンパワーメントについて理解を深める。
b. 討論や意見交換を活発にする。
c. 安全で創造性に富んだ環境での交流

**活動**

a. PYストーリー
b. トピック別グループディスカッション：日本の地方、日本の若者、地方の長所と短所
c. プレゼンテーション

**成果**

a. 島根県におけるPBLに関連したコア・トピックに関する４つの共同プレゼンテーション
b. エンパワーメント・ストーリーについての自主活動（全バッチ対象）

**コース・ディスカッション・セッション６**

**ねらい**

a. 多文化グループにおけるプロジェクト・デザインの実践
b. 安全で創造性に富んだ環境での交流

**活動**

a. PYストーリー
b. ４グループに分かれてのプロジェクトデザイン活動

**成果**

島根県に向けて４つの青少年エンパワーメントプロジェクトを作成

**コース・ディスカッション・セッション 7**

**ねらい**

a. 地方における若者のエンパワーメントについて理解を深める。
b. 討論や意見交換を活発にする。
c. 安全で創造性に富んだ環境での交流

**活動**

a. フレームワークの発表とフィードバック・セッション（６グループ）
b. 最優秀フレームワークの選出
c. 創作活動：「私たちの最も深い恐怖」

**成果**

CD-7の最終的な枠組み（３グループによる）

### （4）サマリー・フォーラム

サマリー・フォーラムの発表は、特にコース・ディスカッション・アウトラインの当初の目標を考慮すると、本当に成功したといえる。豊かな交流と発見をすべて包括することはできなかったが、CD-7は、努力の成果を遺憾なく発揮した。

10分間のイベントは主に４つのパートで構成された。まず、地方を去る３人の若者、孫娘からの手紙を読む１人の長老、そして村に戻り、そこで未来を築こうとする１人の若者が登場する。次に、力強い導入のスピーチの後、「コースのディスカッション中に傾聴するということを通して、私たちは意図せず互いに与え合い、それがCD-7の礎となりました。私たちにとって、エンパワーメントとはまさにこのことです。」続けて、自分たちにとってエンパワーメントとは何を示すかという言葉のピラミッドを作り、その意味の多様性を示すとともに、それぞれが自分の中にこのテーマをどのように取り込んでいるかを示した。次の段階は、セッションで話し合われた内容、PYが作成した若者のエンパワーメントの枠組み、得たもの、学んだこと、将来の展望など、旅の途中で得た発見や教訓について、力強い発表とスライドを使ったプレゼンテーションで構成された。

次のステップでは、CD-7での個人的な経験に基づき、自分たちの現実を変え、事後活動プロジェクトを立ち上げるための行程を創り上げた。最後に、全員がステージに集まり、紙飛行機に書かれたエンパワーメントメッセージを観客に伝えた。最後にもう一度、SWY2025のスローガンである「一緒にエンパワーメントしよう！」を叫んだ。

結論として、CD-7の参加青年は、（1）地方における若者のエンパワーメントに関する知識、考察、個人的な経験を発表することができた（2）自主活動を通して、他のディスカッショングループのPYに与えた影響を共有することができた（3）エンパワーメントのプロセスに深く関わる創造性を育み、活用することができた（4）グループとしての深いつながり（と愛情）を共有することができた。

### （5）自己評価（PYによるフィードバック）

CD-7が終わるころには、PYはそのプロセスと結果に大きな満足感を示していた（私もそうだった！）。私は以下の点を強調したい：

a. CDセッションや寄港地訪問で、自分の意見を述べたり、ありのままの自分をさらけ出したりすることに、とても安心し、心地よさを感じていた。島根県でのプレゼンテーションと成果発表会での熱心なグループワークは、彼らのつながりと仲間意識の高さを証明していた。彼らは１つのユニットとして機能していた。
b. 活動や交流、特に小グループでアイデアを話し合うことや、体験談を分かち合うセッションによって刺激を受け、力を得たと感じたとのことであった。クリエイティブ・ライティングは、ゆっくりと自分自身とつながるための有意義なひとときでもあった。
c. 最初はCD-7のトピックにあまり興味を持てなかったPYも、プログラムが終わる頃には、若者のエンパワーメントや自分自身について発見したことに、驚くほ

ど興味を示していた。

d. 改善点に関して、過密なスケジュールであったため、内省の時間やダイナミックな活動にもっと時間が必要であると述べた。

e.「セッションから何かを得られるとは思っていたが、最終的に自分が力を得て、発言権を得たように感じることができるとは思わなかった。(CD-7は私にとってSWY2025のハイライトだった。)」

f. 「日常生活の中でエンパワーメントを認識し、受け入れるためのツールを与えてくれた。」

g.「グループやみんなからどれだけ受け入れられ、刺激を受けたか、決して忘れることはないだろう。(中略)セッション中、私は過去の傷跡から癒されたような気がした。」

h.「自分自身への理解がこんなに深まるとは思っていなかった。そして、とても気に入った。すべての発見は、私のキャリアやライフスタイルの強力な基盤になるだろう。私はSWYの後、自分自身と他の人々に力を与えることを約束します。」

i.「CD-7は人間的にも知的にも素晴らしい経験だった。グループのエネルギー、交流の質、議論されたトピックの関連性がこの冒険をユニークなものにした。」

### (6) ファシリテーター所感

まずはじめに、CD-7を進行する素晴らしい機会を与えてくださった内閣府に心からお礼を申し上げます。私はこのトピックを深く楽しみ、PYから多くのことを学び、力をもらったと感じている。また、私たち全員のために、人生を変えるような素晴らしい経験を用意してくれた静岡県と島根県の実行委員会、そして献身的で親切な管理部チームとにっぽん丸の乗組員全員に、ここに感謝の意を表します。最後に、SWY2025の親愛なるファシリテーターチームの皆さんに感謝します。

CD-7のPYがこのプロセス全体に捧げてくれた素晴らしい献身を強調したいと思う。彼らはオープンマインドで、協力的で、私が企画した活動に勇気をもって飛び込んできてくれた。さらに、彼らは仲間に親切かつ協力的で、船内だけでなく船外での活動においても熱心だった。

PY１人ひとりが、それぞれ、エンパワーメントとは何かということについて、真摯で力強い意味付けをすることができていた。私はこのテーマについて、一般的で普遍的なアプローチがあるとは思っていないので、これは集団としての大きな成果だと考えている。私の考えでは、エンパワーメントとは、自分自身と他者とのつながりを持つことであり、そこから生まれた成果が、さまざまな方法（社会的プロジェクト、芸術、職業上の活動、それらすべてを合わせて）で実を結ぶだろう。全員が、自身の持つ力を見つけることができることを心から祈っている。

CD-7のセッションから派生した素晴らしい自主的な活動についても触れておきたい。そのうちのひとつは、すべてのPYに、お互いにエンパワーメントの手紙を書くよう呼びかけたものだ。２つ目の自主活動は、エンパワーメントストーリーを共有するために企画された（多くのCDから24人が参加し、同じ日の午後10時にフォローアップの追加セッションが企画された）。

最後に、私は「世界青年の船」事業が、世界各地でリーダーシップの種をまき、育成するためのユニークなプログラムであると信じており、ここにその情熱と称賛を表明する。「世界青年の船」は濃密で豊かな人間の経験のサンプルであり、私たちが何者であるかを知り、どのように共に生き、互いを尊重し、より良い世界、そして自分自身を追求することを可能にしてくれる。

## CD-8 Quality Welfare Service

ファシリテーター: Berzenn Urbi
PY：23名（NL含む）

### (1) ディスカッションの目的とねらい

社会福祉に対する認識を深める。日本を含む世界の社会福祉実践の社会的、文化的、経済的、政治的背景を理解する。

- 社会政治的認識を深める。世界が直面している様々なグローバルな問題、SDGs達成のために青少年が果たす様々な役割を理解し、地域社会の変革者となるためのリーダーシップ能力を高める。
- 批判的思考と創造的思考：質の高い福祉サービス提供の実現に向け、プレゼンテーションや創造的なプロジェクトを作成するために、様々な情報源（講義、読書、個人的な調査）から得た情報を統合しておくことを勧める。

### (2) 事前課題

事前課題１　私の国の社会福祉プログラム

自分の国や県で現在実施されている社会福祉プログラムを１つ選び、選択した社会福祉プログラムについての観察または分析を行い、500語のエッセイを書く。そのうえで、プログラムを成功させる様々な要因を評価する。

さらに、プログラムが取り組むことができなかったいくつかの齟齬を特定する。

事前課題２　社会的孤立への対応

社会的孤立と孤独は、あらゆる年齢層にわたって、優先すべき公衆衛生上の問題であり、政策課題であると認識されつつある。世界保健機関（WHO）は、孤独を差し迫った世界的な健康上の脅威であると宣言し、この問題に取り組む史上初の国際委員会を発足させた。ユース・リーダーとして、あらゆる年齢層や文化における孤独を緩和・解決するために、自分の国でどのような革新的なプロジェクトを実施するか。

### （３）活動内容

**コース・ディスカッション・セッション１**

**ねらい**

社会福祉プログラムに関する入門的知識を得る

**活動**

a. グラウンドルールの作成
b. 福祉サービスとは何か？：福祉サービスとは何か、様々な社会福祉プログラム、ケーススタディのディスカッション
c. 小グループでのディスカッション：なぜあなたの国では質の高い福祉サービスを提供することが重要なのか？質の高い福祉サービスをどのように定義するか？

**成果**

社会福祉サービスとは何か、世界的に質の高い福祉サービスを提供することの重要性についての入門的知識を得た。

**コース・ディスカッション・セッション２**

**ねらい**

各国の福祉プログラムに影響を与える様々な社会政治的要因について学ぶ。

**活動**

a. 「福祉」と「ウェルビーイング」とは何か？参加国のさまざまな福祉プログラムについてのディスカッション。ケーススタディ。まとめと発表。
b. 福祉サービスと支援。日本における様々な福祉サービスについて話し合う。
c. ウェルビーイングの評価。ウェルビーイングの評価方法についての事例発表。ウェルビーイングと福祉の関係とは？
d. 異なるプログラムにおいて、質の高い福祉を作り上げる要因とは何かについての議論

**成果**

福祉の本当の意味とウェルビーイングとの関係を理解した。また、質の高い福祉サービスとは何かを理解した。

**コース・ディスカッション・セッション３**

**ねらい**

a. 若者の失業を取り巻く社会問題を理解する。
b. 自分自身のリーダーシップの可能性と、自分たちの地域社会で果たすことのできる役割を学ぶ。
c. 社会プロジェクトの設計と実施を体験する。

**活動**

a. 若者の雇用に関する議論。若者の失業に関する事例研究。若者を含むすべての人に平等な雇用機会を提供するために、若者ができることについて小グループで話し合う。
b. 若者のメンタルヘルス問題について話し合う。
c. 事前課題 1 の共有とディスカッション
d. 小グループ活動。プロジェクトの立案と実施。各小グループは、PYのメンタルヘルスを向上させる目的で、にっぽん丸船内で実施する簡単なプロジェクトを作成した。

**成果**

a. 若者の失業に関する入門的な知識と、この社会問題の解決におけるユース・リーダーとしての役割を学んだ。
b. 多様なチームと協力し、リーダーシップを発揮することを経験した。
c. プロジェクトの設計と実施のスキルを身につけた。

**コース・ディスカッション・セッション４**

**ねらい**

介護、医療、高齢者福祉サービスにおける様々なプログラムを理解する。

**活動**

a. 人口の高齢化、健康的な高齢化に影響を与える要因、高齢化社会を取り巻く課題について話し合う。
b. 日本と他の参加国の高齢者福祉政策について小グループで話し合う。
c. WHOによる「国連健康長寿の10年」（2021-2030年）に関するレクチャー
d. コース・ディスカッション・セッション３のプロジェクト提案のプレゼンテーション

**成果**

a. 様々な高齢者福祉プログラムに関する知識を得た。
b. プロジェクトの設計と実施のスキルを高めた。

**コース・ディスカッション・セッション５**

**ねらい**

a. 高齢化社会の原因を学ぶ
b. 健康的に年を重ねることの重要性と、それを達成するための様々な方法を学ぶ

**活動**

a. 健康的な高齢化、高齢化社会の原因についての講義
b. 健康的な加齢についてのディスカッションとアクティ

ビティ

c. 高齢社会による労働力不足に対抗するための労働力移動に関するディスカッション

d. 少人数のグループワークと、自分たちの社会的メンタルヘルス・プロジェクトをどのように船上で実施するかについてのディスカッション

**成果**

a. 健康的に年を重ねることの重要性と、そのための様々な要因について学んだ。

b. プロジェクトのデザインと実施のスキルを高めた。

**コース・ディスカッション・セッション６**

**ねらい**

ウェルビーイングの向上に関する様々な福祉プログラムを理解する。

**活動**

a. 小グループで精神障害について話し合った。精神障害を持つ人々が自国で直面している課題についての話し合い

b. ウェルビーイング福祉プログラムについての小グループディスカッション

c. 世界的に蔓延している孤独と、この問題を解決するために青少年ができることについての話し合い

d. 小グループでのディスカッション：参加青年は事例研究課題を与えられ、グループ内で話し合い、解決策やプログラムを発表した。

e. ブレークアウトセッション：良好な親密関係と幸福度、精神衛生に関するハーバード大学の調査研究についてのディスカッション

f. 事前課題２についてのディスカッション

**成果**

a. 青少年を取り巻く様々なメンタルヘルス問題について理解し、知識を得た。

b. メンタルヘルス問題や孤独感の解決にユース・リーダーが果たす重要な役割を理解した。

**コース・ディスカッション・セッション７**

**ねらい**

a. 社会とのつながりの重要性を理解する

b. ソーシャル・プロジェクト・デザインを理解する

**活動**

a. 社会とのつながりの重要性について話し合う

b. 社会的孤立とウェルビーイングへの影響についての話し合い

c. 島根県でのPBL活動、施設訪問、社会活動の振り返りとまとめ

d. 船上で実施したメンタルヘルス・プロジェクトに関する各小グループの評価発表

**成果**

a. 社会とのつながりの重要性を理解した。

b. プロジェクトのデザインと実施のスキルを高めた。

### （４）サマリー・フォーラム

質の高い福祉サービスに関する重要な概念について、包括的なプレゼンテーションを行った。福祉の定義とウェルビーイングとの関係を探求し、人間関係とコミュニケーションの重要性を強調した。さらに、青少年が直面する世界的なメンタルヘルスの課題、青少年の失業、健康的な加齢についても取り上げた。

また、島根県でのPBLか らの洞察を分かち合い、各セッションを通して行われた様々な活動を振り返った。さらに重要なこととして、彼らは、ブラジル、オマーン、ジブチでの地域看護センターの設立など、プログラム終了後に実施する予定の取り組みについて概説した。さらに、スリランカで英語キャンプを開催し、日本で「SWY Café」を立ち上げ、孤独で孤立している人々が他の人々とつながり、関わることができる安全な空間を提供する予定である。

### （５）自己評価（PYによるフィードバック）

最高のCDだった。Zennはいつも私たちの気持ちを考えてくれた。アクティビティも本当に楽しかった。CD-8ファミリーの一員であることを本当に誇りに思う。

私は本当に愛されていると感じ、CD-8でのすべての瞬間を楽しんだ。

セッションを企画してくれたZennに感謝します。「リレーションシップ（関係性）、リレーションシップ、リレーションシップ...」という言葉を私は一生忘れることはないでしょう。あなたが私のファシリテーターだったことに感謝している。

### （６）ファシリテーター所感

内閣府の皆様、このような機会を与えてくださり、ありがとうございました。「世界青年の船」事業終了後、PYがどのようなインパクトのある社会プロジェクトを実施するのか、とても楽しみである。

船上で、有意義な協力関係が形になっていくのを目の当たりにし、このような協力関係が今後も発展していくことを確信している。すべての参加青年がそれぞれのイニシアチブを成功させることを心から祈るとともに、長期的なネットワークとつながりを育むために、オープン・コミュニケーションのチャンネルを維持することを奨励したい。

私は、「世界青年の船」事業が私の人生に大きく影響してきたと確信している。PYがこの素晴らしいコミュニティを受け入れ、「世界青年の船」事業の枠を超えてその機会を活用してくれることを願う。PYが成長し、障壁を打ち

破り、社会事業を通して前向きな変化をもたらすことを楽しみにしている。

## 1.2 地域実践活動

**島根県における地域実践活動の目的**

島根県での地域実践活動は、船上でそれぞれのコース・ディスカッションのテーマとして設定された社会課題について議論し、知見を深めたPYたちが、島根県で実際に社会課題の解決について取り組む地域の人々との協働を通じて、社会課題の解決法について考える活動である。この活動は、現実の課題の解決について取り組むために不可欠な、国際的な感覚と、地域的な感覚が育まれることが期待される。

島根県は、人口減少に伴う地域課題取り組みの先進地として、地域社会の継続と、次世代への継承をテーマとした８コースのプログラムを設計した。

悪天候による港の変更や、大雪による影響が一部あったものの、大幅なプログラムの変更なく、５日間の活動を行った。

| 日程 | 時間 | プログラム |
|---|---|---|
| 2月8日<br>(土) | 8:00<br>10:30<br>11:00-12:00<br>12:00-12:45<br>13:00-15:40<br>15:40-16:00<br>18:00 | 浜田市発<br>津和野町到着、和太鼓演奏による歓迎<br>昼食<br>オリエンテーション<br>考現学に基づくまち歩き<br>クロージング<br>浜田市着 |
| 2月9日<br>(日) | 8:30-9:30<br>午前 - 午後<br><br><br><br><br><br><br><br><br>17:30-19:30 | 浜田市発<br>CD ごとに関連施設訪問・活動<br>・CD-1　NPO 法人江の川鐵道<br>・CD-2　島根県立大学 舞濱社中<br>・CD-3　島根中央高校<br>・CD-4　有限会社やさか共同農場、株式会社小松ファーム<br>・CD-5　大田日本語サークルこだま<br>・CD-6　石見銀山みらいコンソーシアム<br>・CD-7　WATOWA<br>・CD-8　NPO 法人緑と水の連絡会議<br>帰船 |
| 2月10日<br>(月) | 8:30<br>午前 - 午後<br><br><br><br><br><br>16:30-17:00 | 下船<br>NL, SNL, YL, AYL は島根県知事表敬訪問、その後、堀川遊覧船体験<br>その他、３エリアに分けて島根県内視察<br>・CD-1, CD-5, CD-8　堀川遊覧船・松江城<br>・CD-2, CD-4, CD-6　出雲大社<br>・CD-3, CD-7　足立美術館・安来節演芸館<br>帰船 |
| 2月11日<br>(火) | 8:30-9:00<br>午前 - 午後<br><br><br><br><br><br><br><br><br>16:30-18:00 | 下船<br>CD ごとに関連施設訪問・活動<br>・CD-1　株式会社たたらの里<br>・CD-2　安部栄四郎記念館<br>・CD-3　農事組合法人　石原里田<br>・CD-4　株式会社永幸丸<br>・CD-5　Cooking Park<br>・CD-6　かたえ庵<br>・CD-7　NPO 法人おっちラボ<br>・CD-8　株式会社 CNC<br>帰船 |

| 日程 | 時間 | プログラム |
|---|---|---|
| 2月12日<br>(水) | 9:30-11:00<br>11:30-13:00<br>13:00-14:30<br>14:30-16:00<br>16:40-17:00<br>17:00 | 成果発表準備<br>昼食<br>成果発表<br>船内公開<br>安来節パフォーマンス<br>出航 |

⑴ １日目は全PY共通して、津和野町を訪れた。日本全国の中でもいち早く人口減少や少子高齢化に起因する地域・社会課題に向き合い、それを解決するために取り組んできた津和野町で、参加青年たちは、町の豊かな文化や歴史を体験しながら、地域の課題を探求した。PYたちは、和太鼓のパフォーマンスにより歓迎を受け、昼食を食べた後、津和野町長による挨拶含む、オリエンテーションを実施した。その後、津和野町城下町にて、地域のガイドの方々による、考現学に基づくまち歩きを行い、まち全体を学びの場とし、スケッチをしながら、町を知り、観察し、新しい価値や課題や問いを見つけた。そして、最後には多様な世代や立場の人々へのインタビュー動画を見て、１日目の津和野町での活動を終えた。PYたちはあまりイメージのない日本の地方の課題を体感し、その課題への実際の取り組みの様子を知ることができる貴重な経験となった。

⑵ ２日目はコース・ディスカッションごとに島根県西部にある関連施設に訪問をし、活動を行った。

**CD-1**

CD-1は「Community Design Utilizing Local Resources」をテーマに、邑南町にあるNPO法人江の川鐵道に赴いた。阿須那集落を訪問し、同集落出身の元新聞記者で現在は故郷に帰り集落の再生に取り組む森田一平氏の案内を受けた。阿須那は人口減少および高齢化が進み、多数の空き家が生じるとともに鉄道も廃線となり、集落の持続可能性に課題を抱えている地域である。PYは森田氏によるレクチャーとまち歩きを通じて、空き家をリノベーションしたゲストハウスや本屋、および廃線跡を利用したトロッコ列車の運行など、地域資源の利活用による集落再生について学びを深めた。PYは阿須那に暖かいコミュニティが形成され、それを求めて人々が集う状況に驚くとともに、本屋では森田氏が出版に関わる本も含めて多数の本が販売されていることに興味を抱いていた。

**CD-2**

CD-2は「Inheritance of Traditional Culture」をテーマに、島根県立大学浜田キャンパス内のサークル「舞浜社中」の活動について学んだ。まずは、島根県全体の地域や伝統芸能継承の課題や石見神楽の概要や伝統継承の現状・特質性についてのレクチャーを受け、その上で実際に石見神楽を鑑賞した。その後、グループに分かれて、石見神楽の衣裳・面の着用、大蛇やお囃子、舞の所作を体験した。午後は、大学の生徒や舞浜社中のメンバーも交え、PYより体験の感想が伝えられ、質問も行われた。また、自国の伝統文化継承やスポーツ振興に関するインフラ・制度などについてのディスカッション、PYより今後の伝統継承・インバウンド対応への具体的な提案をするといった活発な意見交換が行われた。PYはプログラムを通して、伝統文化を継承するために変容し続けている活動について体感することができた。

**CD-3**

CD-3は「Quality Education」をテーマに、島根県立島根中央高校に赴いた。“地域みらい留学”の取り組みは、日本全国でも有名であり、学校の先生や行政と何度も議論を重ね、プログラムが設計されたものである。PYの希望者に日本の高校の制服を着てもらい、日本の学校らしく出欠を取るところから始まり、他県から“地域みらい留学”にやって来た３名の生徒の発表や寮の見学、寮の昼食を体験した。PYは、高校の活性化が町の生き残りにつながるという取り組みに感心していた。午後は、若者たちの居場所施設“あそラボ“に行き、大村代表のリードで高校生と「高校生時代にどんな経験を身につけるべきか」、「それを実現するため必要な環境は」をテーマにディスカッションを実施した。PYは、全国レベルの部活を含め、真剣に高校生活を送る生徒たちに最大限の賛辞を送っていた。

**CD-4**

CD-4は「Environmental Conservation」をテーマに、浜田市弥栄町の有限会社やさか共同農場、株式会社小松ファームに赴いた。まずは弥栄支所より、地域としての有機農業の取り組みと課題、やさか共同農場より、これまでの歴史と使命の共有があり、その後、味噌づくり体験や、ビニールハウスの見学、生物多様性の学びとして、野菜の実食と土づくりについて学んだ。そして、小松ファームの課題を聞き、PYでディスカッションを実施した。PYからは、この地域に誇りを持つ人たちと交流できて嬉しいという意見や、地域をあげて、持続可能な農業

に取組んでいることに感銘を受けたといった意見があった。地域の人々も多くのPYが様々な視点で質問をする姿を見て、喜んでいる様子であり、とても実りのある時間となった。

**CD-5**

CD-5は、「Social Inclusion of Migrants in Local Community」をテーマに、大田市になる日本語サークルこだまというボランティアが運営する日本語教室に赴いた。壮大な神楽のパフォーマンスで歓迎を受け、その神楽団で活動する女性から、外国人として日本で暮らす経験と、フィリピン出身で発達障害を持つ高校生の息子が神楽に参加することで成長した経験を聞いた。その後、実際に実施している日本語教室の様子を見学し、サークルのメンバーや学習者が準備した昼食を地域の人々と話しながら食べ、交流を深めた。午後はサークルの平田代表や、在住外国人共生市民の会の青木代表から外国人へのアンケート調査や多文化共生計画などについて説明があった。その後、地域の多文化共生について様々な視点のテーマでグループに分かれ、PYと地域の方とのディスカッションを実施し、大田市の多文化共生の現状や取り組み、課題について知ることのできる機会となった。

**CD-6**

CD-6は、「Tourism Promotion Utilizing Local Resources」をテーマに、大森町の石見銀山みらいコンソーシアムに赴いた。PYは「暮らし」・「観光」・「世界遺産」という３つのテーマに分かれ、街歩きを行い、レクチャー受けた後、地域住民と共に、大森町で学んだことから、地域に対してどのようなことが提案できるかについてディスカッションを行った。地域の暮らしと、観光地としての地域を両立させる地域住民の考えや観光に対する姿勢に、PYは特に感銘を受けていた。全体のプログラムを通して、暮らしと観光を両立させるためのバランスと、地域住民が主体となって考えていくことの重要性について学ぶことが出来た。

**CD-7**

CD-7は「Youth Empowerment in Rural Areas」をテーマに、WATOWAに赴いた。まずPYたちは温泉津町外から移住した若者の中心人物の方と、移住者代表の方の講演を聞いた。その後、現在取り組んでいる、空き家となった旅館の再生現場を訪れ、実際の片付け作業を手伝ったり、空き家を貸本屋にするために芸術的に内装を整備している現場で、壁塗り体験をした。講演を行った代表者２名が、経済的な利益よりも町を活性化させたいという熱い思いから、新たな取り組みを継続的に試みていることに、PYたちはとても刺激を受け、感動している様子だった。プログラム終了後も、PYたちは積極的に活動について議論や質問をしていた。

**CD-8**

CD-8は「Quality Welfare Services」をテーマに、午前中は体育館で大田陸上教室の小学生と、相互理解や多様性への感謝を育むために交流を行った。午後は、青少年の居場所であるサロン・ド・ゆきみーるにて「不登校」「スポーツハラスメント」の対応と課題についてのレクチャーとディスカッションを行った。まず初めに学校教育課・社会教育課といった行政の方々からの不登校やスポーツ活動の現状についての講義を受けた。その後、困難を抱えた子ども・若者の現状と居場所の取り組みについてのレクチャーが、訪問先の代表者よりあり、不登校の予防と対応・スポーツハラスメントの予防と対応という２つのテーマについてディスカッションをした。PYは、これらの問題への取り組みについて意見を交換し、地域の問題の複雑さを認識し、グローバルな視点と地域的な視点を統合した地域主導のソリューションの必要性を認識した。

⑶ ３日目はNL, SNL, YL, AYLは島根県知事表敬訪問、その他のPYは３つのエリアに分かれて施設訪問をした。CD-1・5・8は、堀川遊覧船・松江城を訪れ、松江城の過去と現在、松江市の歴史に触れることができた。CD-2・4,・6は、出雲大社を訪れ、本殿の参拝や、神官から出雲大社の歴史や日本人の宗教観を聞くなど、貴重な機会となった。PYからも参拝者は何をお願いするのかといったような多くの質問があり、出雲大社がこれまで受け継いできた歴史や文化、日本の伝統について学ぶことができた。CD-3・7は、足立美術館・安来節演芸館を訪れ、近代から現代の日本画や広大な日本庭園、安来節の生演奏やどじょうすくい体験など日本の伝統芸能を味わうことができた。

⑷ ４日目はコース・ディスカッションごとに島根県東部にある関連施設に訪問をし、活動を行った。

**CD-1**

CD-1は、雲南市の吉田集落を訪問し、同集落の再生に取り組む企業「たなべたたらの里」の井上裕司氏の案内を受けた。たなべたたらの里は吉田でかつて栄えた伝統的製鉄業「たたら製鉄」を祖業とする島根県の地域コングロマリット「田部グループ」の構成企業であり、地域文化の保存や人口減少問題に取組んでいる。PYはまず、同社の吉田の再生に関する講義を受け、その後、小型たたら製鉄の操業体験、日本で唯一残る江戸時代の製鉄工場の見学などを行いました。こうした体験を通して、PYは、企業が地域活性化を推進できる仕組みや、地域資源の活用の重要性について理解を深めました。

**CD-2**

CD-2は、松江市にある伝統的な和紙の名匠・安部栄四郎の技術と遺志を伝える安部栄四郎記念館に赴いた。和紙作り体験や工房見学、和紙職人や工芸作家・記念館スタッフらとの対話等のインプットを行い、伝統文化を守る意義や継承への課題、課題解決への方策についてディスカッションを行った。和紙の伝統を次世代に継承するためのアイデアとして、和紙独特の風合いを日常生活や特別な機会に取り入れた製品や、ソーシャルメディアやデジタル技術を活用して和紙の魅力を広めることなどが提案された。和紙以外にも、伝統文化の保存に関する国家による保存戦略など、さまざまなアプローチについて、PYは考えた。

**CD-3**

CD-3は、奥出雲町にある農事組合法人石原里田を訪問し、農業体験を通じて日本の地方農業の現状を学んだ。餅つきやおにぎり作りを体験し、地域の食文化に触れながら、農業の役割について理解を深めた。そして、農業法人の代表である和久利氏から、過疎化や後継者不足といった課題について説明を受け、グループディスカッションを実施した。ディスカッションでは、各国の農業課題と解決策を共有し、「都市と地方をつなぐ仕組み」や「若者が農業に関わるための工夫」について議論を深めた。PYは、地域の温かいもてなしと農業への熱意に感銘を受け、農業が単なる生産活動ではなく、文化やコミュニティの維持に不可欠であることを実感した。持続可能な農業の未来を考える貴重な機会となり、奥出雲の農業コミュニティと世界中のPYとのさらなる協力の可能性を生み出した。

**CD-4**

CD-4は、松江市島根町にある株式会社永幸丸に赴いた。野井漁港の見学や、永幸丸の取り組みと周辺地域の環境課題についてのレクチャーを受け、あまり日常的に触れることのない漁業の経験に、PYは感銘を受けていた。都会から移住し、自ら生活や仕事、達成感を生み出していることに驚いたといった感想もあった。また、ウニの殻剥き体験を通し、磯焼け問題や、漁業網のリメイク体験を通し、海ゴミと廃棄問題について体験しながら課題にふれることができた。世界中の海に影響を及ぼす変化や環境問題について話し合う中で、水質汚染が主要な議題として浮上し、PYは、異なる地域が直面する共通の環境問題について意見を交換し、有意義な議論を行った。

**CD-5**

CD-5は、島根県出雲市にある、料理を通じて多文化共生の活動をする管理栄養士の方による料理教室Cooking Parkに参加した。地域に住む日本人、外国人とともに、６グループに分かれ、レシピを考え、グループ別にスーパーに買い物に行き、実際に料理して食べるという交流をした。グループにより、様々な食文化をもつPYがいる中で、試行錯誤しながら、レシピを考え、複数のメニューを作ったりと工夫が見られた。実際に自分で作ったご飯を食べた後、午後は管理栄養士の方の活動の背景など話しを伺いながら意見交換をし、ディスカッションでは同じグループに分かれ、自分たちがつくったもの、他のグループがつくったものについて話し合いをし、食を通して互いの違いについて尊重する姿勢を養うことや、多文化共生について考えを深めた。

**CD-6**

CD-6は、松江市にあるゲストハウス、かたえ庵に赴いた。竹を使ったワークショップ、地域家庭で住民の方々とご飯を食べる民食、かたえ庵に関するレクチャー、レクチャーを踏まえた上での観光のアイデアについて考えるディスカッションを行った。観光地ではない場所において、どのような価値を創出し、どのように人を惹きつけるかがテーマだった。実際の体験やディスカッションを通して、PYは実体験ベースでテーマについて考えることができ、各国で実施できる取り組みの具体的なイメージができた。かたえ庵での活動をモデルケースとして、地域にあるものを活用することで、地域と共存した観光促進の手法や考え方について学ぶことができた。

**CD-7**

CD-7は、島根県雲南市を中心に、地域活性化を支援しているNPO法人おっちラボに赴いた。まず初めに、雲南市の課題、地域活性化のために新しいチャレンジを始める人々への支援内容、U・Iターン移住者が何故多く集まるのかについて学んだ。そして午後は、その話をもとに、実際に、「伝統調味料」「米粉活用」「ショッピングリハビリ」「マッコリ醸造」「古民家活用街デザイン」の５つの活動グループに分かれ、実際に挑戦をしている方々の活動を体験した。地域に根差して生き生きと挑戦する方々の活動を見て、各会場共通して質問が絶えなかった。自国にない文化や環境、新しいシステム・商品を生み出す体制や、島根県だけをよくしたいのではなく、日本をよくしたいという熱い地域の方々の思いに触れ、PYは終始感銘を受けた様子だった。

**CD-8**

CD-8は、日常の暮らしのなかで、住民の肉体的、精神的、社会的な健康をつくる取り組み、コミュニティナーシングを創設し、人材育成を含め社会への普及を図っている、株式会社CNCを訪問した。まずは活動の背景や取り組み内容に関するレクチャーを受け、地域の方々を交えてのおにぎり作り体験や昼食交流を行った。その後、

リラックスお茶会・出張くまっこ喫茶・しめ縄づくりの３つのグループに分かれ、実際に取り組みの体験や地域の方々との交流をした。これらの経験を通して、PYは、お互いに支え合うことの意味や、地域社会のケアが個人の責任を補うことができるということについて考えた。グループディスカッションでは、自国において同じような役割や活動はあるか、人を応援する方法は何か、人が人を支えるとはどういうことなのか、現代社会において計測が難しい価値をどのように捉えるかといった問いに対して、活発な意見交換が行われ、実践した意識的な人々の繋がり構築を母国でも実践したいという声が多数あがっていた。個人の責任で行われるケアから地域コミュニティで行われるケアへのシフトの重要性が学びとなった。

(5) 最終日の５日目に、PYは、地域実践活動での訪問先の関係者が乗船し見守る中、地域実践活動の成果を発表した。それぞれのコース・ディスカッショングループは、４日間の地域実践活動での経験などを発表するとともに、地域課題に対する解決策のアイデアを提案した。PYたちは課題先進地としての課題とそれに対する背景や取り組みを体感することができ、いかに課題を解決することが難しいかを学ぶことができた。成果発表の後には、地域実践活動の関係者向けの船内公開が行われた。PYたちは課題先進地としての課題とそれに対する背景や取り組みを体感することができ、いかに課題を解決することが難しいかを学ぶことができた。

## 1.3 サマリー・フォーラム

サマリー・フォーラムはコース・ディスカッションのまとめとして２月20日に開催された。それぞれのコース・ディスカッション・グループは工夫を凝らした発表を行い、コースを通しての学びを披露した。

参加青年は自分の所属するコース以外のコースの内容を詳しく知らないため、このフォーラムを通して他のコースが何をして、何を学んだのかを知る機会になった。また、他のコースの発表は、さらに広く多様なトピックに興味を持つきっかけとなった。参加青年はフォーラムのためにコースのメンバーと準備や練習を重ねたことで、自身のコースの振り返りができた。

サマリー・フォーラム当日はそれぞれがコース・ディスカッションのメンバーと過ごす最後の時間を楽しみ、他のコースについても知ることができ、すべての参加青年にとって心に残る経験となった。

# 2 地域訪問活動

２月２日から２月３日の２日間にわたり、静岡県での地域訪問活動を実施した。静岡県の活動では、悪天候により、御前崎港から清水港への寄港に変更となったが、大幅なプログラム変更はなく、１日目は全グループ、キウイフルーツカントリーJapanへ訪問し、船内で歓迎レセプションを開催した。２日目は、午前中は２つのレターグループごとに７つのグループに分かれ、静岡県内の７つの小・中・高校、午後は浜岡原子力館を訪問した。

| 日程 | 時間 | プログラム |
|---|---|---|
| 2月2日<br>（日） | 9:00-9:30 | オリエンテーション<br>・地域訪問活動動画紹介<br>・静岡県、御前崎について<br>・プログラム概要 |
| | 11:15-15:00 | キウイフルーツカントリー Japan 訪問<br>・掛川市長より挨拶<br>・農園説明<br>・レターグループ対抗お米の重さあてゲーム<br>・昼食（バーベキュー）<br>・グループワーク（マスコットづくり・バターケーキ作り・お茶試飲体験）<br>・散策 |
| | 17:00 | 帰船 |
| | 18:00 | 船内公開 |
| | 18:30-20:00 | 船内歓迎レセプション<br>（増井静岡県副知事、久保田掛川市長、杉本牧之原市長、下村御前崎市長出席）<br>・開会挨拶：静岡県実行委員長<br>・歓迎挨拶：増井静岡県副知事<br>・青年代表挨拶（２名）<br>・ギフト贈呈<br>・乾杯挨拶<br>・写真撮影<br>・閉会挨拶：杉本牧之原市長 |
| 2月3日<br>（月） | 7:40-8:55 | 下船 |
| | 9:30-13:15 | 学校訪問<br>・１号車（A/B）：常葉大学附属菊川中・高等学校（菊川市）<br>・２号車（C/D）：掛川西高等学校（掛川市）<br>・３号車（E/F）：榛原高等学校（牧之原市）<br>・４号車（G/H）：池新田高等学校（御前崎市）<br>・５号車（ I/J ）：御前崎小学校（御前崎市）<br>・６号車（K/L）：御前崎中学校（御前崎市）<br>・７号車（M/N）：相良高等学校（牧之原市） |
| | 12:20-15:20 | 浜岡原子力館訪問<br>・全体説明<br>・館内見学 |
| | 15:30-16:30 | 帰船 |
| | 17:00-17:15 | クロージングセッション |
| | 17:30 | 出航 |

１日目は、まず静岡県実行委員より船内にてオリエンテーションを実施し、静岡県や御前崎についての説明、プログラム紹介動画の上映やプログラム概要の説明、港の変更によって訪問することのできなかった、ビーチクリーン活動の紹介を行った。 その後、キウイフルーツカントリーJapanを訪問した。静岡県内の中学・高校生もローカル・ユースとして参加し、掛川市長によるご挨拶から始まり、循環型農業を行っている農園の成り立ちや仕組みの説明、レター・グループ対抗のお米の重さあてゲーム、昼食にはバーベキューと施設で出来た様々な種

類のキウイを味わった。午後は、羊毛マスコットづくり・バターケーキ作り・お茶試飲体験の３グループに分かれ、それぞれ体験をし、園内の散策をした。スプーン１杯のキウイの種から始まった、農園内の全てを無駄にしない、持続可能な自然と地球に優しい循環型農法の取り組みを聞き、参加青年たちも貴重な学びとなった。

帰船後は、副知事や訪問先の３市長出席のもと、歓迎レセプションを開催した。静岡県副知事や静岡県実行委員長による歓迎挨拶や、ギフト交換、静岡県のイメージキャラクターであるふじっぴーも参加し、参加青年たちを歓迎した。

２日目の午前中は、７つのグループごとに近隣学校７校へ訪問をした。一部参加青年は民族衣装を着たり、各校で自己紹介や自国紹介などを簡単な英語で話したりと前向きに交流している姿勢が見られた。それにより、生徒たちも積極的に英語で会話をしたりと、参加青年との活発な交流の様子が見られた。

**＜常葉大学附属菊川中・高等学校＞**

高校２年生約50人が集まり、生徒による学校紹介や空手のパフォーマンス、地域への貢献活動紹介や、館長によるプラザきくるの紹介を実施した。その後、参加青年より事業紹介や各国の紹介を実施し、グループに分かれて自己紹介をしたり、お昼ご飯を一緒に食べたりと、高校生との交流を深めた。

**＜掛川西高等学校＞**

高校２年生約40人が集まり、掛川市長が見守る中、参加青年より事業紹介や各国の紹介をし、質疑応答に応じた。その後、トークフォークダンスを実施し、向かい合わせで一対一で様々な会話を高校生と交わした。また、ランチ交流では、英語部の約20人の生徒も加わり、高校生が開発したお弁当を食べながら、さらなる交流を深めた。

**＜榛原高等学校＞**

高校２年生の生徒約85人が集まり、学校からの概要説明、小グループによる交流、校内見学や質疑応答、参加青年による各国紹介や自己紹介を通した生徒とのランチ交流を実施した。

**＜池新田高等学校＞**

高校１年生約95人が集まり、参加青年による各国紹介と事業の紹介、生徒による日本紹介クイズや、生徒による、日本の伝統行事を体験できる節分イベントに参加した。

**＜ 御前崎小学校＞**

小学５年生約35人が集まり、参加青年による各国紹介と事業の紹介、ウミガメの保護活動をテーマとした、児童主体のゲームを通して交流した。

**＜御前崎中学校＞**

中学１年生約110名が集まり、学校からの概要説明、校内見学や質疑応答、16グループに分かれて参加青年による、自己紹介や、各国の特徴や首都の名前、「こんにちは」を各言語で伝えるなど、簡単な英語を使った生徒との交流活動を行った。

**＜相良高等学校＞**

高校３年生スポーツ選択の約25人が集まり、参加青年による各国紹介と事業の紹介や自己紹介、アイスブレイクゲームの実施、簡単な体を動かすアクティビティやランチ交流を実施した。

各学校訪問を終えた後、全PYが浜岡原子力館を訪問した。中部電力職員による浜岡原子力館についての説明、原子力発電の仕組み・安全性向上対策・展望台の３カ所を主とした館内見学を実施した。PYから、自国の視点から見た意見の共有等があり、説明が終わった後に活発な意見交換が続いた。

帰船後は、２日間の活動の終わりとして、静岡県実行委員会によるクロージングセッションを船内で実施した。クロージングセッションでは、実行委員によって作成された２日間の活動の振り返り動画が上映された。多くのPYより、地域訪問活動を通して、静岡県で貴重な経験ができ、充実した学びの体験となったという意見があった。

# 3 ナショナル・プレゼンテーション

ナショナル・プレゼンテーション（NP）は、参加国ごとに、自国の歴史、文化、伝統芸能そして政治や経済等の社会全般について紹介することで、PYが相互に各国について理解を深めるとともに、PYがNPの準備を通じて自国の特徴について再認識することを目的として実施された。NPの内容は各デリゲーションが考え、NP委員会が運営、司会、タイムマネジメントを担当した。

【NPの実施スケジュール】

| 日付 | 実施国 |
|---|---|
| 2月5日 | ブラジル |
| | アルジェリア |
| | ペルー |
| | スリランカ |
| 2月6日 | セネガル |
| | ポーランド |
| | ジブチ |
| | オマーン |
| 2月13日 | スウェーデン |
| 2月14日 | エジプト |
| | パナマ |
| | オーストラリア |
| 2月15日 | 日本 |

【各国NPの概要】

| アルジェリア |
|---|
| テーマ「ストーリーテリング（アルジェリアの歴史と文化）」<br>アルジェリアの歴史について、古代ローマ時代からフランス植民地時代を経て現在に至るまでの様子を紹介。物語形式でプレゼンを実施。毎回アルジェリアのダンスも披露。主に３つのダンスを紹介し、Sahara、Kabylie、PYでのグループダンスを披露。PYに集中して内容を聞いてもらうために最後にプレゼンテーションに関連するクイズを用意。 |
| オーストラリア |
| テーマ「オーストラリアの歴史と文化」<br>オーストラリア代表団は、オーストラリアの概要と、オーストラリアの歴史と文化を紹介するプレゼンテーションを行った。まず、オーストラリアの多様な参加青年を紹介することから始め、次にオーストラリアの先住民の歴史と植民地主義の影響を紹介した。オーストラリアの有名なダンスであるnut bushダンスをみんなに教えた。次にオーストラリアのANZACと発明の歴史について紹介した。オーストラリアのおもしろい事実について、pub triviaの古典的なクイズをした。オーストラリアのスラングについて寸劇で紹介したり、オーストラリアの多文化主義についても紹介した。最後に、オーストラリア参加青年は世界中で有名な“We Are Australian”を歌った。 |

| ブラジル |
| --- |
| テーマ「これこそブラジル」<br>　ブラジルのＮＰでは、ブラジルの豊かな文化、歴史、そして多様性を魅力的かつダイナミックに紹介した。プレゼンテーションは複数のパートで構成されており、最初のスライドショーでは歴史、人口統計、地理、経済、観光、文化、料理、豆知識、スポーツ、祝祭などさまざまなテーマを通してブラジルの全体像を紹介した。それぞれのパートでは、一般的な固定観念を超えてブラジルを深く理解してもらうことを目的とし、私たちの国の強みや課題にも焦点を当てた。<br>　スライドショーに続いて、ブラジル代表団の故郷を紹介する特別な動画を上映した。このパートは、ブラジルの文化とSWYコミュニティをつなげることを意図し、国民の視点を通して国内の多様性を伝えた。<br>　最後に、観客をブラジルのエネルギッシュなダンスの世界へと引き込んだ。このダンスでは、伝統的なスタイルと現代的なスタイルを融合させ、進化し続けるブラジルの文化的景観を表現した。また、国内のさまざまな地域のリズムを取り入れ、先住民、アフリカ、ヨーロッパの文化的影響を反映させた。クラシックな要素とモダンな要素の融合させることで、ブラジルの絶え間ない変革と適応力を象徴的に表した。<br>　このプレゼンテーションを通して、私たちはブラジルの文化的な豊かさを披露するだけでなく、観客をより深い異文化交流へと誘った。私たちの情熱、伝統、多様性を共有することで、SWY2025の参加者同士の有意義なつながりを促進する貴重な機会となった。 |
| ジブチ |
| テーマ「３つの異なる民族の結婚式」<br>　ジブチのNPは以下の通り実施された：最初、ジブチを紹介するビデオを流した。次にAfar Cultureについて説明し、Afarの踊りを披露した。続いてアラブ文化について説明し、アラブの踊りをした。最後にソマリア文化について説明し、ソマリアの踊りを披露した。締めくくりとして、ジブチの服装を身にまとった日本人も出演した。有名なジブチの曲に合わせて、みんなで楽しくステージの上で踊った。 |
| エジプト |
| テーマ「時代と文化を超えた旅」<br>　エジプトのNPは、音楽、ダンス、パフォーマンスを交えながら、エジプト文化のさまざまな側面を紹介する。プレゼンテーションは複数のパートに分かれ、それぞれがエジプトの伝統的な文化の一面に焦点を当てた。<br>　最初のパートでは、ファラオに関する内容を取り上げ、古代エジプトの歴史を映像やファラオの衣装をまとったダンスパフォーマンスを通じて紹介する。<br>　次に、伝統的な民俗舞踊であり武術でもある「スティックダンス」のパフォーマンスを行う。その後、女性によるダンスパフォーマンスと、エジプト南部のNubian文化の紹介が続く。<br>　また、プレゼンテーションの別のパートでは、エジプトの黄金時代に焦点を当て、20世紀の音楽やファッションを再現する。私たちのチームは、エジプトの文化を形作ったアーティストたちを称え、歌とダンスのライブパフォーマンスを披露する。<br>　最後に、2025年11月にエジプトで開催される「世界青年の船」事業事後活動組織の年次総会について紹介し、全てのPYとNLに記念品やお土産が配布する。<br>　このプレゼンテーションでは、舞台効果、照明、音響を活用することで、より魅力的な演出を行う。 |

| 日本 |
| --- |
| テーマ「風姿花伝」<br>　日本のNPでは、複数の現代的～伝統的なパフォーマンスとMCを通して、風姿花伝の“前進しつつ伝統も大切にする精神”を表現した。<br>・演目<br>・アイドル＋ヲタ芸<br>・和太鼓<br>・炭坑節（盆踊り）、和太鼓<br>・ねぷた、和太鼓<br>・剣道<br>・空手<br>・和楽器（琴、三味線）と書道<br>・ソーラン節<br>・歌“We are the world”<br>・MCではパフォーマンスに込められた伝統文化の解説を含め、パフォーマンスを通して背景が伝わるよう工夫を施した。<br>・ねぷたでは客席を回って金魚の折紙を配り参加型にしたり、ソーラン節はJPY全員参加を必須にする等、80人という人数を生かした迫力の演出をした。<br>・数ヶ月かけて教室に通うなどして、日本代表としての日本文化への理解を深める機会として最大限に活用できた参加者が多くいた。<br>・NP全体のトリを飾るパフォーマンスということで、最後にこれまでのSWY全体の様子を記録した動画を“We are the world”を歌いながら視聴し、各国のパフォーマンスを通して13か国の違いや多様性を祝福する時間とし、NPの幕を降ろす演出にした。 |
| オマーン |
| テーマ「文化遺産」<br>　オマーンのNPは、豊かな文化、伝統的な芸術、そして海の時代の歴史を経験する魅力的な旅を提供した。パフォーマンスは、観客が没入できるように、映像、ライブパフォーマンス、伝統的ダンス、詩、ファッションショーを含めた複数の演目で構成された。<br>　プレゼンテーションは、温かい歓迎と遺産観光省が作成したオマーンの美しさを紹介する映像で始まり、オマーンの様々な文化遺産を共有するための雰囲気を作り上げた。アクト２では、詩、歌、ダンスを組み合わせたオマーンの有名な伝統的芸術であるBarahを紹介した。次のファッションショーではオマーンの伝統的衣装の優雅さを示した。続いて、オマーンの海の時代の遺産について、世界貿易における歴史的な役割を強調しながら表現した。プレゼンテーションは、最後の伝統的パフォーマンスで幕を閉じ、観客にオマーンの深い伝統を感じてもらった。<br>　オマーン代表団は、映像、ライブパフォーマンス、参加型の要素を合わせることで、全参加者を引き付け、国の本質を参加青年に伝えることができた。 |
| パナマ |
| テーマ「パナマの多様性の歴史」<br>　パナマのNPは、ミュージカルまたは演劇の形式で構成されている。さまざまなダンスや演技、そして観客と双方向の仕掛けを取り入れることで、観客を惹きつけ、パナマ代表団の多彩な才能や個性を披露する。文化紹介は７つの主要な場面に分かれている：先住民の歴史、植民地時代、フランスによる運河建設、Afro-Antilleanの影響、アメリカによる運河時代、主権を求めるパナマの闘い、現代のパナマ。これらの場面はそれぞれ、パナマの歴史と文化における重要な瞬間を表す。プレゼンテーションに含まれる舞踊は次の通り：“El Punto”は、スペインの影響を受けたダンス、“Otro Trago”は、パナマで最も有名な音楽ジャンルであるレゲトンの代表、“El Congo”と“La Socca”は、Afro-Antilleanの影響を体現、“Viva Panama”は、国家への誇りと愛国心を象徴するダンス。 |

| ペルー |
| --- |
| テーマ「ペルーには何でもある」<br>　ペルーのNPは、ペルーには何でもあるということを紹介することが目的であった。プレゼンテーションは“CHASQUI”という、“Inti God”により送られてきたトラベラーが主人公であった。彼のミッションは、ペルー全土を旅し、今日のペルーやペルー人の日常を見ることであった。<br>　プレゼンテーションの最初では、“CHASQUI”が沿岸、高地、アマゾン熱帯雨林の３つの地域を旅する。それぞれの地域で、彼は地元の人に会いそれらの地域について紹介してもらう。ダンス（Valicha, Marinera, Anaconda, Festejo, Carnaval）を見せてもらい、その後“CHASOUI”はAyacuchoと砂漠へ行き、そこでの苦労やペルー人の力強さを学ぶ。最後に、“CHASQUI”は“Cahamarca”に行き、ペルーの真髄、それはペルーの国民であると知る。“CHASQUI”がInti Godのもとに戻り、ペルーの今日について報告したところでNPは終わる。 |
| ポーランド |
| テーマ「ポーランドの結婚式」<br>　ポーランドのNPでは、参加青年が民族衣装を身にまとい、活気に満ちたパフォーマンスを披露した。その中で、ポーランドの文化、歴史、そして伝統が紹介された。文化や伝統に関しては、ポーランドの民族舞踏である優雅なPolonaise、躍動感あるKrakowiak、そしてポーランドの民間伝統を取り入れた３種類の現代舞踏が披露された。また、ポーランドの結婚式にまつわる伝統的な儀式も再現された。例えば、新郎新婦にパンと塩が振舞われる象徴的な儀式や、結婚式で行われるゲームなどが紹介された。<br>　続いて、ポーランドの誇る絶景—バルト海やタトラ山脈など—が映し出され、伝統的な料理の代表格として、ピエロギ（ポーランド風餃子）やジュレック（酸っぱいライ麦スープ）も紹介された。歴史に関しては、ポーランドが第二次世界大戦中に示した国民の強さや感動的な歴史、さらにその後の経済発展、科学技術やイノベーションへの貢献が紹介された。また、ポーランド語の難しい発音や文法について解説するシーンも取り入れられ、参加者たちにポーランド語を学ぶ機会が提供された。<br>　このNPのハイライトは、参加青年がポーランドの国民的英雄たちに扮して披露したパフォーマンスだった。フレデリック・ショパン（ピアニスト）、マリア・スクウォドフスカ＝キュリー（科学者、ノーベル賞受賞者）、ニコラウス・コペルニクス（天文学者）、ロベルト・レヴァンドフスキ（サッカー選手）、イガ・シフィオンテク（テニス選手）といった、ポーランド出身で世界的に影響力を持つ５名の著名人が、青年たちの演出によって登場した。<br>　最後に、SWY2025に参加する他の12か国とポーランドが共有している歴史的つながりや文化的影響、共通の伝統について紹介され、このNPの幕が閉じた。 |
| セネガル |
| テーマ「セネガルの文化の多様性」<br>　セネガルのNPの目的は、セネガルの伝統を伝えることでセネガルの文化を参加者に伝えることである。セネガル内で様々な文化や人がいる中どのように共存しているのかを以下を通じて伝えた。<br>・セネガルの基本についてのプレゼンテーション<br>・セネガルがホスピタリティの国という名前を得た所以を伝える演劇<br>・セネガルの地理、経済状況等についてのプレゼン<br>・セネガルの民族ごとの伝統的なダンスを披露<br>・セネガルの伝統的なレスリングの披露<br>・観客にセネガルのダンスを教える |

| スリランカ |
| --- |
| テーマ「スリランカの美しさ」<br>紹介スピーチ：スリランカ代表団の２人の参加青年によってNPが始まった。<br>紹介動画：スリランカについての紹介スピーチの後、紹介動画を流した。<br>伝統舞踊（１）：最初のパフォーマンスとして、司会者を務めた参加青年と２人の参加青年がKandiyan（内陸部）ダンスを披露した。そして、司会者が退場し、残りの２人の参加青年でlow country ダンスを披露した。<br>パフォーマンスの紹介（１）：最初の舞踊が終わった後、参加青年が最初のパフォーマンスとその次のパフォーマンスについて簡単に説明した。<br>伝統舞踊（２）：参加青年８人による伝統舞踊であるAngamporaが披露された。<br>パフォーマンスの紹介（２）：Angamporaが披露された後、司会者から次のパフォーマンスについて説明された。<br>伝統舞踊（３）：スリランカの民族舞踊の美しさを披露するために、７人のメンバーによってパフォーマンスが行われた。<br>最後の演目：民族舞踊の後、司会者が戻った。その後、２人のダンサーがスリランカの伝統的な悪魔の仮面とAini RokshaとNonchiという面白い仮面を付けて登場した。パフォーマンス中、何人かのFPYがパフォーマンスに加わり、一緒に踊り、パフォーマンスを披露した。<br>最後に、スリランカ代表団の全員が締めのポーズを取り、ナショナル・プレゼンテーションの終了を示した。 |
| スウェーデン |
| テーマ「スウェーデンの文化と実情」<br>スウェーデンのNPでは、タイムトラベルしてきたヴァイキングが現代のスウェーデンを案内する旅をする。プレゼンテーションでは、王制、食、福祉政策、伝統と革新をスウェーデンの主な文化的側面に焦点を当てた。<br>プレゼンテーションは寸劇の形式をとり、スウェーデンの代表の参加青年がさまざまな状況を演じた。最後は、スウェーデンの音楽を流し、ダンスパーティーで締めくくられた。 |

## 4 ピア・ラーニング・セミナー

**◆概要**

ピア・ラーニング・セミナー（PLS）は、PYが主催するセミナーで、1つのPLSは60分で全６コマおこなわれた。全PYは、PLSの各コマにおいて、主催者あるいは参加者となる。主催者以外のPYは、当日参加したいPLSに自由に参加することができる。PLSの運営はPLS委員会が主催した。

PLSは、主催者自身の学習分野や経験をPYと共有し、議論する活動として、次のことを目的として実施する。

【主催者】

- 自らの考えや経験などを伝えることによりプレゼンテーション能力を高めること
- PLSの企画・立案から実施、参加者からのフィードバックまでの一連のプロセスを経験することによりプロジェクト推進能力を高めること

【参加者】

- 主催者の考えや経験などが共有され、お互いのバックグラウンドをより深く知ることができること
- 主催者の運営方法からワークショップやディスカッションの効果的な実施方法を学ぶこと

また、主催にあたって、以下の４つの項目に該当する活動であることが必要条件とする。

1）「社会をより良くするための取組」に関した内容である
2）国際的な意義を持つ内容であること
3）文化理解を深め視野を広げる情報が含まれている
4）リーダーシップを身に付けられる内容である

今年は37のセミナーが開催された。

[PLS一覧]

| セミナー名 | 主催者 | セミナーの目的 | 主催者として学んだこと |
|---|---|---|---|
| よりよい未来のために自然を受け入れる | | PYが在来植物に関する知識を得て、その植物の扱い方に関するリーダーになれるよう促す。 | ・セミナーをリードする機会を得た。<br>・医療植物への文化アプローチについて学んだ。<br>・人前で話すことと、タイムマネージメント、シンプルな言葉で話すこと。<br>・Canvaを使ってプレゼンテーションを作る技術。<br>・学習教材を海外に提供する組織力。 |
| 環境公平:水俣病の事例から | | ・「水俣病」を聞いたことがある人には、その背景や今も分断が続くまでの複雑さを知ってもらうこと。<br>・「水俣病」を初めて知る人には、日本で起きた悲劇を世界で繰り返さないため水俣の地を知ってもらうこと。 | ・ディスカッションを通して、環境と経済のバランスについて考えることの大切さを学ぶと同時に考え続けなければならないと気づかせてくれた。<br>・世界の他の地で起きている公害の事例や水俣との類似性を聞けてよかった。 |
| SWYから食べ物の無駄をやめる | | フードロスに関することを知ってもらい、SWYからの解決策を促進すること。 | ・プレゼンテーションのスキル<br>・ディスカッションを通じて、自分自身も問題についての理解や視野を広げ、深めることができた。 |
| 親切な行為 | | 参加者に些細な行動の重要性を認識してもらい、自分たちの生活に取り込むことの動機付けにする。 | ・PLSの主催方法<br>・フィードバックシートの重要性<br>・リーダーシップスキル<br>・新しい友人作り |
| 理想の教育とは？ | | 各国の教育における課題について知る。 | セミナーを通して、PLSに参加してくれた国の教育システムや課題についてのディスカッションをした。そこで普段話す言語と学校で使用される言語が違うからこその難しさなどの、ネットで見つけられないような、よりリアルな情報を共有できた。 |
| プラスチックの解明とプラスチックフィルムの製造・リサイクル方法 | | プラスチックに関する基本的な知識を知ってもらうことと、プラスチック製品をどのように作っているかを考えること。 | １時間で英語でのセミナーを主催するのは今回が初めてだった。本番まではとても大きな不安を感じていたが、予想外のことに参加者がサポートをしてくれた。具体的には、私が英語での表現の仕方に困っていた時に、パラフレーズしてくれたこと。また、多少英語力の限界があっても、熱意さえあれば自分の伝えたいことは聞き手に届くことに気づいた。今後、さらに人前で英語でのプレゼンテーションをする機会を増やしていきたいと考えている。 |
| 私たちの生活のAI | | このセミナーの目的は、AIは決して怖い技術ではないということを伝えることだ。自動AIの使い方及び作り方を教えることで、参加者にAIを日常生活で活用することに自信を持ってもらいたい。 | このセミナーを通じて参加者が普通AI技術をどのように考えているのか、また、AIをつくって解決したい問題は何かを直接学ぶことができた。 |

| セミナー名 | 主催者 | セミナーの目的 | 主催者として学んだこと |
|---|---|---|---|
| 昔話のマジック、道徳を教える方法と文化をつなげる道具としての話語り | | 昔話はどうして大切なのか、また、将来どうすれば昔話が守られる方法を考えること。 | リーダーシップ能力を伸ばし、時間管理、効率的なプレゼンテーションとコミュニケーションの行い方を学んだ。 |
| 戦争と平和 | | 戦争や平和について話せる機会を身近に設けるため。 | 感想を読んで、このセミナーを通して新しいことを知ってもらえたり、改めて戦争の恐ろしさや平和の大切さを知ってもらえたりしたことが分かり本当に良かった。今後もこのような機会を設けていきたい。 |
| 影響力のモデル | | ランダムな選択の中から生まれる「不確実性」を元に、自分の可能性を広げること。 | 準備をもっと念入りに行っていたらより良いものができたと感じ、改めて準備の大切さを学んだ。また、20人ほども参加してくれたことは驚きで、この分野に興味がある人が多いことを実感し、嬉しかった。 |
| 自分自身のストーリーテリング | | ・「芸術とコミュニケーション 」のプロセスからツールを提供すること。<br>・ストーリーテリングをすることは、毎日の生活で手助けになる。 | ストーリーテリングの経験がなく、異なる言語を使う人に向けて45分のセッションを主催することができた。また、明確なコンテンツを作ることができた。フィードバックも素晴らしかった。 |
| 福島の未来 | | ・震災や原発事故の経験者の生の声を聴いて、今もなお続いている福島県の復興について認知を広げること。<br>・福島県での取り組みを知ることで、参加者自身が所属するコミュニティの復興についても考えること。 | 震災を経験したPYとセミナーを企画したことで、原体験を共有する大切さと価値に気が付いた。また、原体験がその後の人生にどのように影響したか考えるきっかけになった。 |
| ユーモアスキル | | ユーモアは人を笑わせること以上の意味があることを伝えること。 | ・アイスブレイキングの仕方<br>・参加者がセミナーに集中してもらう方法<br>・他の人と協働すること |
| 知性と勇気の間：アフロヘアの力 | | ラテンアメリカでのアフリカの文化について、また、アフロヘアの人々が長年差別を受けている内容について話すこと。 | 別の国や南米の国において、ウィッグがポジティブに受け入れられているということを理解することができた。 |
| アイデアをどのように発表するか | | アイデアを伝える際の選択可能な方法を伝えること。 | 仲間たちと交流し、彼らのさまざまな課題に対応することを楽しんだ。 |

| セミナー名 | 主催者 | セミナーの目的 | 主催者として学んだこと |
|---|---|---|---|
| 多様性と包括性でSWYを彩る | | ・多様性や包括性の意味を深く理解し、自分なりの意見を持つ。<br>・多様なメンバーと協働し、インクルーシブな場の価値を実感する。 | 個人的に英語でワークショップをするのが初めてだったため、経験そのものが学びだった。<br>ワークショップを通してD&Iに関心を持ち行動できる人を増やすことで、彼らがそれぞれのフィールドで行動を取っていくのだと実感した。 |
| 防災セミナー | | 日本の災害について知ってもらい、どのように準備をすべきなのか考えて、各国で文化その他要因により準備物等も違うということを学んでもらう。 | ２時間のセミナーを通して防災においても文化の違いや地域特性を理解することが非常に重要であると改めて感じさせられた。また、２時間目のワークショップではこれを参加者同士で理解を深める機会を創出できたと考えているのでとても自信につながった。 |
| 創造的思考を極める：枠の内と外から考える | | ・人々に新しい創造的な考え方を教えること。<br>・SWY40のVA/PLSの提案を生み出すことを目的とする。 | 人々を活性化させようとすることは、私にとって素晴らしい学びの経験だった。プレッシャーを与えられたときに、人それぞれがどのように反応するのかを学んだ。最終的には素晴らしいアイデアが生まれた。 |
| 言葉の力、インスピレーションを与えるために話すこと | | ・参加者がステージに対する恐怖を克服し、考えを素早く整理し、明確で魅力的なスピーチを行う能力を向上させること。<br>・継続的にスピーキングを練習し、自信を持ち続けることを促すこと。 | パブリック・スピーキングを他者に紹介し動機づける能力を向上させることができた。この経験を通じて、リーダーシップやコーチングスキルが強化されるとともに、しっかりと構成されたスピーチを届ける重要性を再認識した。 |
| 人生の選択とは | | このPLセミナーはPYたちが「当たり前」と思っていることは意思決定に影響を与えており、他の国の人々にとっては必ずしも同じではないことに気づく機会を提供することを目的とした。また、PYたちは自分自身を客観的に見つめ、自身の偏見に気づき新たな価値観を発見することにより、視野を広げ選択の幅を広げることを目的とした。 | ・英語で企画や運意をする経験を得られた。<br>・チームメンバーと密に連携しながら進めることで、チームワークの重要性を実感した。<br>・日本の昭和時代の価値観をもとにアンケートを作成したが、令和になりJPYも価値観が変化していることに気が付いた。セネガルと日本の回答がほぼ真逆であったため、国による価値観の違いが感じられ、主催した意義を感じた。<br>・スリランカは日本と同様に安定した職業を選ぶべきだという考え方がある一方で、男性は理系、女性は文系が向いているという考えはないことを知り、項目ごとに結果が異なっていたので勉強になった。<br>・PYの発表を聞くことで、新たな価値観を知ることができ、視野を広げることができた。 |

| セミナー名 | 主催者 | セミナーの目的 | 主催者として学んだこと |
|---|---|---|---|
| ウェルビーイングについて話そう | | メンタルウェルビーイングの認知度を上げ、SWYやその後の生活において本テーマについて安心して話すこと。 | メンタルウェルビーイングという、センシティブに捉えられがちではあるものの、重要なトピックに関して話す場を設けることで、自身の経験や状況について安全に話せる場、機会の重要性に気づいた。また、そのような場を作るためにも、メンタルウェルビーイングについての認知度を向上させ、気軽に話す、お互いをケアできるようになることが必要だと改めて感じた。 |
| チェンジメーカー | | 適切なステップを提供することで、若い「世界青年の船」事業参加者たちが自国の問題について行動を起こせるようにする。 | 各国のさまざまな問題や、彼らが助言を基にどのように解決しようとしているのかを学ぶことができた。 |
| コーヒー文化 | | ・どのようにしてコーヒーが人々とつながるかを示すこと。<br>・特別なコーヒーに焦点を当て、コーヒー文化を広めること。<br>・ほかの国でのコーヒー文化と伝統についてディスカッションすること。 | セミナー後にPYたちが私に共有してくれたことはとても興味深かった。どのように事実を伝えるか、またPYから前向きなフィードバックコメントをもらった。そして、コーヒーについてPYは彼らの伝統や文化について共有してくれ、コーヒーを飲む機会やどんな材料を入れるのかについても学ぶことができた。 |
| 自然とのハーモニー:アンディーンとアマゾンの知恵 | | プレゼンテーションを通してPYと活発なディベートを行う。PYのそれぞれの国についてもコメントし合う。 | ・それぞれの違う見解<br>・アイデアを伝えるスキルの向上<br>・ペルーの原住民コミュニティの世界観をグローバルな視点での共有 |
| ケダブ・ヘナ | | ケダブ・ヘナについて、文化的象徴とどのような場面で使われるかを周知することが目的とする。SWYで気づいたことは、ケダブ・ヘナがタトゥーに似ていることから興味を持つ人が多いが、他の国では、ヘナの持つ意味が知られていないことだ。 | 英語で自分の言葉で表現することに苦労したが、そこまで悪くなかったと思う。英語で発表することに対する自信が高まり、ケダブ・ヘナをどのように表現するか発表する経験を積むことができた。 |
| 犬は人間と一緒に暮らすことは幸せなのか | | 各国における犬に対する話を聞くこと(犬とはどういう存在か、各国の違いを知ること)、犬の福祉や問題について伝えること。 | どのようにセミナーを運営するかを知ることができた(私にとって初めての経験であった)。他国における犬に対する考えを知ることはとても興味深く、私の将来に役立つと感じた。 |
| 移民と人権について | | 主催者の出身国であるパナマの移民や人権問題について、日本や他国の参加青年に共有するため。また、パナマ以外の参加国の移民や人権問題の現状に対する理解を深めるため。 | ・母国語以外の言語(英語) で、社会的重要性のある話題についてパブリック・スピーキングをする経験が得られたこと。<br>・他国でのテーマについての状況を学ぶことができた。 |

| セミナー名 | 主催者 | セミナーの目的 | 主催者として学んだこと |
|---|---|---|---|
| 「ローカル商品の魅力」ーどのように助け合うか | | ・ローカル商品の定義について説明し、消費者の選択肢によってローカルビジネスの成長につながることを参加者に共有するため。<br>・ポーランドでの状況を参加者に共有するため。 | 他の参加青年に自身の視点を共有したことは興味深い経験となった。また、柔軟性をもって時間管理をすることや、参加者の様々なバックグラウンドに基づくニーズに答えることを経験できたことも楽しかった。 |
| 感情的レジリエンスを身につける：上を目指すために耐える！ | | ・感情的に安定している状態を身に着けられるようにサポートすること。<br>・レジリエンスの概念と重要性を理解し、なぜ身に着ける必要があるか考えること。 | 発表を準備するリーダーのポジションを経験し、よりよい人生を生きていくためのポイントを紹介した。どのように観客の心をつかめるか、どのような言葉や声が響くかについて学ぶことができた。セミナーがどうすればより分かりやすく、まとまったものになるかについて気づいた。 |
| アートによる癒しの時間：ペルーの過去の紛争の傷を癒す | | ペルーの武装紛争における犠牲者について振り返るとともに、彼らはアートを通じてどのように癒したかを学ぶことが目的だった。絵を描くことは正義を推進し、過去の傷を癒す強力なツールであり、伝統や記憶を継承させるツールである。 | ペルーで話すことが難しいトピックについて準備することができた。ペルーで社会復興のために行っている活動を振り返ることができた。ペルーの歴史を紹介した。参加者は自分自身をこの課題について特定することができた。参加者は絵を描くことを通じて、お互いの違いを非難することより共感や理解が広まっている社会を実現することの重要性を理解することができた。参加者にとっての議論の時間が短かったので、セミナーの後にほか参加者や個人での振り返りを促した。 |
| 持続可能な運営 | | 本セミナーの目的は、ESGに関する理論的概念と実例を紹介し、２つの質問について議論することで、日常生活におけるESGに関して身近に感じてもらうことだ。 | ESGに関しての知識がまだ広まっていない、もしくは興味関心を持っている人が少ないと感じた。特に、社会問題などに関心が高いとされるPYsでもこの認知度であるので、社会全体でも、そこへの意識と理解は少ないと改めて考えるきっかけをくれた。それを想定した上で、スライド作成とプレゼンは基礎的概念を中心に説明することに専念した結果、自分たちの身近な生活、特に今後仕事をするうえで考えるべきトピックであるということを伝えることができた。また、そのような声もあがったので意図していることは達成できた。そのうえで、自分が３月からESG領域で仕事をするため、今までの学術的理論を実践で活かしていきたいと再確認できた。そのうえで自身のキャリアを高めることで、専門家としてESG普及、認知拡大に貢献したい。 |

| セミナー名 | 主催者 | セミナーの目的 | 主催者として学んだこと |
|---|---|---|---|
| 教科書の視点から見る歴史 | | ・歴史教育の影響を理解する。<br>- 教科書が国家の歴史認識やアイデンティティ形成にどのような影響を与えるのかを分析する。<br>・異文化理解の促進<br>- 歴史に対する多様な視点や解釈を学び、相互尊重と異文化理解を深める。<br>・平和教育への応用<br>- 次世代の平和構築のために、歴史教育をどのように活用できるかを探る。 | 質問の重要性 |
| アラビア文学の理解 | | アラビア語圏以外の人々にアラビア文学を紹介し、アラビア語のさまざまな側面を説明しながら、アラビア語の詩人がどのような文章を書き、どのような考え方をするのかを垣間見せる。 | 私たちの文化を紹介し、アラビア文学とその特徴について学ぶ機会を他の人々に与えることができた。 |
| 社会的投資 | | 社会的投資とその重要性についての意識向上と、青年リーダーが社会的投資について考え始められるよう働きかけること。 | 人前で社会的投資の話をすることに自信がついた。自分でセミナーを企画し実施することができると気づいた。 |
| 国際的な子の奪取 | | このセミナーは、国際的な子の奪取のメカニズムと課題を検討することにより、国境を越えた真剣争いが持つ多面的な法的･人権的意味を解明することを目的として戦略的に設計した。このセミナーは、国際的な法的枠組みがこのような争いにどのように対処しているかについて参加者に明確な理解することを目指し、このような子の奪取の手法と条約法における法理的な影響を説明することを目的とした。さらに、セミナーでは、ハーグ条約を法律学的に読み解き、その運用メカニズムや教義上の欠点、しばしば事案の効果的な解決を妨げる執行上のギャップなどを批判的に考察した。また、法的な技術的な問題にとどまらず、より広範な理論的な問題にも触れ、法的形式主義と子ども中心の裁定との間の緊張関係を探求した。 | このセミナーを企画したことで、子の奪取における法的執行の複雑さについての理解が深まると同時に、長期的な心理的影響についての新たな視点にも触れることができた。特に印象的だったのは、参加者の1人が、将来のトラウマの問題を提起したことだ。子どもが、自分が誘拐されたことを後になって知った場合、誘拐した親に対する信頼が回復不能なまでに損なわれ、深刻な精神的影響をもたらす可能性があると指摘した。この視点は、目先の親権争いに焦点を当てる従来の考え方に疑問を投げかけ、法的･心理的枠組みの双方において、長期的な子ども中心のアプローチの必要性を強調した。この経験は、国際的な親権訴訟において、法的、倫理的、心理的配慮を統合することの重要性を再確認させた。 |

| セミナー名 | 主催者 | セミナーの目的 | 主催者として学んだこと |
|---|---|---|---|
| セネガルのレスリングに使われるダンスとドラム(Tan Tam) のたたき方について | | 今回のPLSの目的は、セネガル流レスリングという観点からセネガルの文化を参加者に伝えることであった。 | この経験により、私は英語を活用する経験を得ることができた。そして各国のPYが今回のセミナーに参加してくれた様子を見られてとても嬉しかった。 |
| 社会的投資 | | ・社会的投資について理解を深めること。<br>・ワークショップを通じて社会課題と利益の両立の実現へのリアルを体験すること。 | この経験を通じて２つのことが見えた。１点目は、自分自身のソーシャルビジネスへの知識が不十分であるということだ。大学や地域の中での実践活動を通じて学びを積み重ねてできた部分を少なからずあったが、参加者の方とのディスカッションで海外のリアルや取り組みの例を知ることで自分の知見が少し広がった。またその取り組みの背景にある思いや理由から得るものも多くあった。２点目は、よりアクティブに自らの問いを深める行動をしていくモチベーションを受け取れたことだ。探求の道に終わりはなく、世界中で同じような志を持った人がいるということを体感できたことでモチベーションが上がった。 |

# 5 委員会活動

事業期間中、参加青年は様々な行事・活動を主体的に企画・実行した。これは、参加青年が異なる文化やバックグラウンドを持った人と共に活動を創り上げることで、主体性を育むだけではなく、相互理解を促進し、良好な関係を築くことを目的としている。活動を行うために参加青年は下記の６つの委員会のうちいずれかに所属した。

## 5.1 All-PYセミナー委員会

本委員会は、All-PYセミナーの企画、準備、当日の運営を担った。All-PYセミナーとは、全参加青年が参加するセミナーのことである。ほとんどの活動がグループ単位であるが、このAll-PYセミナーは唯一全参加青年が一同に集まる活動である。All-PYセミナーは船上プログラム中２回行われた。１回目のセミナーは、リーダーシップがテーマであった。このセミナーではリーダーシップスキルについて知識を深めることを目的に開催された。２回目のセミナーでは、異文化理解をテーマとし、異文化理解について知識を深めるセミナーとして開催された。

**リーダーシップ**

リーダーシップに関するセミナーでは、自分なりのリーダーシップを見つけ、発見したリーダーシップの形をプログラム期間中に実践することを目的に開催された。セミナーの内容は、アクティビティを含んだワークショップ型であり、オープニング、レクチャー、アクティビティ、アクティビティの振り返り、クロージングの５つのパートで構成されていた。レクチャーでは、リーダーの多様性についてレクチャーがあり、ビジョナリー型、コーチング型、アフィリエーティブ型、民主型、デモグラティック型、ペースセッティング型、コマンド型の６種類のリーダーシップがあると参加者に伝えた。アクティビティでは、フラフープリレーを行い、アクティビティ内で参加者がどのようなリーダーシップを発揮しているのかアクティビティを通して自身のリーダーシップについて考える機会を提供した。アクティビティの振り返りでは、参加者同士でフィードバックし合い、リーダーシップに関する気づきを共有した。

**異文化理解**

異文化理解に関するセミナーでは、２つの目的を掲げ、セミナーを開催した。１つ目は、自分自身の文化と相手の文化を理解することである。２つ目は、異文化を理解

する上で今後どのような行動をするかを考えることである。セミナーの内容は、オープニング、アイスブレイク、アクティビティ、レクチャー、ディスカッション、クロージングであった。アクティビティでは、ボードゲームのItoを使用し、「幸せの定義」と「成功の定義」についてグループごとに活動した。アクティビティのレクチャーでは、アクティビティの振り返りを行った後、異文化理解で必要な７つの要素について紹介した。ディスカッションでは、船上生活で文化の違いに対する驚きや感想、チームにおける意思決定、グループと個人の認識について話し合った。

## 5.2 ディスカッション委員会

本委員会の役割は、島根県での地域実践活動の成果発表のプレゼンテーションの進行とサマリー・フォーラムの企画と運営である。島根県での地域実践活動の成果発表とは、島根県で行われた地域実践活動で学び、経験したことやその地域の課題解決の案を島根県実行委員に発表する場である。サマリー・フォーラムとは、対面交流中のコース・ディスカッションでの学びと事業終了後のアクションについて、コース・ディスカッションごとに発表する場である。サマリー・フォーラムの主たる要素がコース・ディスカッション（CD）ごとの発表であるため、委員会で慎重に当日の進行について議論した。各CDから貴重な学びや体験談を発表してもらうこと、円滑に会を進行することの双方を問題なく行えるように配慮した。

サマリー・フォーラムの後にディスカッション委員会が主催したイベントでは、ファシリテーターとともに、ディスカッション委員会主導のパネルディスカッションが行われた。参加者は、CDに関する意見や振り返りを聞く機会を得た。そして、CDで学んだこと、得たことを事後活動にどのように活かすことができるかを彼らからアドバイスを聞いた。

## 5.3 イベント委員会

イベント委員会はスポーツ＆レクリエーションとフェアウェル・フェスティバルの運営を行う委員会である。

**スポーツ＆レクリエーション**

レター・グループ（LG）対抗で、アクティビティが行われた。船内という限られた場所を使ったゲームはすべてイベント委員会により考案及び運営され、そのクリエイティブなゲームの数々を参加青年は大いに楽しんだ。

スポーツ＆レクリエーションでは、段ボール運びとスパイダーネットという２つのゲームが実施された。段ボール運びとは、チーム内で、二人一組でプレイするゲームで、２人のプレイヤーが背中に段ボールを挟み、それを落とさずに移動するといったゲームである。スパイダーネットとは、５本の縄跳びを使って、縄跳びを蜘蛛の巣のように張り巡らし、その間を抜けていくといったゲームである。

どちらのゲームも、チーム全体で勝利するための作戦を共有し、チーム一丸となって取り組むことができた。この２つのゲームを通して、セミナーやディスカッションとは違い、簡単な単語、表情、ジェスチャーが主なコミュニケーション手段となるため、普段は英語での会話が苦手な参加青年も気軽に参加できる貴重な機会となった。

**フェアウェル・フェスティバル**

このフェスティバルのコンセプトは「私たちの旅は今始まったばかり」である。フェアウェル・フェスティバルでは、にっぽん丸と参加国に関するクイズ大会、SWY2025アワードの発表、そして各参加国の代表者によるプログラムでの経験の振り返りを共有する時間が設けられた。参加青年は参加青年同士で衣装を交換してイベントに参加した。参加国ごとに「世界青年の船」事業に参加して感じたことを共有する場では、この事業に参加できたこと、この事業で出会えた家族ともいえる仲間たち、かけがえのない思い出について全体に向けて自分自身の言葉で参加青年に伝えた。フェアウェル・フェスティバルが終わった後も、参加青年たちはドルフィン・ホールに残り、限られた時間の中で仲を深めるために最大限時間を使った。誰しもがずっとこの時間が続くことを望んでいたに違いない。感謝を伝えるにはあまりにも時間が短すぎると感じた参加青年もいたはずである。しかし、このイベントは、今回の旅は終わってしまうかもしれないが、これから新しい旅を始めていこうと思えるイベントになった。

### 5.4 ナショナル・プレゼンテーション委員会

ナショナル・プレゼンテーション委員会は、ナショナル・プレゼンテーション（NP）の運営を行う委員会である。この委員会はNPのリハーサルやNP中の機材の操作や設定の役割を担った。彼らはNPでのルールを決め、参加青年が公平かつ安全に発表を行えるように努めた。

各代表団は、それぞれのスタイルや特色をいかして、自国の文化を参加者に伝えることができた。そして彼らがNPのために費やした努力と時間、その熱意が強く感じられた。NPの持ち時間は30分と限られていたにもかかわらず、参加青年は自国の文化や歴史を披露し、再発見する貴重な機会となった。参加青年は各国のNPを尊重し、それを通して異なる文化や社会的背景への理解を深めた。また、スウェーデン、エジプト、パナマ、オーストラリア、日本のNPの日程が変更されるという状況になったが、NP委員会と各国のNP担当が協力し、すべてのNPを無事に実施することができた。

### 5.5 ピア・ラーニング・セミナー委員会

ピア・ラーニング・セミナー（PLS）委員会は、PLS全体のスケジュール管理・運営方法について検討し、ガイドラインの策定、開催場所や開催時間の調整を行った。必要に応じて、事前に委員会と主催者で協議を行い、PLS当日には、委員会のメンバーが各PLSにサポーターとして参加し、運営を手助けした。

### 5.6 プレス委員会

プレス委員会では、船上プログラム中に、参加青年主催で行われる活動に関する情報発信のガイドラインを考案し、参加青年間で円滑かつ正確な情報が共有されるように活動を進めた。

９月11日の日本参加青年事前研修から１月24日の対面交流開始前までの初期段階で、プレス委員会の日本参加青年中心で、船内で実施される活動に関する情報発信のガイドラインを策定した。プレス委員会は、船内でのプログラムの詳細についてブレインストーミングを行い、PLSやVAの宣伝方法、船内の掲示板に掲載可能な掲示物の規格、掲示板の利用方法、プレス委員会での掲示物の確認方法などを話し合った。また、報告書のために活動の写真撮影を担当した。

## 6 自主活動

自主活動は、参加青年個人または数名のグループにより、自らが行いたいと思う活動を自由に企画し、参加者を募り、実践する活動である。これにより参加青年は自らの考えや思いを発信、企画、実践する力を養うことができ、国やコース・ディスカッション、レター・グループの枠を超えて活発に交流することができた。

＜自主活動の例＞

- SWY GOT TALENT
- 防災食
- ミュージカル
- スウェーデンの伝統的ゲーム
- ジャグリング
- 格闘技体験
- オマーン・コーナー
- アルジェリア・サハラ・ナイト
- ヘナ・ワークショップ
- カラオケナイト
- SWYチャレンジ
- 日本神話
- ビジネス・ピッチ・コンテスト
- 書道
- 日本語クラス
- ペルー・ダンス
- エジプト・ナイト
- SWYクイズショー
- SWYファッションショー
- パナマ・ナイト
- 茶道
- ランゲージ・エキスポ

# 7 事後活動セッション

島根県での地域実践活動を終えた２月12日から２月20日の９日間、日本青年国際交流機構（IYEO）の代表として３名が、３回の事後活動セッション、及びその他の事後活動促進に繋がる自主活動の担当として派遣された。

**事後活動セッションの目的**

派遣者は、事後活動連携強化プログラムにおいて、以下の目的を持って、事後活動セッション及びその他の自主活動を実施した。

- 参加青年が内閣府の実施する青年国際交流事業、IYEO及びSWYAAについて理解を深められるようにセッション及び自主活動に取り組む。
- 事業終了後、参加青年に、IYEOやSWYAA等を通じて、どのように様々な社会貢献活動に取り組めばよいかを理解してもらうために、管理部員、ファシリテーターまたは、ナショナル・リーダーとして乗船している日本及び外国の「世界青年の船」事業既参加青年とともに事後活動の事例を紹介する。
- SWYAAのネットワークや既参加青年が所属する団体（NPO団体等）を活用・連携し、充実した活動に発展させていくことの重要性を伝える。
- 参加青年が、事後活動には様々な役割・方法・関わり方があることを知り、より気軽に活動に取り組めるようにする。
- ３回の事後活動セッションを終えた参加青年が、セッションで聞いた既参加青年の活動事例をきっかけに、事業終了後に自分自身がやりたいことを具体的にイメージし、言語化できるようにする。
- 既参加青年及びIYEOの代表として参加青年と事後活動についての意見交換を行う。

**事後活動セッションの内容**

セッション１では、派遣者を含む、各国で既に事後活動を実施している複数の既参加青年より、参加青年に事後活動の事例を伝え、事後活動に対するイメージをつかんでもらうことにより、参加青年に「自分たちにもできる」と一歩踏み出してもらうことを目標としたプログラムを実施した。

また、既参加青年であるファシリテーターより、自身のこれまでの人生と事業の振り返りを行い、参加青年が事業後の活動イメージを膨らませることのできるセッションを実施した。

セッション２では、小グループに分かれ、自由に実施したい事後活動をブレーンストーミングした後、個人ワークによって、自身が実施したい具体的な事後活動を考え、同じ興味・関心をもつ11カテゴリー（例：教育・環境・国際協力など）ごとに分かれ、アイデアの共有、プロジェクトアイデアを考えた。最後に各グループより全体にアイデアを共有することにより、実際にプロジェクトとして立ち上げる仲間を募った。

セッション３では、プロジェクトの実施発表をしたグループごとに分かれ、５Ｗ１Ｈに基づき、具体的にプロジェクトの立ち上げ、事業後の実施運営に向けてプランニングを実施し、最後に実施内容の共有・発表動画の撮影をした。

その他、各グループのプロジェクトアイデアを常時掲示することにより、全員が互いのアイデアを見ることのできる状態にし、Lunch Break及びDinner Breakの時間帯に掲示物の前で既参加青年に声掛けを実施したりと、事後活動について意見交換をすることのできる場を提供した。Dinner Breakの時間帯には既参加青年への相談ブースも開設した。また、乗船後のLunch Break及びDinner Break においては、同時間帯を活用し、PYとの積極的な交流を図り、事後活動にかかる意見交換を実施した。

**事後活動セッションの実施効果**

様々な場面において、事後活動の具体的なイメージを持ちながら、実際に事後活動をすることを前提とした発言が増えた。

セッション２の段階で25個、セッション３では15個のプロジェクトアイデアの発表が行われた。実際に船内で事後活動の一環として動画の撮影を実施するグループもいた。

その他にも、セッション終了後、発表した内容以外のアイデアでも事後活動を実施したい、アイデアを実際に事業終了後に実施するためには、SWYAAにどういった方法でサポートを受けられるのか、SWYAAの活性化をしたいといった相談や、プロジェクトを継続するためには何が必要なのか、といった意見交換も生まれた。

## 8 石破茂内閣総理大臣表敬訪問

令和７年２月19日18時より、内閣総理大臣官邸の大ホールにて表敬訪問を行った。

初めに、中田管理官の先導により、石破内閣総理大臣が各国参加青年代表の前方に進み、各国ナショナル・リーダーと順次握手を交わした。

その後、PY代表としてオーストラリアYLが挨拶をし、続いて石破内閣総理大臣から挨拶をいただき、最後に、石破内閣総理大臣と参加青年の代表者の記念撮影を行った。

## 9 佳子内親王殿下御引見

令和７年２月20日11時より、赤坂東邸にて参加青年の代表者が佳子内親王殿下の御引見を賜った。

PY代表としてエジプトYLが挨拶を行った。その後、参加青年の代表者は、４～５の国ごとに３つのグループに分かれて内親王殿下とご懇談する機会を賜った。

その後、佳子内親王殿下と参加青年の代表者の記念撮影を行い、最後に由布内閣府大臣官房審議官（青年国際交流担当室長）からお礼のご挨拶を述べた。

## 10 管理官報告

内閣府　国際調整官　中田昌和

令和６年度の世界青年の船は、日本を含めて13か国からの参加青年が、東京に参集した後、「にっぽん丸」の船上で共同生活を送りながら交流をするとともに、日本の地方を訪問するという形で実施されました。今年度の寄港地は、静岡県と島根県の２県で、静岡県で地域訪問活動を行い、島根県で地域実践活動を行いました。

参加青年は、自らのSWY2025の活動をこの先の100年につなぐことを意識しながら、次代を担う、あるいは既に今を担う若いリーダーとして、活発にプログラムに参加していました。

船上では、外界とは切り離された特殊な環境の中で、コース・ディスカッションやグループ活動などを通じて、文化的背景や思考様式などお互いの様々な違いを意識し、刺激しあいながら、コミュニケーションを深めていきました。また、趣向を凝らした各国のナショナル・プレゼンテーションや、それぞれの専門性などを生かした各種の自主的な活動なども積極的に行われました。

寄港地活動では、静岡県においては、強い風などにより御前崎港に入港できず、急遽、清水港に入港することとなったが、一部の日程を除き、ほぼ計画に沿って地域訪問活動を行うことができました。船内での歓迎レセプションでは、静岡県副知事、訪問先の市の市長を始め関係者の皆さんと懇談の機会も得られました。また、グループに分かれて訪問した御前崎、牧之原、掛川、菊川各市の学校において、参加青年は、生徒の皆さんと温かい交流を実施できました。これらを通じて、参加青年たちは静岡県の魅力、地域の方々のホスピタリティを十分感じられたことと思います。

地域実践活動を行う島根県でも、強風や海のうねりなどにより、浜田港への入港がかなわず、予定より早く境港へと入港することを余儀なくされました。そのため、急遽、参加青年やスタッフを境港から浜田市へバス輸送したうえで、新たに手配した浜田市内のホテルを拠点とすることで、島根県西部での活動をほぼ計画に沿って行うことができました。その後、バスで再び境港へ戻り、予定通り、船を拠点に島根県東部の活動を行いました。

以下、強く印象に残ったことを記しておきたいと思います。

まず、急な状況の変化に対応するための関係者の協力が非常に重要だったと思います。この規模の受入れの実現に当たっては、非常に多くの方々に協力していただいているわけですが、今回生じた急遽の変更に際しても、東京と船内チームで連絡をとりながら、船・港湾関係の方、そして何より、長い時間をかけて準備を重ねてきていただいた受入側関係者との連携のおかげで、ほぼ予定通りのプログラムを行うことができました。日程変更の説明の中で、多くの方々にこの事業を支えていただいていることが、あらためて参加青年にも強く意識されたことと

思います。

また、その地域で暮らす生徒さんとの交流や、コース・ディスカッション毎の、地域で課題に立ち向かう人々との直接の対話は、今後様々な分野で活躍が期待される参加青年たちに、大きな励ましとなったように思われます。表敬訪問をさせていただいた島根県知事も言及されていたように、様々な課題を抱える地域にあって、そこで暮らす「魅力的な人」との交流の機会を持つことは、参加青年はもとより、地域の方々にも将来を考えるうえで大きな財産を得られたのではないでしょうか。さまざまな場面で言われていましたが、お互いに良い「ご縁」をいただけたということで、非常に学びの多い活動となったと思います。

さらに、津和野町を始め、島根県では、訪問した各地で深い雪の中での活動となりました。雪を初めて体験する参加青年もおり、思い出深いものとなりました。

なお、今回、寄港地活動では、訪問先や同行の方々の中に、比較的近年の既参加青年だけでなく、何十年も前の国際交流事業を経験の上で、現在、地域で暮らす方々が含まれていました。当時のお話や学びから現在のご自身の活動についてまでお話を聞くことができた参加青年もいましたが、そのような参加青年にとっては自らの今後を考える貴重な機会となったと思います。

末筆ながら、参加各国の関係者の皆さんやナショナル・リーダー、コース・ディスカッションをリードしていただいたファシリテーター、寄港地での受入れにご協力いただいた方など、あらためてこの事業を支えていただいたすべての方々に感謝を申し上げるとともに、参加青年には、この経験の上にさらなる活躍をされることを期待したいと思います。

# 関係資料

# 1 参加青年の構成

### (1) 参加国別・年齢別PY数

| 参加国＼年齢 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | Total |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| アルジェリア | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | 1 | 3 | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 | 8 |
| オーストラリア | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 | 3 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 | 7 |
| ブラジル | 0 | 0 | 2 | 1 | 1 | 2 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 8 |
| ジブチ | 0 | 0 | 1 | 0 | 2 | 1 | 3 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 8 |
| エジプト | 1 | 2 | 0 | 1 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 1 | 8 |
| 日本 | 3 | 10 | 11 | 19 | 15 | 1 | 4 | 1 | 6 | 1 | 2 | 4 | 0 | 77 |
| オマーン | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 1 | 1 | 0 | 3 | 1 | 1 | 0 | 0 | 8 |
| パナマ | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 1 | 2 | 1 | 0 | 1 | 1 | 0 | 0 | 8 |
| ペルー | 0 | 0 | 1 | 1 | 1 | 1 | 0 | 1 | 2 | 1 | 0 | 0 | 0 | 8 |
| ポーランド | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 2 | 0 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 8 |
| セネガル | 0 | 0 | 0 | 1 | 2 | 2 | 1 | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 8 |
| スリランカ | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 2 | 1 | 2 | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 | 8 |
| スウェーデン | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 | 2 | 1 | 0 | 1 | 1 | 0 | 8 |
| 計 | 4 | 14 | 17 | 24 | 23 | 17 | 20 | 11 | 18 | 7 | 8 | 6 | 3 | 172 |

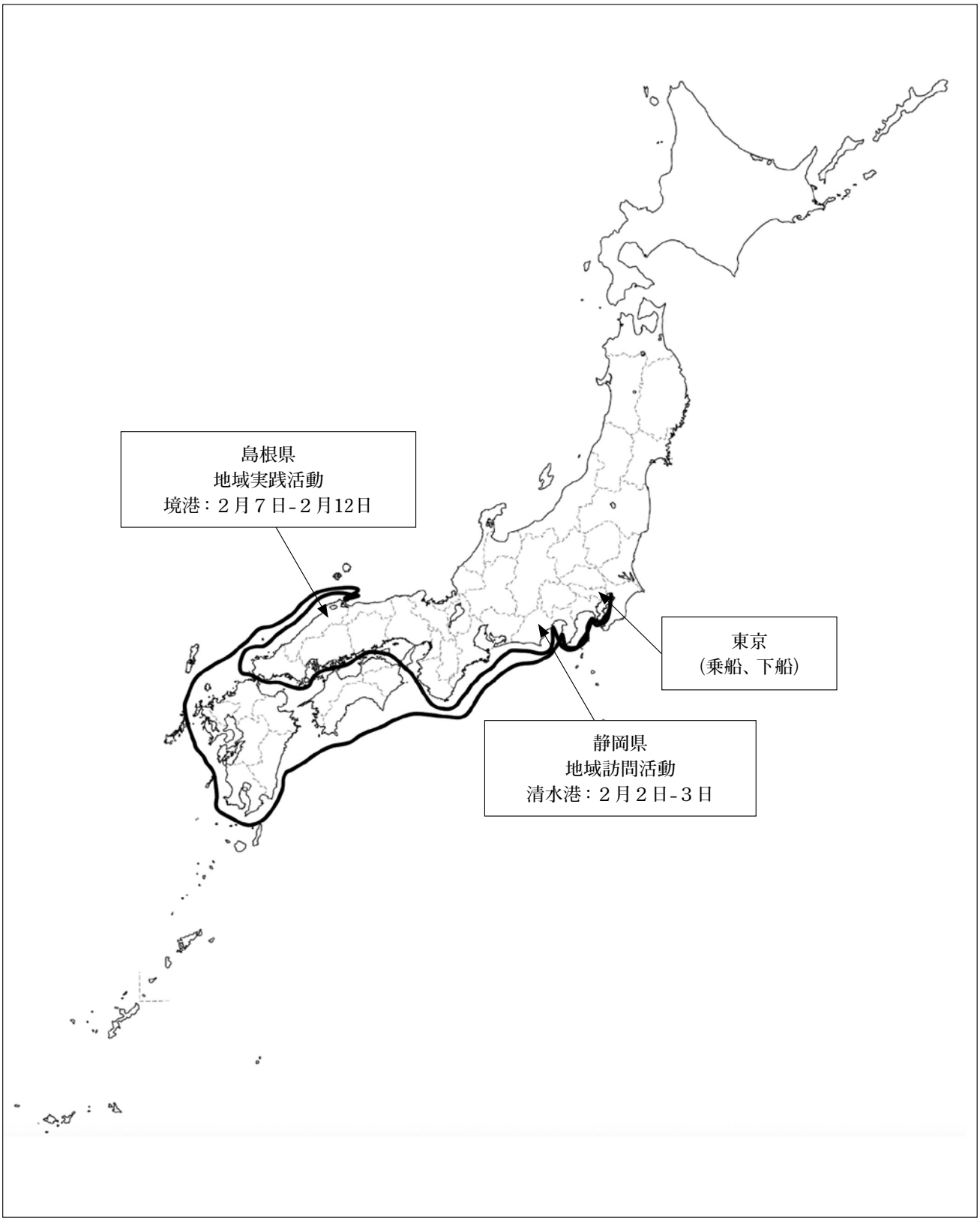
(注) 令和6年4月1日時点

### (2) 参加国別・職業別PY数

| 参加国＼職業 | 公務員 | 会社員 | 教員 | 学生 | その他 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| アルジェリア | 4 | 0 | 0 | 2 | 2 | 8 |
| オーストラリア | 1 | 2 | 1 | 3 | 0 | 7 |
| ブラジル | 0 | 1 | 0 | 6 | 1 | 8 |
| ジブチ | 2 | 2 | 0 | 2 | 2 | 8 |
| エジプト | 1 | 2 | 0 | 4 | 1 | 8 |
| 日本 | 1 | 13 | 2 | 57 | 4 | 77 |
| オマーン | 1 | 2 | 0 | 1 | 4 | 8 |
| パナマ | 1 | 2 | 0 | 4 | 1 | 8 |
| ペルー | 0 | 4 | 0 | 3 | 1 | 8 |
| ポーランド | 1 | 3 | 0 | 3 | 1 | 8 |
| セネガル | 0 | 3 | 0 | 4 | 1 | 8 |
| スリランカ | 1 | 4 | 0 | 2 | 1 | 8 |
| スウェーデン | 0 | 4 | 0 | 4 | 0 | 8 |
| 計 | 13 | 42 | 3 | 95 | 19 | 172 |

(注) 令和6年4月1日時点

## 2 航路図



# 4 事後活動

参加青年は、内閣府青年国際交流事業の貴重な体験をいかし、積極的に事後活動を行うものとしています。事後活動は、一時的なものでなく、長期間にわたり継続的に行われていることが重要です。

### (1)「日本青年国際交流機構」の活動

日本青年国際交流機構（International Youth Exchange Organization of Japan、略称IYEO）は、昭和34年度（1959）から始まった内閣府（旧総理府・旧総務庁）が行ってきた青年国際交流事業の既参加青年、及び活動に賛同いただいた一般会員で組織されており、内閣府青年国際交流事業で得た成果を踏まえつつ、国際理解を深め、国際親善に寄与し、もって広く社会に貢献するとともに、会員相互の交流と研鑽を図ることを目的としています。

同機構は、現在約10,000名の会員を擁し、都道府県単位に行われる支部活動を始めとして、地域活動、本部活動と種々の活動を展開しています。

当事業の参加青年も、帰国後は同機構へ加入し、事後活動等を活発に行うことが期待されています。

### (2) 団体活動等

参加青年の中には、既に青少年団体又はグループに所属している者も多く、これらの団体に所属し、各団体の行う諸活動に積極的に参加し、海外研修の体験をこれらの活動に反映していくことも重要です。また、地域及び職域における活動についても同様です。

### (3) その他の活動

次のような活動は、所属団体又は日本青年国際交流機構の活動と重複することが多いので、事後活動として大切なものです。

a. 参加青年が、派遣年度ごとに集まる機会を持ち、情報交換を行うこと。
b. 内閣府及び関係団体が主催して行う全国大会及び地区別協議会へ参加すること。
c. 内閣府、地方公共団体及び関係団体等が行う外国青年招へい事業等により来日する外国青年の受入れに協力すること。参加青年として訪れた国の青年が来日する場合もあり、旧交を温める良い機会となる。
d. 地域に在住する外国青年（留学生・研修生等）との交流を定期的に行うこと。

# 5 既参加青年による事後活動組織設立への動きとその歴史

### 1.「世界青年の船」事業既参加青年の国際的連携を目指して

昭和63年度（1988）に開始された「世界青年の船」事業は、令和５年度（2023）に実施された令和５年度「世界青年の船」事業の参加青年を加えると、日本青年は延べ3,860人、外国青年は69か国で延べ4,718人となっています。これらの既参加青年たちは、事業で得た貴重な体験をいかして、地域、職場、学校等において国際交流活動、青少年活動を活発に行うことが期待されているほか、日本と参加各国との友好親善の懸け橋としての役割も期待されています。

各国の既参加青年の事後活動は、当初は基盤となる組織や資金、そして活動のノウハウが乏しく、積極的な活動展開が難しい状態でした。しかし、「世界青年の船」事業が回数を重ねるとともに既参加青年の層も厚くなり、情報が蓄積されたことと、インターネットの普及も影響して、グローバル・ネットワークの確立と社会貢献活動の活発化に向けて、少しずつ前進を始めるようになりました。

寄港地、参加国共に固定されないという条件の下で、本格的な地球規模の活動を展開するための基盤の確立は難しい点もありながら、国際連携組織の確立を目指して活動を推進してきました。

### 2. 始まりはギリシャから

この構想の具体化の第一歩として挙げられるのは、平成６年（1994）２月に第６回「世界青年の船」事業の 寄港国ギリシャのピレウスで行われた１つの集まりでした。これは、第４回事業に参加したハンガリーとスウェーデンの青年たちが日本の第４回事業の既参加青年と連絡を取り合い、ピレウスに入港中の「世界青年の船」に集合したものです。事前の準備不足や資金不足、連絡の不徹底等によって、集まった人数は少人数にとどまり、具体的な会議も設定できない状況だったものの、今後の展開を図る上での貴重な経験となりました。

### 3.「世界青年の船」事業既参加青年代表者会議（インターナショナル・リユニオン）

このような経緯をたどり、正式なインターナショナル・リユニオンとして第１回「世界青年の船」事業既参加青年代表者会議（東廻りコース）が平成7年（1995）３月２日～３日の２日間にわたり、メキシコのアカプルコに寄港中の第７回「世界青年の船」事業船上で開催されました。この会議には、寄港国メキシコの既参加青年を始めとして第３回と第５回の既参加青年と第７回事業の参加青年の総計56名が参加し、親交を深めました。会議では、まず各国での事後活動組織の設立とそれを基盤とした各国内での活動の展開について議論が行われ、引き続いて日本と各国の事後活動組織の有機的な連携の方策と国際的なネットワークの構築について話し合われました。その結果、第７回事業の参加青年によって、「世界青年の船」事後活動組織についての原案となる今後の活動に関する提案文が承認され、その後の組織化の第一歩が印されました。参加国ごとに３名のキーパーソンが決められ、今後のそれぞれの国における組織作りや各国との連携体制について定めた提案分の成果は、まず、エクアドルで事後活動組織が発足するという形になって現れ、その後も各国で次々と事後活動組織が設立されました。以後、インターナショナル・リユニオンは平成18年度（2006）年までは、運航中の「世界青年の船」事業のいずれかの寄港地で開催されましたが、船上で行う２日間のプログラムとしては、メキシコのアカプルコで３回（1995, 1997, 1999）、アラブ首長国連邦のドバイ（1996）、オマーンのマスカット（1998）、南アフリカのケープタ ウン（1999）で各１回の計６回行われました。2000年からは船上会議と訪問国活動を含む４泊５日のイベントとなり、ニュージーランドのオークランド（2000）、カナダのバンクーバー（2002）、タンザニアのダルエスサラーム（2004）、オーストラリアのシドニー（2005）、そしてモーリシャスのポートルイス（2006）で各１回開催されました。平成13年（2001）10月にはケニア、平成19年（2007）２月にはフィジーで開催が予定されていましたが、それぞれ、「世界青年の船」事業の航路変更のため、中止となりました。

インターナショナル・リユニオンはSWYAA発足に伴い、平成19年（2007）より名称を「SWYAA世界大会（英語名称：SWYAA Global Assembly）」と変え、事後活動協議会との同時開催で訪問国活動と関連しない時期に実施するようになりました。

### 4.「世界青年の船」事業既参加青年東京連絡会議（東廻りコース）の開催

平成８年（1996）１月16日～21日には、各国の国内活動にとどまらず、本格的な既参加青年の国際的ネットワークを作ることを目指して、第1回「世界青年の船」事業既参加青年東京連絡会議が開催されました。この会議では、「世界青年の船」事後活動組織憲章の前身となる「世界青年の船」事後活動組織合意書（東）がまとめられ、「世界青年の船」事業東廻り13か国が合意書に署名しました。

### 5.「世界青年の船」事業既参加者（西廻りコース）の組織化

それまでは、東廻りコースの既参加青年の活動が先行していましたが、平成8年（1996）３月１日、２日の両日、アラブ首長国連邦のドバイ寄港中の第8回「世界青年の船」事業の船上において、既参加青年代表者会議（西廻りコース）が開催されるに至り、東廻りコースの活動状況が説明されました。また、平成９年（1997）１月16日～21日には、第２回「世界青年の船」事業既参加青年東京連絡会議（西廻りコース）が開催されました。本会議では、「世界青年の船」事後活動組織合意書（西）がまとめられ、「世界青年の船」事業西廻り14か国が合意書に署名しました。

### 6. SWYAA国際連盟設立へ

東西における事後活動組織の組織化の流れを受け、平成17年（2005）には全ての事後活動組織が共通の目標を持って活動に取り組むことを目的として、２つの合意書（東）と（西）は「世界青年の船」事後活動組織憲章という統一の憲章にまとめられ、SWYAA国際連盟が発足しました。

「世界青年の船」事後活動組織憲章は平成25年（2013）にSWYAA国際連盟憲章に改定され、「世界青年の船」事業既参加青年東京連絡会議に参加した28か国が署名し、新しい憲章は平成26年（2014）１月１日に施行されました。（SWYAA国際連盟憲章はウェブサイト参照）

# 6 SWYAA 国際連盟について

### 1. SWYAA国際連盟とは

「世界青年の船」事業、グローバルリーダー育成事業、「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」(以後、「世界青年の船」及び後継事業) で培われた精神を継続させることを目的に、各国で既参加青年のための組織が設立されています。SWYAA国際連盟 (Ship for World Youth Alumni Association International) は事業で培われた異文化理解、国際協力、国際平和の実現に向けてのリーダーシップ精神を推進し、支援しています。

### 2. 参加国

令和７年３月現在、正式加盟27か国、準加盟8か国が登録しましたが、非加盟の関係国を加えると67か国の国々が連携しながら、様々な社会貢献活動を展開しています。

### 3. 共通の使命と目標

1. 「世界青年の船」事業及び後継事業の既参加青年のネットワークを継続すること。
2. 加盟各国の友好関係を継続し、連携を強化すること。
3. 自国及び国際社会に貢献する活動に取り組むこと。
4. 自国及び加盟国において、社会に貢献するリーダーを育成すること。
5. 青少年分野を担当する自国政府との連携強化を図ること。
6. 加盟国の大使館との連携強化を図ること。特に日本大使館との連携強化を図ること。
7. 日本人のコミュニティとの関係を深めること。

### 4. 共通の任務

1. 地域若しくは世界規模で社会貢献、ボランティアの取組、発展的な取組につながるような活動を企画すること。
2. 自国の会員のネットワークを強化すること。
3. 自国の会員及びSWYAA国際連盟加盟国の間で情報交換を強化すること。
4. 日本大使館とのコミュニケーションを図り定期的に活動報告をすること。
5. 「世界青年の船」事業の既参加青年と新しい参加青年とのコミュニケーションを図ること。
6. 今後、「世界青年の船」事業に参加する青年を支援すること。
7. 既参加青年の正確な情報を把握し、保管すること。

### 5. 活動内容

**① SWY News**

「世界青年の船」事業及び後継事業の事後活動関連の機関紙 (英) で、年１回発行しています。SWYAAのホームページを中心に発信しています。各国の事後活動組織の活動内容や世界各地の既参加青年からの近況報告などの内容の記事が盛り込まれています。これまでに27号を発行しています。

**② SWYAA世界大会 (通称：GA=Global Assembly)**

運航中の「世界青年の船」事業の寄港地で開催していた既参加青年代表者会議 (インターナショナル・リユニオン) を、平成19年度からはSWYAA世界大会 (英語名称：SWYAA Global Assembly) に名称を変え、事後活動組織の活動が活発な国で年1回実施するようになりました。この大会では、社会的な貢献活動を地域若しくは世界規模で推進し、またそのような活動を達成するための方策を協議する「事後活動協議会」を同時開催し、各国の事後活動の状況を集約し、成果を総括します。

- 第１回SWYAA世界大会 ギリシャ
  (平成19年９月５日～９日)
- 第２回SWYAA世界大会 日本
  (平成20年８月21日～24日)
- 第３回SWYAA世界大会 オーストラリア
  (平成21年９月２日～６日)
- 第４回SWYAA世界大会 エジプト
  (平成22年10月９日～12日)
- 第５回SWYAA世界大会 メキシコ
  (平成23年９月28日～10月２日)
- 第６回SWYAA世界大会 バーレーン
  (平成24年10月４日～８日)
- 第７回SWYAA世界大会 ペルー
  (平成25年８月29日～９月２日)
- 第８回SWYAA世界大会 トルコ
  (平成26年８月30日～９月３日)
- 第９回SWYAA世界大会 フィジー
  (平成27年８月12日～16日)
- 第10回SWYAA世界大会 インド
  (平成28年９月20日～24日)
- 第11回SWYAA世界大会UAE
  (平成29年11月５日～８日)
- 第12回SWYAA世界大会トンガ
  (平成30年11月19日～23日)
- 第13回SWYAA世界大会ロシア
  (令和元年８月31日～９月５日)
- 新型コロナウイルス感染症の世界的な感染症拡大を受けて、令和２年から令和４年は開催が見送られた。
- 第14回SWYAA世界大会オマーン
  (令和５年11月４日～９日)

- 第15回SWYAA世界大会スウェーデン
  （令和６年８月３日～７日）

第15回SWYAA世界大会は、伊藤慶矢内閣府国際企画担当参事官補佐ほか１名の出席のもと、日本及び既参加国20か国（合計21か国）から111名が参加した。

内閣府よりSWY2024の成果を発表した

GAを機に内閣府とスウェーデン政府が対談した

**③「SWYの森（SWY Forest）」**

「世界青年の船」事業の第20回を記念した事後活動の１つとして立ち上がった「SWYの森（SWY Forest）」プロジェクトは、オリジナルロゴを既参加青年から募集の上Tシャツを制作、販売し、制作経費を除く全額を世界での植林活動に充てるものです。これまでにインドネシア・バリ（平成20年）、日本・岩手県（平成25年）、スペイン・グアダラハラ（令和５年）にて実施しました。

**④「世界青年の船」事業既参加青年東京連絡会議とは（通称：既参加青年会議 Ex-PY Conference）**

原則年１回、内閣府が実施するSWYAA代表者のための会議。「世界青年の船」及び後継事業参加各国におけるSWYAAの形成・充実とそれを基盤とした各国内での事後活動の展開について情報交換を行うとともに、各国及び日本の既参加青年の有機的な連携による国際的ネットワークの構築に向けた討議を行うことを目的としています。具体的には、SWYAAのネットワークを使って行う社会貢献活動や今後の事後活動の方向性、そして既参加青年がどのように事業に貢献できるかなどを話し合います。

これまでの会議の結果、ホームステイ・ネットワークの構築、事業に協力する既参加青年の指導官の推薦、参加青年のための事前準備マニュアルやナショナル・リーダーのためのハンドブックの作成、「世界青年の船」事業の紹介をするための広報用キット（プロモーション・キット）の作成、メーリングリスト使用のためのルール作り、そして事業参加予定者のためにSWYAAが実施する事前研修のガイドライン作成、といった成果が挙がりました。また、国内と世界に広がる会員のネットワークを活用して文化交流を促進させるとともに、更なるネットワークの強化を目的とした「グローバル・フォト・コンテスト」も平成16年度より４回にわたって開催されました。このほか、平成17年度にはSWYAA共通のロゴを決めるコンテストを開催、平成18年度には異文化理解ハンドブックをデータ化し、ホームページへの掲載を始めました。また、広報用に使用できる公式ビデオ（10分版）も完成しました。平成19年度には「世界青年の船」20周年記念事業の一環として、「世界青年の船」事業の各回の歴史や情報を集約するホームページの作成、SWYカレンダーの作成、チャリティ・ランチの実施及び環境への貢献活動として、「世界青年の船の森」の植林に取り組むことなどが約束されました。平成20年度には国際支援活動として、ケニアで実施している国内避難民支援活動や、スリランカにおける就学支援に対して日本青年国際交流機構が協力することを約束しました。平成21年度から22年度にかけては、異文化理解教育のための教材を作ったり、「ホームステイ＋1（プラスワン）」という名称でホームステイを受け入れながらボランティアなどの「＋1（プラスワン）」の体験をさせたりする活動を広めることで合意しました。また、事業出身者でその後、功績を挙げた人の情報や、事業の意義についての参加青年の声を集約する動きも始まりました。

平成28年には加盟32か国の代表により共同声明が発表され、今後、以下の共通活動に取り組んでいく決意が示されました。

(1)「SWYAA自然災害復興支援（SWYAA Natural Disaster Relief）」－自然災害に見舞われた地域に対して、災害直後の支援から継続的な支援まで提供する。

(2)「将来のための教育（Educate for Tomorrow）」－恵まれない状況にいる子供たちに、教育の質の向上や教育の機会を与えるための活動を各国で実施する。

(3)「SWYの森（SWY Forest）」－SWYの森の継続的発展を支援する環境関連事業
(4)「献血週間（Blood Donation Week）」－献血への意識向上と、年１回のSWYAA献血週間の開催を促進する。
(5)「差別の無い機会（Opportunities Without Discrimination）」－「SWYの日」に、差別の撤廃と多様性受容促進に向けた国際的なソーシャルメディアキャンペーンに参加する。
(6)「ホームステイ・プラス・ワン（Homestay + 1）」：SWYの既参加青年が、他のSWY参加国を訪れた際に、ホームステイと社会貢献の機会をセットで提供する。

平成31年の会議には11カ国の参加者が集まり、SWY公式ロゴの制定、SWYAA国際大会の開催国決定手順の見直し、事業参加直後の参加青年のエンゲージメントの高め方等について話し合いました。

### 6. 叙勲受章者

以下の人物が、各国事後活動組織での長年の功績を讃えられ、叙勲を受章している。

- インド「世界青年の船」連盟会長　ラヴィ・チョプラ氏、瑞宝双光章（2022年11月）

# 7 事業実績

## 「世界青年の船」事業実績

| 年度(回) | 参加国 | | 期間 | | 乗船者 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 訪問国（寄港地）《給油・給水地》 | 訪問国以外の外国青年の参加国 | 日本国内活動 | 運航 | 日本参加青年 | 外国参加青年 | 団長指導官 | 管理部 | 業務員等 | 計 |
| 昭和63年度(1) | 米国（ホノルル）〈往路・復路〉<br>メキシコ（アカプルコ）<br>ベネズエラ（ラ・グァイラ）<br>エクアドル（グアヤキル）<br>《パナマ－クリストバル》 | オーストラリア、コロンビア、コスタリカ、フィジー、ホンジュラス、ニュージーランド、パナマ | 平成1.1.9～1.18 10日間 | 平成1.1.18～3.29 71日間 | 103(1) | 173(11) | 11(2) | 17 | 5 | 309 |
| | | | 計80日間 | | | | | | | |
| 平成元年度(2) | インド（ボンベイ）<br>エジプト（アレキサンドリア）<br>ギリシャ（ピレウス）<br>オマーン（マスカット）<br>《シンガポール》 | 西ドイツ、イタリア、クウェート、モロッコ、パキスタン、スリランカ、チュニジア、アラブ首長国連邦 | 平成2.1.8～1.17 10日間 | 平成2.1.17～3.28 71日間 | 100(1) | 168(12) | 12(3) | 17 | 5 | 302 |
| | | | 計80日間 | | | | | | | |
| 平成2年度(3) | メキシコ（アカプルコ）<br>米国（ニュー・オルリンズ）<br>ベネズエラ（ラ・グァイラ）<br>コスタリカ（プンタレナス）<br>《ホノルル》 | アルゼンチン、オーストラリア、ブラジル、カナダ、ドミニカ共和国、フィジー、ペルー、トンガ | 平成3.1.8～1.18 11日間 | 平成3.1.18～3.20 62日間 | 103(1) | 171(12) | 12(3) | 17 | 5 | 308 |
| | | | 計72日間 | | | | | | | |
| 平成3年度(4) | スリランカ（コロンボ）<br>エジプト（アレキサンドリア）<br>スペイン（バルセロナ）<br>オマーン（マスカット）<br>《シンガポール》 | アルジェリア、バングラデシュ、ハンガリー、インド、ケニア、スウェーデン、トルコ、アラブ首長国連邦 | 平成4.1.9～1.17 9日間 | 平成4.1.17～3.18 62日間 | 101(1) | 167(12) | 9(1) | 17 | 6 | 300 |
| | | | 計70日間 | | | | | | | |
| 平成4年度(5) | コスタリカ（プンタレナス）<br>ドミニカ共和国（サント・ドミンゴ）<br>米国（サン・フランシスコ）<br>ベネズエラ（ラ・グァイラ）<br>《ホノルル》 | オーストラリア、チリ、エクアドル、メキシコ、ニュージーランド、パプアニューギニア、西サモア、ウルグァイ | 平成5.1.11～1.20 10日間 | 平成5.1.20～3.22 62日間 | 103(1) | 175(12) | 11(3) | 17 | 6 | 312 |
| | | | 計71日間 | | | | | | | |
| 平成5年度(6) | ギリシャ（ピレウス）<br>インド（ボンベイ）<br>ケニア（モンバサ）<br>スリランカ（コロンボ）<br>《シンガポール》 | エジプト、フィンランド、ヨルダン、ネパール、オマーン、セネガル、アラブ首長国連邦、英国 | 平成6.1.12～1.21 10日間 | 平成6.1.21～3.22 61日間 | 114(1) | 161(12) | 9(2) | 17 | 7 | 308 |
| | | | 計70日間 | | | | | | | |
| 平成6年度(7) | オーストラリア（ブリスベン）<br>エクアドル（グアヤキル）<br>フィジー（スバ）<br>メキシコ（アカプルコ）<br>《ホノルル》 | ブラジル、カナダ、コロンビア、ジャマイカ、ニュージーランド、ソロモン、米国、ベネズエラ | 平成7.1.10～1.19 10日間 | 平成7.1.19～3.21 62日間 | 112(2) | 179(12) | 9(3) | 17 | 8 | 325 |
| | | | 計71日間 | | | | | | | |
| 平成7年度(8) | スリランカ（コロンボ）<br>南アフリカ共和国（ケープタウン）<br>タンザニア（ダルエスサラーム）<br>アラブ首長国連邦（ドバイ）<br>《シンガポール》 | バングラデシュ、ベルギー、エジプト、ケニア、ノルウェー、ポーランド、カタール、イエメン | 平成8.1.10～1.19 10日間 | 平成8.1.19～3.19 61日間 | 114(2) | 164(12) | 10(4) | 17 | 7 | 312 |
| | | | 計70日間 | | | | | | | |
| 平成8年度(9) | ニュージーランド（オークランド）<br>チリ（バルパライソ）<br>コスタリカ（カルデラ）<br>メキシコ（アカプルコ）<br>《ホノルル》 | オーストラリア、カナダ、エクアドル、フィジー、ペルー、トンガ、米国、ベネズエラ | 平成9.1.11～1.20 10日間 | 平成9.1.20～3.21 61日間 | 118(2) | 185(12) | 8(2) | 17 | 7 | 335 |
| | | | 計70日間 | | | | | | | |
| 平成9年度(10) | セーシェル（ヴィクトリア）<br>ケニア（モンバサ）<br>ヨルダン（アカバ）<br>オマーン（マスカット）<br>《シンガポール》 | バーレーン、エジプト、ギリシャ、インド、南アフリカ、スリランカ、スウェーデン、アラブ首長国連邦、英国、タンザニア | 平成10.1.11～1.20 10日間 | 平成10.1.20～3.19 59日間 | 116(2) | 178(13) | 10(3) | 17 | 8 | 329 |
| | | | 計68日間 | | | | | | | |

| 年度(回) | 参加国 | | 期間 | | 乗船者 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 訪問国(寄港地) | 訪問国以外の外国青年の参加国 | 日本国内活動 | 運航 | 日本参加青年 | 外国参加青年 | 団長指導官 | 管理部 | 業務員等 | 計 |
| 平成10年度(11) | ソロモン(ホニアラ)<br>トンガ(ヌクアロファ)<br>エクアドル(グアヤキル)<br>メキシコ(アカプルコ)<br>《タヒチ、ホノルル》 | オーストラリア、カナダ、フィジー、ニュージーランド、ペルー、米国、ウルグアイ、ベネズエラ | 平成11.1.11～1.19 9日間 | 平成10.1.19～3.16 57日間 | 116(2) | 155(12) | 8(4) | 17 | 9 | 305 |
| | | | 計65日間 | | | | | | | |
| 平成11年度(12) | セーシェル(ヴィクトリア)<br>南アフリカ(ケープタウン)<br>タンザニア(ダルエスサラーム)<br>アラブ首長国連邦(ドバイ)<br>《シンガポール》 | オーストラリア、バーレーン、ベルギー、カナダ、エジプト、インド、メキシコ、ノルウェー、ペルー、カタール、スペイン、トルコ | 平成11.8.31～9.9 10日間 | 平成11.9.9～10.28 50日間 | 122(2) | 141(17) | 9(3) | 17 | 10 | 299 |
| | | | 計59日間 | | | | | | | |
| 平成12年度(13) | ロシア(ウラジオストク)<br>米国(ホノルル)<br>トンガ(ヌクアロファ)<br>ニュージーランド(オークランド)<br>《タヒチ、シンガポール》 | カナダ、チリ、コスタリカ、エクアドル、フィジー、メキシコ、オランダ、パラグアイ、スペイン、タンザニア、ベネズエラ | 平成12.8.28～9.5 9日間 | 平成12.9.5～10.23 49日間 | 117(2) | 135(15) | 10(3) | 16 | 12 | 290 |
| | | | 計57日間 | | | | | | | |
| 平成13年度(14) | フィジー(スバ)<br>ニュージーランド(オークランド)<br>シンガポール(シンガポール)<br>タイ(バンコク)<br>《サイパン》<br><br>※ 訪問国からの参加青年はなし | オーストラリア、バーレーン、ブラジル、エジプト、フィンランド、ギリシャ、インド、ケニア、モーリシャス、南アフリカ、スリランカ、アラブ首長国連邦、英国、米国 | 平成13.10.17～10.25 9日間 | 平成13.10.25～12.13 50日間 | 119(2) | 139(14) | 7(3) | 14 | 11 | 290 |
| | | | 計58日間 | | | | | | | |
| 平成14年度(15) | オーストラリア(ケアンズ)<br>米国(ホノルル)<br>カナダ(バンクーバー) | カメルーン、チリ、フィジー、メキシコ、ニュージーランド、スペイン、スリランカ、トンガ、ベネズエラ | 平成14.10.22～10.31 10日間 注 | 平成14.10.31～12.13 44日間 | 117(2) | 130(12) | 9(3) | 15 | 10 | 281 |
| | | | 計53日間 | | | | | | | |
| 平成15年度(16) | インド(ムンバイ)<br>タンザニア(ダルエスサラーム)<br>セーシェル(ヴィクトリア)<br>《シンガポール》 | バーレーン、エジプト、ニュージーランド、ノルウェー、ペルー、ロシア、ソロモン、アラブ首長国連邦、米国 | 平成16.1.13～1.21 9日間 | 平成16.1.21～3.3 43日間 | 124(2) | 134(12) | 11(4) | 14 | 10 | 293 |
| | | | 計51日間 | | | | | | | |
| 平成16年度(17) | オーストラリア(シドニー)<br>ニュージーランド(ウェリントン)<br>フィジー(スバ)<br>《サイパン》 | カナダ、コスタリカ、ケニア、モーリシャス、メキシコ、ポーランド、トルコ、米国、ベネズエラ | 平成17.1.11～1.19 9日間 | 平成17.1.19～3.2 43日間 | 120(2) | 140(12) | 9(6) | 13 | 13 | 295 |
| | | | 計51日間 | | | | | | | |
| 平成17年度(18) | インド(チェンナイ)<br>ケニア(モンバサ)<br>モーリシャス(ポートルイス)<br>《シンガポール》 | オーストラリア、バーレーン、ブラジル、カナダ、ギリシャ、モロッコ、スウェーデン、トンガ、アラブ首長国連邦 | 平成18.1.10～1.19 10日間 | 平成18.1.19～3.2 43日間 | 118(2) | 132(12) | 10(5) | 13 | 13 | 286 |
| | | | 計52日間 | | | | | | | |
| 平成18年度(19) | オーストラリア(ブリスベン、シドニー)<br>ニュージーランド(ウェリントン)<br>《バヌアツ》 | カナダ、チリ、エジプト、フィジー、メキシコ、オマーン、ロシア、セーシェル、ソロモン、トンガ、英国、イエメン | 平成19.1.16～1.25 10日間 | 平成19.1.25～3.8 43日間 | 117(2) | 135(13) | 8(5) | 14 | 13 | 287 |
| | | | 計52日間 | | | | | | | |
| 平成19年度(20) | オマーン(マスカット)<br>インド(チェンナイ)<br>《シンガポール》 | バーレーン、ブラジル、コスタリカ、フィンランド、ニュージーランド、ソロモン、南アフリカ、スペイン、タンザニア、米国、バヌアツ | 平成20.1.15～1.24 10日間 | 平成20.1.24～3.5 42日間 | 116(2) | 134(13) | 8(4) | 27 | | 285 |
| | | | 計51日間 | | | | | | | |

注：平成14年度(第15回)の日本国内活動には、航空機を使ったシンガポールへの移動日を含む。

| 年度(回) | 参加国 | | 期間 | | 乗船者 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 訪問国（寄港地）《給油・給水地》 | 訪問国以外の外国青年の参加国 | 日本国内活動 | 運航 | 日本参加青年 | 外国参加青年 | 指導官 | 管理部 | 業務員等 | 計 |
| 平成20年度(21) | トンガ（ヌクアロファ）<br>ニュージーランド（オークランド）<br>《バヌアツ》 | カナダ、エジプト、フィジー、モーリシャス、ノルウェー、ペルー、アラブ首長国連邦、バヌアツ、ベネズエラ、イエメン | 平成21.1.14～1.23 10日間 | 平成21.1.23～3.3 40日間 | 108(2) | 138(13) | 7(2) | 28 | | 281 |
| | | | 計49日間 | | | | | | | |
| 平成21年度(22) | アラブ首長国連邦（ドバイ）<br>インド（チェンナイ）<br>《シンガポール、那覇》 | オーストラリア、バーレーン、エクアドル、エジプト、ギリシャ、ケニア、オマーン、スリランカ、トルコ、イエメン | 平成22.1.12～1.22 11日間 | 平成22.1.22～3.5 43日間 | 130(2) | 138(12) | 9(3) | 31 | | 308 |
| | | | 計53日間 | | | | | | | |
| 平成22年度(23) | フィジー（スバ）<br>オーストラリア（ブリスベン）<br>《ソロモン、バヌアツ、那覇》 | バーレーン、ブラジル、チリ、メキシコ、ミクロネシア、オマーン、ソロモン、スウェーデン、タンザニア、バヌアツ | 平成23.1.11～1.21 11日間 | 平成23.1.21～3.2 41日間 | 126(2) | 136(12) | 8(4) | 30 | | 300 |
| | | | 計51日間 | | | | | | | |
| 平成23年度(24) | インド（チェンナイ）<br>スリランカ（コロンボ）<br>《シンガポール、那覇》 | バーレーン、ブラジル、カナダ、エジプト、ニュージーランド、ペルー、ロシア、スペイン、トルコ、ベネズエラ | 平成24.1.18～1.31 14日間 | 平成24.1.31～3.5 35日間 | 129(2) | 131(12) | 8(4) | 29 | | 297 |
| | | | 計48日間 | | | | | | | |

| 年度(回) | 参加国 | | 期間 | | | 乗船者 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 訪問県（寄港地） | 外国青年の参加国 | 日本国内活動 | 運航 | 訪問国活動（日本参加青年のみ） | 日本参加青年 | 外国参加青年 | 指導官 | 管理部 | 業務員等 | 計 |
| 平成24年度(25) | 沖縄県（那覇）<br>兵庫県（神戸）<br>岩手県（大船渡） | バーレーン、チリ、コスタリカ、フィジー、ケニア、メキシコ、ニュージーランド、スリランカ、トルコ、アラブ首長国連邦 | 平成25.1.23～2.4 13日間 | 平成25.2.4～2.22 19日間 | 平成25.2.22～3.1 8日間 | 116(2) | 95(10) | 5(2) | 28 | | 244 |
| | | | 計38日間 | | | | | | | | |
| 計 | | | | | | 2,879(44) | 3,734(311) | 227(81) | 641 | | 7,481 |

## グローバルリーダー育成事業実績

| 年度 | 参加国 | | 期間 | | | | 乗船者 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 訪問県（寄港地） | 外国青年の参加国 | 日本国内活動（外国参加青年） | 陸上研修（全参加青年） | 船上研修（全参加青年） | 海外研修（日本参加青年のみ） | 日本参加青年 | 外国参加青年 | 研修アドバイザー等 | 管理部 | 業務員等 | 計 |
| 平成25年度 | 宮城県（石巻） | バーレーン、ブラジル、フィジー、インド、メキシコ、スウェーデン、タンザニア、トルコ | 平成26.1.22～1.26 5日間 | 平成26.1.27～2.3 8日間 | 平成26.2.4～2.12 9日間 | 平成26.2.12～2.20 9日間 | 87(2) | 71(8) | 1 | 23 | | 182 |
| | | | 合計30日間 | | | | | | | | | |

## グローバルユースリーダー育成事業「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」実績

| 年度 | 参加国 | | 期間 | | | | 乗船者 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 訪問県（寄港地） | 外国青年の参加国 | 日本国内活動（外国参加青年） | 陸上研修（全参加青年） | 船上研修（全参加青年） | 海外研修（日本参加青年のみ） | 日本参加青年 | 外国参加青年 | 研修アドバイザー等 | 管理部 | 業務員等 | 計 |
| 平成26年度 | 沖縄県（那覇）<br>岩手県（大船渡） | バーレーン、ブラジル、インド、ケニア、ニュージーランド、オマーン、ペルー、スリランカ、トルコ、英国 | 平成27.1.21～1.25 5日間 | 平成27.1.26～2.1 7日間 | 平成27.2.2～2.13 12日間 | 平成27.2.13～2.21 9日間 | 108(2) | 96(10) | 2 | 26 | | 232 |
| | | | 合計32日間 | | | | | | | | | |

## 次世代グローバルリーダー事業「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」実績

| 年度 | 参加国 | | 期間 | | | 乗船者 | | | | | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 訪問国<br>(寄港地)<br>《給油・給水地》 | 訪問国以外の参加国 | 日本国内活動<br>(外国参加青年) | 陸上研修<br>(全参加青年) | 船上研修<br>(全参加青年) | 日本参加青年 | 外国参加青年 | 団長・アドバイザー | 管理部 | 業務員等 | |
| 平成27年度 | インド（チェンナイ）<br>スリランカ(コロンボ)<br>《シンガポール》 | オーストラリア、バーレーン、チリ、メキシコ、ニュージーランド、ロシア、タンザニア、アラブ首長国連邦 | 平成<br>28.1.14<br>～1.19<br>6日間 | 平成<br>28.1.20<br>～1.26<br>7日間 | 平成<br>28.1.27<br>～2.29<br>34日間 | 121<br>(2) | 112<br>(10) | 5<br>(1) | 25 | | 263 |
| | | | 計47日間 | | | | | | | | |
| 平成28年度 | ニュージーランド<br>(オークランド)<br>フィジー（スバ）<br>《バヌアツ、<br>ソロモン諸島》 | ブラジル、カナダ、コスタリカ、エジプト、インド、ケニア、トンガ、ウクライナ | 平成<br>29.1.17<br>～1.22<br>6日間 | 平成<br>29.1.23<br>～1.28<br>6日間 | 平成<br>29.1.29<br>～3.3<br>34日間 | 118<br>(2) | 116<br>(10) | 5<br>(1) | 25 | | 264 |
| | | | 計46日間 | | | | | | | | |

## 平成29年度「世界青年の船」事業実績

| 年度 | 参加国 | | 期間 | | | 乗船者 | | | | | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 訪問国<br>(寄港地)<br>《給油・給水地》 | 訪問国以外の参加国 | 日本国内活動<br>(外国参加青年) | 陸上研修<br>(全参加青年) | 船上研修<br>(全参加青年) | 日本参加青年 | 外国参加青年 | アドバイザー | 管理部 | 業務員等 | |
| 平成29年度 | インド（コチ）<br>スリランカ（コロンボ）<br>《シンガポール》 | オーストラリア、メキシコ、モザンビーク、オマーン、ペルー、ポーランド、南アフリカ、スペイン | 平成<br>30.1.16<br>～1.21<br>6日間 | 平成<br>30.1.22<br>～1.27<br>6日間 | 平成<br>30.1.28<br>～3.2<br>34日間 | 125<br>(2) | 117<br>(10) | 3 | 30 | | 275 |
| | | | 計46日間 | | | | | | | | |

## 明治150年記念「世界青年の船」事業実績

| 年度 | 参加国 | | 期間 | | | 乗船者 | | | | | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 訪問国<br>(寄港地)<br>≪給油・給水地≫ | 訪問国以外の参加国 | 日本国内活動<br>(外国参加青年) | 陸上研修<br>(全参加青年) | 船上研修<br>(全参加青年) | 日本参加青年 | 外国参加青年 | 管理部 | 業務員等 | | |
| 平成30年度 | 沖縄（那覇）<br>オーストラリア（ダーウィン）<br>オーストラリア（ブリスベン）<br>《パラオ》<br>《ソロモン諸島》 | チリ、エクアドル、ギリシャ、ソロモン、スウェーデン、タンザニア、トルコ、アラブ首長国連邦、バヌアツ | 平成<br>31.1.15<br>～1.20<br>6日間 | 平成<br>31.1.21<br>～1.26<br>6日間 | 平成<br>31.1.27<br>～3.1<br>34日間 | 124<br>(2) | 116<br>(10) | 34 | | | 274 |
| | | | 計46日間 | | | | | | | | |

## 令和元年度「世界青年の船」事業実績

| 年度 | 参加国 | | 期間 | | | 乗船者 | | | | | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 訪問国<br>(寄港地)<br>≪給油・給水地≫ | 訪問国以外の参加国 | 日本国内活動<br>(外国参加青年) | 陸上研修<br>(全参加青年) | 船上研修<br>(全参加青年) | 日本参加青年 | 外国参加青年 | 管理部 | 業務員等 | | |
| 令和元年 | メキシコ（エンセナーダ）<br>《ハワイ》 | バーレーン、ブラジル、エジプト、フランス、英国、ケニア、ニュージーランド、ペルー、スリランカ | 令和<br>2.1.10<br>～1.11<br>2.21<br>～2.24<br>6日間 | 令和<br>2.1.12<br>～1.14,<br>2.18<br>～2.20<br>6日間 | 令和<br>2.1.15<br>～2.18<br>35日間 | 115<br>(2) | 112<br>(10) | 34 | | | 261 |
| | | | 計47日間 | | | | | | | | |

## 令和3年度「世界青年の船」事業（オンライン）実績

| | 外国参加青年の参加国 | オンライン交流 | 日本参加青年 | 外国参加青年 | 事務局員等 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 令和3年度 | オーストラリア、ニュージーランド、オマーン、ポーランド、ロシア、南アフリカ、スリランカ、スウェーデン | 令和4.1.15, 1.22, 1.29, 2.12<br>4日間<br>計4日間 | 39 | 37 | 5 | 81 |

### 令和４年度「世界青年の船」事業（ハイブリッド）実績

| | 外国参加青年の参加国 | オンライン交流 | 仮想空間における交流 | 対面交流（日本国内活動） | 日本参加青年 | 外国参加青年 | 事務局員等 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 令和４年度 | オーストラリア、バーレーン、ブラジル、カナダ、メキシコ、オマーン、ペルー、ポーランド、南アフリカ、スウェーデン | 令和 4.11.26, 11.27, 12.3, 12.4, 12.10, 12.11 6日間 | 令和 4.11.19 ～ 12.28 40日間 | 令和 5.2.7 ～ 2.20 14日間 | 53 (2) | 90 (10) | 34 | 177 |

### 令和５年度「世界青年の船」事業実績

| | 外国参加青年の参加国 | オンライン交流 | オンラインツールにおける交流 | 対面交流（日本国内活動） | 日本参加青年 | 外国参加青年 | 事務局員等 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 令和５年度 | アルゼンチン、エチオピア、フランス、インド、アイルランド、ヨルダン、ケニア、メキシコ、ニュージーランド、ソロモン諸島、トルコ、UAE、ザンビア | 令和 5.11.4, 11.5, 11.11, 11.12, 11.25, 11.26 6日間 | 令和 5.11.4 ～令和 6.2.29 118日間 | 令和 6.1.24 ～ 2.21 29日間 | 91 (2) | 117 (13) | 47 | 255 |

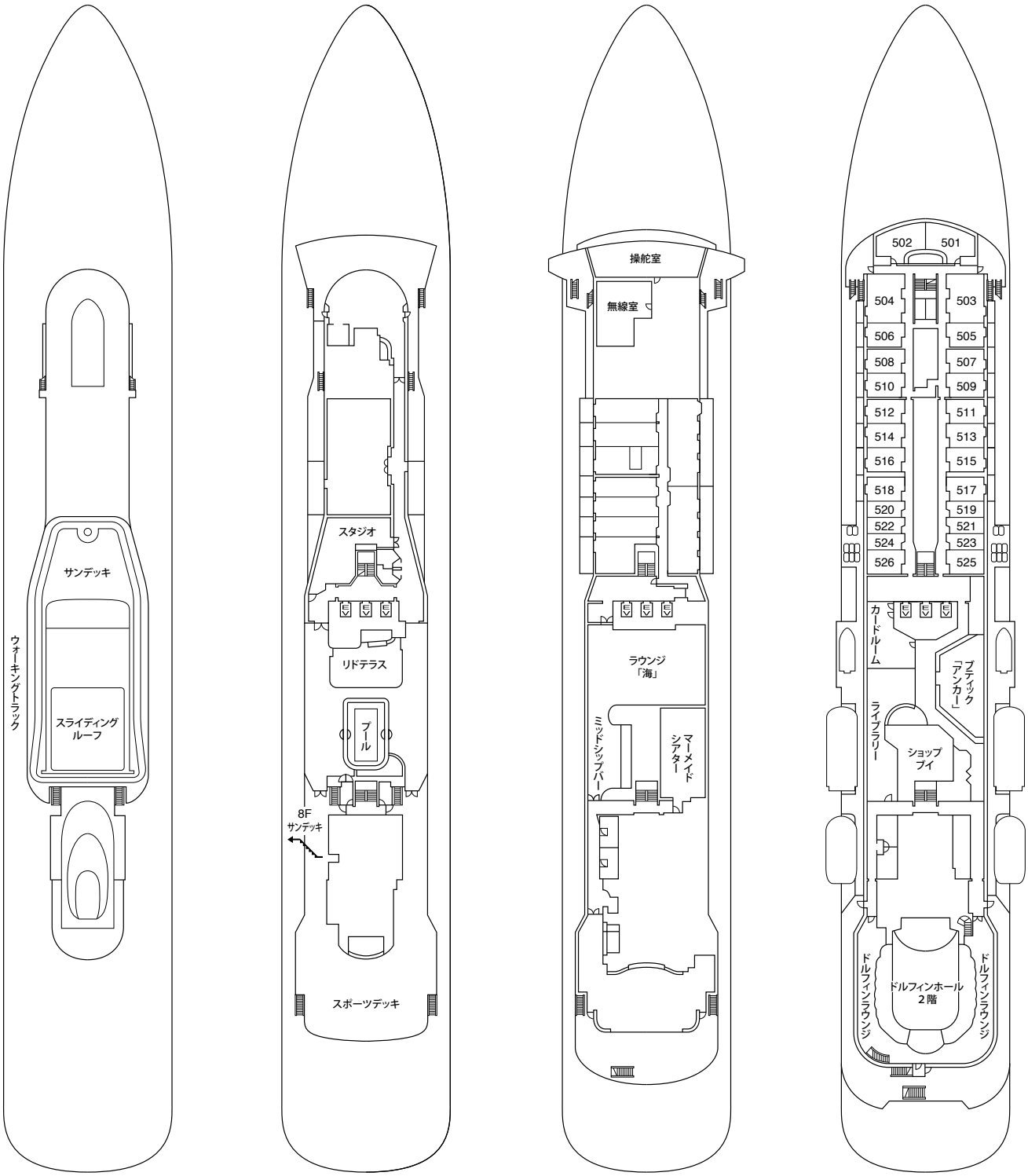
### 令和６年度「世界青年の船」事業実績

| | 外国参加青年の参加国 | オンライン準備会合 | オンラインツールにおける交流 | 対面交流（日本国内活動） | 日本参加青年 | 外国参加青年 | IYEO | 管理部 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 令和６年度 | アルジェリア、オーストラリア、ブラジル、ジブチ、エジプト、オマーン、パナマ、ペルー、ポーランド、セネガル、スリランカ、スウェーデン | 令和 6.12.7 | 令和 6.12.9 ～ 2.28 81日間 | 令和 7.1.24 ～ 2.21 29日間 | 77 (2) | 95 (12) | 3 | 39 | 214 |

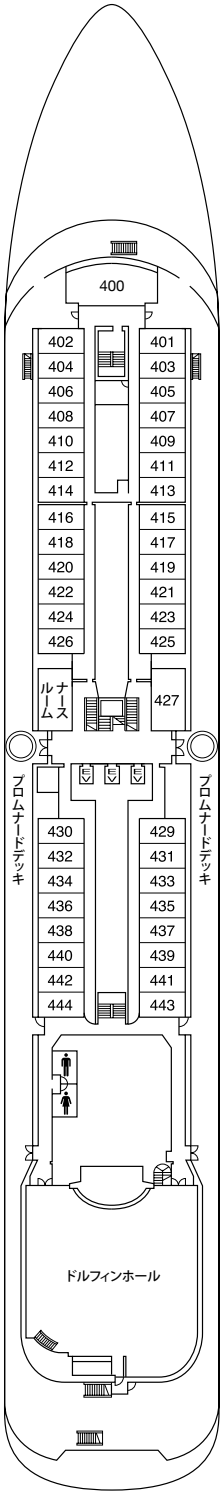
| | 日本参加青年 | 外国参加青年 | 団長・指導官・研修アドバイザー等 | 管理部・業務員・事務局員等 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|
| 全事業の参加者合計人数 | 3,937 (64) | 4,813 (414) | 246 (83) | 963 | 9,959 |

注：日本参加青年及び外国参加青年の欄における（　）内は、ナショナル・リーダーの数の再掲である。
団長、指導官の欄における（　）内は、外国人の数の再掲である。
≪≫内は、給油・給水及び参加青年の下船等の理由で寄港した地である。
平成14年度（第15回）の日本国内活動には、航空機を使ったシンガポールへの移動日を含む。
下線で示した国は、日本参加青年が航空機で訪問した国である。
令和３年度の参加青年数は、一部課程を欠席するなど未了の者を含む。
令和３年度の事務局員等は、ファシリテータ（４名）及び統率相談員（１名）。
期間の中に日本参加青年の出航前・帰国後・事後研修は含まない。

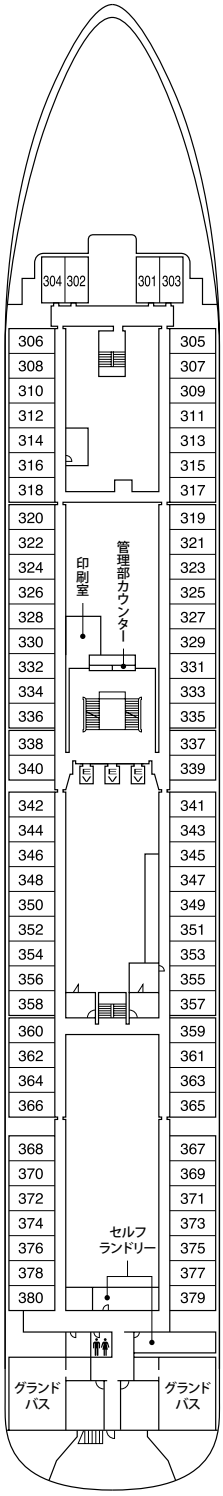
# 8 にっぽん丸船内配置図



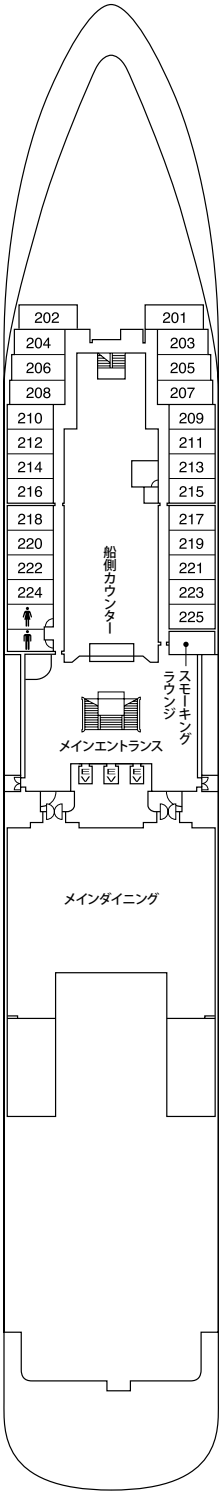

8F　7F　6F　5F


400
402
404
406
408
410
412
414
416
418
420
422
424
426
401
403
405
407
409
411
413
415
417
419
421
423
425
ナースルーム
427
プロムナードデッキ
プロムナードデッキ
430
432
434
436
438
440
442
444
429
431
433
435
437
439
441
443
ドルフィンホール

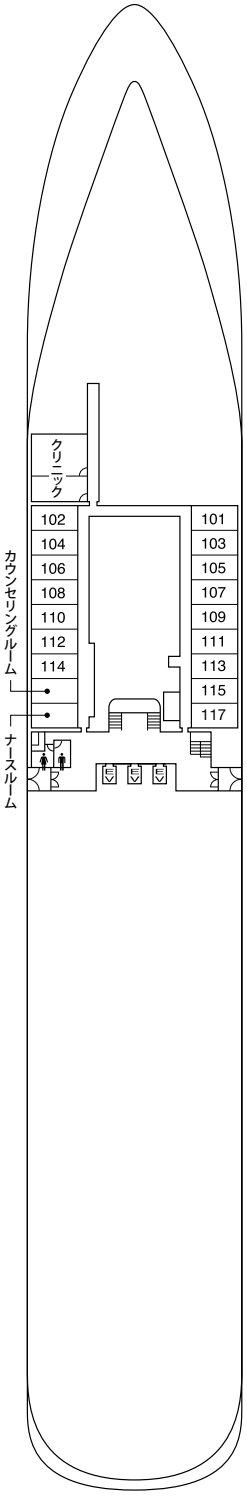
4F


304
302
301
303
306
308
310
312
314
316
318
305
307
309
311
313
315
317
320
322
324
326
328
330
332
334
336
338
340
319
321
323
325
327
329
331
333
335
337
339
印刷室
管理部カウンター
342
344
346
348
350
352
354
356
358
360
362
364
366
341
343
345
347
349
351
353
355
357
359
361
363
365
368
370
372
374
376
378
380
367
369
371
373
375
377
379
セルフランドリー
グランドバス
グランドバス

3F


202
204
206
208
210
212
214
216
218
220
222
224
201
203
205
207
209
211
213
215
217
219
221
223
225
船側カウンター
スモーキングラウンジ
メインエントランス
メインダイニング

2F


クリニック
102
104
106
108
110
112
114
101
103
105
107
109
111
113
115
117
カウンセリングルーム
ナースルーム

1F

内閣府青年国際交流事業
**令和6年度「世界青年の船」事業報告書**

発　行　内閣府
〒100-8914
東京都千代田区永田町1-6-1
TEL: 03-6257-1433
URL: https://www.cao.go.jp/koryu/

編　集　一般財団法人青少年国際交流推進センター
〒103-0013
東京都中央区日本橋人形町2-35-14
東京海苔会館6階
TEL: 03-3249-0767
URL: https://www.centerye.org/
編集協力　日本青年国際交流機構
URL: https://www.iyeo.or.jp/

内閣府青年国際交流事業

# 令和6年度「世界青年の船」事業報告書